

裏切りの代紋（後編2 敗残編）

特別な客

何時もの様にチンピラ達が特殊な性技を仕込まれ性奴隷同然の売春婦に身を堕とした、かつては目高組の頂点に君臨していた女侠客達を、大金を叩いて買った客の前に引き出すために、笑いさざめきながらドヤドヤと牢舎の中に入って来た。

その男達に混じって何故か今日は銀子の姿も在った。

「ほら！出るんだ！今日のお客は晴江と暁美の二人と同時に遊ぶ事を希望している・・・」

晴江と暁美の閉じ込められた檻に掛けられた頑丈な南京錠をガチャガチャと音をさせて外しながら、男達が嬉しそうに言った。

この屋敷に閉じ込められ数々の変態的行為を強制され、一人だけならどんな屈辱的な責めを受けても堪えられるようになっていたが、又しても実の母娘で恥を晒さなければならないのかと思うと、親子は暗い気持ちに襲われるのであった。

客から強制される連日の激しい性行為に疲労の溜まった身体を布団から身を起こすと、物憂げにベットから起き出し、無言のまま低い檻の出口を腰を折って這い出るのであった。

そして、男達に促されて、何時もの様に化粧台の前に腰を落とした。

女達は何時も全裸のまま睡眠を取っており、何も身に纏うこと無く化粧台のに向かっているのであったが、完全に空調された地下のこの一郭は、寒さを感じることはなかった。

冷めたい表情で化粧を施して行く、雪の様に白い女達の裸身を見詰めながら、周囲を取り巻く男達は、舌なめずりをしながら、何度見ても見飽きない美しい身体と美貌を保っていると惚れ惚れと見惚れるのであった。

寝乱れた髪も綺麗にセットし直され、荒淫にやつれた顔も塗り隠すよう、美しく化粧が施され、女盛りの精気と色香がすっかり蘇った様に感じられた。

かつてはヤクザ社会のトップに君臨して栄華を誇っていた強い女が、連日休むことなく好色な男達にその肉体を提供し続けた結果、男勝りの気性の激しさはすっかり影を潜め、成熟した女性の漂わせる濃厚な色香を周囲に振り捲き、まるで神話に登場する、女のエロスを象徴する女神の様なオーラを発散させ、取り巻く男達も神々しいものを見る様な目付きで見詰めるのであった。

一方、娘の方も此処に連れ込まれた時は、未だ充分に男女の愛も知らない様なウブな娘であったが、世の女達が一生掛かっても体験する事はないだろう激烈な性愛の数々を短期間で受け、男の精を豊満な女体に常時受け入れ、まだ若い身体には初々しい幼さは残っているものの、開発された女としての部分は著しく開花し、男心を誘惑せずにはおかない、甘美なエロスのオーラを発散していた。

「ほら！何時もの様に恥ずかしい所の毛を剃るんだ！」

化粧が完了し、疲労の色を浮かべていた顔もファンデーションの下に隠され、すっかり美しさを取り戻した女達を満足げにシゲシゲと見詰めながら、男達が好色な笑みを浮かべた。ホッと息を吐くと、晴江と暁美は無言で立ち上がり、化粧台のストールの上に片脚を載せて股間を開いた。

そして、無言のまま化粧台の上に置かれたボディシェーバーに手を伸ばした。

ジーと微かな電動音をさせてシェーバーが剥き出しになった秘所に押し当てられた。

すっかり性の奴隷と化してしまった母娘は男達が好奇な視線で見詰めているのを無視する様に無様な姿勢で股を大きく開き、手鏡を手にして開け放たれた股間を映し、自らの女陰の周りの毛を電気カミソリで剃り上げるのであった。

女達がかざす手鏡には、連日連夜男達の肉塊を受け入れ、今又新たに責めを加えられる事になる生々しい肉の割れ目がハッキリと映っていたが、特に何の感情も浮かべず虫の羽音の様な電動音をさせてカミソリをはわすのであった。

片脚をストールに載せ、背を丸めて手鏡を覗き込みながら、自分自身で陰毛を剃り上げる惨めな母娘をニヤニヤして見詰めていた男達であったが、

「ほら！最後の仕上げをしてやるぜ！」

と、粗方剃毛の終わった母娘をストールに両手を突かせて、尻をこちらに向かせる姿勢を取らせた。

女達の両隣に陣取る若いチンピラがむっつりと張った尻たぶに手を掛けると思い切り左右に押し開いた。

男の力の前に恥ずかしい所を無理やり開陳されてウッ！とうめき声を上げた。

秘められた部分に外気が触れ、次に近づいた顔を寄せた男の鼻息が掛かった。

「へへ・・・こんな所に無駄毛が残っているぜ！」

男達はシェーバーを取り上げると、剃り残しの陰毛を処理してやるとうそぶきながら、微妙

な振動をする電動部分を女陰の敏感な部分に押し当てて、嬉しそうな声を上げるのであった。何時もの事ではあるが、かつての親分への恩義も忘れ、いたぶりを繰り返そうとする忘恩のチンピラ達に自らの秘裂を大きく晒しながらも、込み上げる悔しさを臉を硬く瞑り、唇を硬く結んで耐えるのであった。

「こら！いい加減にしないで！お客様がお待ち兼ねよ！」

元の親分の母娘に悪戯する男達に銀子が注意した。

ほっと救われた様に、準備の調った晴江が自分の着物に手を伸ばそうとした時、

「今日は特別の客だからこれを身に付けて貰うわ！」と、男達の陰にいた銀子が前に進み出した。

銀子の手には金糸で織られた目映く輝く布切れが持たれていた。

それは金糸を細長く布の様に編んだ物で、硬い糸でゴワゴワとしていたが男の絞める褌を模した物である事が判った。

「へへ・・・コイツは綺麗だぜ！よし！俺たちも身に付けるのを手伝ってやるぜ！」

銀子の手にしたキラキラと金色に輝く六尺褌の布切れを見詰めた男達が、好相を崩した。

「曉美さんにはこちらよ！」と、手にした紙袋から濃いピンクの布切れを取り出した。

それは、濃いピンク地に金糸で刺繍が施され、大小幾つものスワロフスキーで飾り立てられた扇情的なバタフライであった。

「ああ・・・そんなに強く絞めないで・・・」

以前^{かしず}傳っていた女親分を存分にいたぶる快感に駆られた男達から、金糸の布を搾り上げ、強い男の力で晴江の股間を潜らせて、思い切り秘裂の間に食い込まされたので、思わず体を振って悲鳴を上げた。

「何言ってやがる！男勝りの晴江姐さんだぜ。これ位強く絞めなきゃ格好がつかないぜ！」ザラザラとした金糸で織られた布が容赦無く柔肉の間に厳しく食い込む感触に晴江が悲鳴を上げた。

男達は、寄って集って、豊かに脂肪を溜めた柔らかな秘肉に左右から手を掛けて押し広げ、むき出しになった秘園の襞や突起にゴリゴリと押し当てるように硬い布を食い込ませた。

後ろに回った男が股間を割って後ろに回された金色の布を掴むと、強い男の力で、思い切り真上に引き上げた。それは、褌を締めると言うよりは、硬い金属の帯で股間縛りの責めを与えるようであった。

男達が面白そうに晴江の回りに寄って集って、締め込みを手伝うと云う口実で悲鳴を上げさせていたのであった。

細く絞ったゴワゴワとした布が柔らかな媚肉に食い込み、ポツテリと脂を載せた秘裂の間に半ば埋没した。

調子付いた男達は、股間の間を潜ったキリキリと引き絞った布を腹の回りに回して形良く結び止めを終えた。

見事な刺青に飾られた裸身に金色に輝く締め込みをした晴江の姿が一種悽愴な姿に男達に映った。

男達の野卑な視線を全身に浴びて晴江が恥ずかしそうに頭を垂れた。

「お嬢さんの方も出来上がったぜ！何とも可愛いじゃないか！」

濃いピンク地に金の刺繍やキラキラと光るガラス玉を散りばめた扇情的なバタフライを股間に付けただけの暁美の姿に男達が歓声を上げた。

豊満な乳房から続く乳白色の形良い腹回りのラインを通して、太股の合わせ目に男心をそそる様な扇情的な小さなバタフライが秘部を覆い隠していた。

バタフライは前の恥ずかしい部分を辛うじて隠すだけの大きさしか無く、豊かな臀肉を割って通った金色の細い紐で腰に回した紐に縛り付けられているだけで、後ろから見ても卑猥な姿であった。

「それじゃ行くわよ！何時もの様に手錠を掛けて！」

銀子が男達に号令を掛けた。

前回の脱走未遂事件で、この女達が死に物狂いで暴れ出したら自分達では歯が立たない事を思い知らされた男達は、檻から外に出す時は、反乱を警戒して女達に後ろ手錠を掛け、脚には得意の足蹴りを封鎖するため、歩幅程度の長さの鎖が付いた足枷を装着する事になっていたのだった。

男達から両腕を後ろに捻り上げられ、手錠を嵌められ両手の手錠の間の鎖には南京錠により長い鎖が取り付けられ背後に立つ男がその端を握った。更に犬の様に鎖付きの首輪を嵌められ前に立つ男が鎖を握りしめた。

こうして手足の自由を塞がれ前後から鎖に繋がれ完全に抵抗不能で有ることを確認した男達が二人を牢舎から連れ出そうとした。

「えっ！このままですか？！」

何時もならこの様な卑猥な下着を着けた後、その上に着物などを着て客先に行く事が常であるのに、全裸とほとんど変わらぬ姿のままで表に連れ出そうとする男達に、驚き恐れた様に晴江が声を出した。

「そうよ！今日は特別のお客さんだからその格好で出るのよ！・・さあ！時間も無い事だし、早く連れて行って！」

と、男達に晴江達を連れ出す様に促した。

「私は残ってお竜姐さんの着付けを手伝うから、さっさと連れて行って！・・良い事、今日のお客様は特別なお客様だから、気に入られるように一生懸命励むのよ！」

と、唇の端に意味深な微笑を浮かべた。

この連中に逆らっても無駄な事を知っている母娘は、黙って男達に囲まれて牢舎の出口に向かった。

「それじゃ、行ってくるね・・」と、男達から首輪に取り付けられた鎖を引かれながら、何時もの様に寂しい笑みを檻の中の奈和親分に向けた。

剛沢と黄原から受けた暴行により脳に重大な損傷を受けてまともな意識を失ってしまっている奈和は虚ろな目で、母娘の方を見遣った。

お竜も牢の鉄格子を握り締めたまま、まるで奴隷市場に引き出される女奴隷の様に男達に連行されて行く、大姐とお嬢の後ろ姿を不安げな目で見続けるので在った。

地下から一階に上がる階段を登り、暖かく暖房されていた建物の外に一步踏み出ると、裸同然の女達はその寒さに震えた。

女達が此处に連れ込まれてから既に何ヶ月も経っていた。

表は木枯らしの吹きすさぶ季節となっていた。

容赦無い北風に吹きさらされ、女達の肌は粟毛立ち乳首は固く尖って突き出した。

何時もなら衣類に覆われて寒風も防ぐ事が出来るが、今日は腰の回りに僅かに布切れを着けただけの全裸と同然で在ったので寒さが骨身に染み込んだ。

最初歩き始めた時は股間を責める硬い布の刺激に苦痛を与えられたのであったが、今は強烈な寒さに神経も痺れ、何も感じなくなっていた。

ガタガタと全身を震わせ、カチカチと歯を噛み鳴らして、自分達を弄ぶ客が待つ建物に向かっていた。

その距離は、たかだか30メートル程であったが、その道のりが永遠の長さの様に感じられた。

どうせこの後、男達の慰み者になるのだから、早く暖かな部屋の中に連れ込まれて男達の責めを受けた方がましだと思う様になっていた。

途中まで様子を見に来た銀子が、

「寒い？可哀想にね。今貴女たちの牢と売春部屋との間に地下通路を造る計画を立てているから、もう少しの間だけ我慢してね！・・売り物に風邪をひかれたら、元も子も無いからね、・・地下トンネルが出来たら、冬の間や雨の日はそちらを通してあげるからね・・」と、励ます様に言った。

全裸同然の姿で寒風の中を歩まされ、身体の芯まで凍えてしまい、歯の根も合わない程ガチガチと歯を鳴らし、押さえも効かず全身をガタガタと震わせながら、漸く女達の売春部屋の設けられた建物に到着した。

建物に入って、身を切る様な寒風から逃れる事が出来。ホッとする女達であった。

それでも、すっかり冷え切った身体は真っ青に青ざめ、暖房された建物の中に入っても震えが止む事は無かった。

二人が連れ込まれたのは、晴江が身体を売る時に使う和風の売春部屋であった。

晴江達を連行して来た男が、上がり框の所で奥に向かって、女達を連れて来ました！と呼ばわった。

それに応える様に、ご苦労だったな！と聞き覚えのある野太い声が聞こえた。

その声は間違い無く剛沢の声で在る事を二人は理解した。

今日の客とはひょっとして剛沢？と、女達はゾッとする様な不安な思いに駆られた。

玄関の障子がサッと左右に引かれた時、其処に剛沢と伴に佇む男の姿を目にして、晴江も暁美の思わず息を呑んだ。

「あなたは英雄^{ひでお}！」

晴江が悲鳴の様な声を上げた。

何と其処には剛沢と伴に和室の炬燵に脚を入れて寛いだ風情で座っている、晴江の実の弟の英雄の姿が在ったからであった。

そして、二人が温々と入る炬燵の前には大きなテレビが置かれて、其処にはこれまで晴江が客の前で曝して来た恥辱の場面が鮮明に映し出されていた。

剛沢と自分の弟が楽しげに酒を酌み交わし、笑いながら自分の痴態を見ていた事は間違い無

いーと確信すると、込み上げる羞恥にブルブルと身体を震わせた。

そして、「いけない！そんなモノを見てはいけない！」と、羞恥で弟の方をまともに見れず、顔を背け激しく頭を振りかぶり、視線を避ける様に股間を堅く綴じ合わせ、身体を小さく折りながら、悲鳴の様なヒステリックな声を上げた。

「良いじゃないか！姉さんの熱演している場面を見ていただけたから・・・それにしても姉さんも好きな女だな？客のモノを嬉しそうに啜えて本気汁をダラダラと流してさ・・・」

炬燵に脚をいれたまま、晴江達の方を向いて嬉しそうに笑いながら、酒に濁った妖しい目を向けて応えた。

「英雄！何故貴男が此処に居るの！」

犬の様に鎖に繋がれた惨めな姿を実の弟の目に晒したまま、混乱して堪りかねた様に大声を上げた。

ヒステリックに叫び上げる晴江を馬鹿にする様に、「何故って、^{しょうない}莊那井組は大亜門戸会の杯を受ける事になったんだよ・・・」と、冷たく突き放す様に言った。

「そんな事って・・・」

今目の前で起きている事が、何もかも理解出来無くなった晴江の頭は混乱し、取り乱して、身悶えしながら泣き叫ぶ様な声を上げた。

「親分は、一体どうしたの！？」

「親父か？親父は目高組が敗れて大亜門戸会の軍門に下ったと云う知らせを聞いた途端、一機に頭に血が登って脳溢血で倒れてしまったよ・・・今でも口も利けず、全身不随で身体も動かせず寝たきりの生活さ・・・」

「ああっ・・・そんな事って・・・」

実の父親が目高組の敗戦の悲報にショックを受けて寝たきりになったしまったと聞いて悲痛な声を上げた。

「親父は前から大酒飲みで、塩辛いモノや脂っこいモノが大好きだったから、元々血管が痛んでいたんだろう・・・それが目高組が敗れて姉ちゃん達が大亜門戸会に捕らわれたらしいと云う情報を聞いて一機に血圧が上がったんだろうな。」

実の父の異変にも関わらず、笑いながら晴江に経緯を教える英雄であった。

実の弟の目の前に全裸に近い扇情的な姿で立たされたまま、晴江の心は激しい衝撃に打ち震え、今にもその場に崩れ落ちそうになった。

晴江の父は、莊那井組という古くから地方に勢力を張る暴力団の親分であった。

まだ目高組が弱小の目立たないヤクザの組に過ぎなかった時に、青年時代の奈和と知り合い、その漢^{おとこ}としての器量に惚れ込み、当時としては遥かに格下の組織に過ぎなかった目高組の跡取り息子に娘の晴江を嫁に出した経緯があったのだった。

晴江の父が見込んだ通り、晴江と結婚した後の奈和は、組を引き継ぎ、その持っている力を存分に発揮し、晴江も内部から奈和を助け、暫くすると目高組は莊那井組を凌ぐ大きな組織となった。

晴江には弟が一人いたのであるが、この男は何をやらせても中途半端で役に立たない男で、常々父親も「娘と息子が逆だったらどんなに良かったろうと・・・」と嘆いていたのであった。弟は何事に関しても優秀で男勝りな姉と常に比較される事により、物心付いてから繰り返し自尊心を傷付けられ、大きなコンプレックスを抱えて生きて来たのだった。

とうとう父親もこの駄目息子に愛想を尽かせ、自分が引退した後は、息子が組を継いでも組を運営していく事は無理と考え、莊那井組を目高組に吸収してもらい、子分達の面倒を見て貰おうと決意する様になっていた。

さすがに英雄に面と向かってこの考えを告げた訳では無かったが、父は自分に組を譲らず、姉の物になってしまうんだーと気付いて、英雄は何時しか自分の無能さを棚に上げて、父と晴江を逆恨みする様になっていたのであった。

所が、目高組の敗戦の報せに驚愕して卒中を起こし父が倒れたのを奇貨として、苦々しい目で見る古参幹部を無視して、莊那井組の跡目と自称するようになったのであった。

莊那井組の親分である自分の父が、脳溢血で倒れ、後を継いだ弟が大亜門戸会の軍門に下ったという事態を知って、晴江はこれまで必死に堪えてきた物がガラガラと崩れ落ちるのを感じた。

巨大化した大亜門戸会相手に、荷は重すぎるとは言え、あの勇敢な父なら愛する娘のため、可愛い孫のため、必死になって挑み掛かって来る物と信じていた。

自分達が救出される最後の^{チャンス}機会は莊那井組が殴り込みを掛けて来る時しか無いと密かに思っていたのであった。

その信頼していた父が倒れ、実の弟が敵側に回るとは！・・・絶望感で目の前が急に真っ暗になり、暈の上にヘナヘナと腰を崩してしまった。

そして、憎い剛沢の面前である事も忘れて、悔しさに大声で泣きじゃくり始めた。

隣で事態を聞いていた曉美も、あの優しくて強いお爺ちゃんはまだ自分達を助けに来る事は無いんだと思うと、大声で泣き叫ぶ母に身体を寄り添わせて、声を併せて泣き始めた。

気の強い男勝りで決して人の前で涙を浮かべる事の無かったあの姉が、裸のまま畳の上で片膝立てて、泣き声を上げる姿を見て、これまで感じていたコンプレックスが少しずつ癒やされるように感じる英雄であった。

英雄という偉そうな名前を付けて貰ったが、周囲からは常に馬鹿にされ、何かにつけて比較されていた優秀な姉が、悪趣味な六尺禪一枚を身に付けただけの哀れな姿で男の許に現れるという、最下層の娼婦に身を堕とし、今、目の前でそこいらの弱い女の様に泣き声を上げている姿を見ると快哉を叫びたい気持ちとなった。

英雄は手元に置いた鞆の中からカメラを取り出すと、淫靡な下着を身に着けただけで涙する晴江の姿を写真に撮り始めた。

シャッターを押す度にストロボの閃光が部屋の中に煌めき、晴江は冷や水を浴びせられた様なショックを受けた。

「何をしているの！イヤ！撮らないで！」

ストロボの閃光を浴びせられながら、悲鳴の様な声を上げて身悶えた。

「へへ・・・良いじゃないか。お姉ちゃんが禪一丁のみっともない姿で客の前に出ている写真を親父に見せてやるぜ・・・親父は脳の血管が切れて、全身不随で、言葉も喋れなければ、身体を動かすことも出来ないけど、意識だけはまだしっかりしているからな・・・この写真を見せたら、驚いて一機に頭に血が登って、未だ残っている血管も切れておっ死^ちんでしまうぜ！姉ちゃんは親殺しだぜ！」と、笑い声を上げた。

まるで猫が鼠をいたぶる様に、逆らえない姉を言葉でいたぶって、これまでの劣等感を晴らすようにする弟であった。

弟の陰險な虐めに涙を流して身悶えるのであった。

「おい！何時まで母子してお涙頂戴をやっていやがんでえー！さっさとお客様の相手をしねえか！」

剛沢の怒鳴り声を受けて、悲しみに打ち拉がれていた心が残酷な現実に戻された。

こうして、たった一人の実の弟も敵と手を組み自分を虐待する側に回り、莊那井組は大亜門戸会の配下に属して、全ての外部からの救出の見込みは無くなってしまったこの上は、残された道は大亜門戸会のお抱え娼婦として、この身体を変態客にひさいで行くしかないーと、

改めて思い知らされると、人間としての全ての心を失ったかの様に死んだ人間の様に諦め切った気持ちとなって、

「判りました。今日のお客様のお相手をさせていただきます。」

と、顔をサッと振って涙を飛ばすと、キッパリと返事をするのであった。

「折角、親子で揃っているんだ。お客様に入れて頂く前に母娘による白白ショーでも演じて貰おうか・・・」

目の奥に淫靡な光を煌めかせながら、剛沢が冷たく命じた。

襖を開けた続きの和室には何時もの様に布団が敷かれ、褥を重ねる準備は調っていた。

「判りました。」と、一言言った晴江は既に心を無にして実の弟の目の前で痴態を演じる決意をしていた。

娘の心を知るため、暁美の方を振り向いたが、暁美も既に決意を固めたのか母の視線を受けて小さく肯いた。

「それじゃ、足枷を解いてやろう・・・」

と、いつの間にか立ち去った警護の男達が残していった鍵の束を手にとると、二人の傍に寄り、反抗を封じるための短い鎖で繋がれた足枷を外し、鎖の付いた首輪と手錠に結びつけられた鎖を外した。

「但し、手錠はそのままだ・・・」と、意地悪く笑った。

何時もなら剛沢は巧妙に部屋の中に隠された監視カメラから女達の行動を見張るだけで、客の部屋に同席する事はないが、今回は晴江の実の弟という事で、剛沢としても英雄の事を信じ切っておらず、何が起こるか判らないという用心のため、此処に居座っているのであった。判りましたーと、鎖で結ばれた足枷を外され、歩行が楽になった二人が布団の方に向かおうとした時、

「ちょっと待て！お前達、催しているだろう？」

と、晴江の腰の小さな震えを目敏く目にした剛沢が声を掛けた。

「まあ、無理もねえやな・・・こんな寒い冬空を素っ裸に近い格好で歩かされて来たんだからな・・・ほら！こんなに身体が冷え切っているじゃないか？」

と、氷の様に冷たくなった晴江の下腹を撫でながら笑い声を上げた。

「ああっ・・・そんな事はありません・・・」

「嘘を吐くんじゃないぜ！白白ショーの途中で我慢出来ずにシャーとやり出したら味消し

だ！何時もの様に其処で立ちションをするんだ！」と表の石を敷き詰めた拷問部屋を顎で^{しゃく}割って命じた。

一度は娼婦になり切ろうと決意した晴江であるが、弟の目の前に排泄行為と謂う痴態を晒す羞恥に思わず尻込みをした。

「へへ・・・ビデオでご覧になった通り、此奴らは男の目の前で小便や糞をするのが大好きな変態女なんだ！男に見られながら^ひ放り出すのが嬉しくて仕方無いんだ。二人揃って粗相するところを良く見てやっておくんなせえ。」

剛沢から言われて英雄も妖しく目を光らせた。

既にこれまで晒して来た痴態をビデオで見られている事を改めて認識させられ、これ以上逆らっても無駄で在る事を自覚するのであった。

「判りました・・・これから粗相するところをお見せします。」

と、項垂れて小さな声で男達に告げた。

「お前達、そんな物を腰に巻いていたらノビノビと小便も出来ないだろう？お客様にお願いして取って貰え！」

一度は実の弟の目の前で惨めな姿を晒す決心をした晴江であったが、やはり弟の手で唯一腰の回りを覆っている布切れを取り去られ、惨めな秘部を晒す事に羞恥を覚えて、イヤイヤと小さく声を上げて頭を振った。

最近娼婦としての暮らしに慣れて来て、あまり羞恥心を表に出さなくなっていた女達であったが、実の弟の目の前で昔に返ったかの様に羞恥に身悶える晴江の姿を見て、新鮮なものを覚える剛沢であった。

「何を恥ずかしそうにモジモジしてやがる！娼婦なら娼婦らしくさっさとお客様にお願いしないか！」

立ち上がって晴江の傍まで来ると、尻をピシヤリと叩いて命じた。

抵抗の無意味さを知った晴江はグッと唇を噛みしめて、

「・・・お願いします、お客様、私たちの腰の物を取って下さい。」

と、血を吐く様な思いで、声を発した。

「そうかい、そうかい・・・お姉ちゃん達は手が後ろに回って、自分で下の物を脱ぐ事も出来ないんだから、実の弟の俺が面倒を見てやるぜ・・・」

嬉しそうに炬燵から抜け出すと笑みを浮かべながら晴江の傍に近づいて来た。

満面に喜色を浮かべ、晴江の身体に手を掛けた。

そして、「こんなに身体が冷え切っているじゃないか・・・」と、イヤらしく姉の裸身を撫で回した。

その遠慮無く撫で回す実の弟の指先の感触に、晴江もこれまでの客に感じたことの無い、羞恥にアッと呻いて身体をくねった。

一仕切り下腹や太股を撫で回して満足したのか、腰を覆う金糸の布の結び目に指を掛けた。

「へへ・・・中々しっかり結んでいるじゃないか？固くて禪も肉の中に食い込んでいるぜ・・・ほら、解けて来たぜ・・・」

漸く布を結んでいた結び目を解き終えると、長い布をクルクルと手繰る様に解き始めた。これまで金糸の締め込みにより覆われていた秘部が、段々剥き出しになり、弟にその部分を直視される事に羞恥を覚え、腰をくねらせた。

「へへ・・・さっきビデオでは見せて貰ったが、本当にこの部分はツルツルじゃないか！」嬉しそうに言いながら指を伸ばすと、女の縦線に沿って指先を匍わした。

「良い歳しやがって、ワレメチャンをこんなに丸出しにしやがってよ！」実の弟の指で秘裂の上を撫でられ、晴江がウッと声を上げた。

「それじゃ、次は暁美ちゃんのを取って上げるぜ！」

晴江の覆う物の無い下腹を間近で鑑賞した英雄は、満足した様にその隣に佇む自分の姪に当たる暁美に近づいた。

暁美は以前からこの叔父に好感を抱いていなかったが、ニヤけた笑みを浮かべながら近づいて来る男に虫酸が走るようなゾッとするモノを感じた。

英雄は一仕切り若い姪の裸身を撫で回し、楽しんだ後、僅かに腰を覆っていたバタフライを剥ぎ取る様に取り去った。

毛嫌いしていた叔父からその部分を直視されることに羞恥に身を揉んだ。

「暁美ちゃんもツルツルじゃない！」

剥ぎ取ったバタフライを握り締め、鼻に持ってきて匂いを嗅ぐ仕草をしながら、嬉しそうに声を上げた。

「それじゃ、お待ち遠様、これからション便をさせてやるぜ！腰が震えているじゃないか？もう我慢出来なかったんだろう？」

炬燵に脚を入れながら面白そうに見物していた剛沢が声を掛けた。

「判りました・・これから私たち母子で立って放尿するところをお見せします・・ただこのままでは床を汚して仕舞いますので、其処のグラスを取って下さい・・」

と、壁際に置かれた二つの大きなビールジョッキに視線を向けた。

晴江の意図を理解した英雄が、「へえー！こんな中にするのかい？」と、ジョッキを取りに向かった。

「私たちは両手を塞がれています。グラスを持つことが出来ません。どうかお客様の手で此処に押し当てて下さい・・」

そう言う晴江は、自ら股間を開き英雄を呼び寄せるのであった。

「こうかい？これで良いのかい？」

ジョッキを手にした英雄が晴江の太股にグラスの縁を押し当てた。

「ああ・・もっと上に・・もっと強く押し当てて・・」

興奮した英雄の息を股間に感じながら晴江は羞恥に身を揉みながら自ら大腿を大きく割り開いてジョッキを当てる位置を指示した。

「飛沫^{しぶき}が飛ばないように、お客様の手で晴江の割れ目を押し広げて下さい・・」

股間を大きく割りながら、更に秘裂を押し広げるよう甘い声で哀願する晴江の発する色香に酔った様に、左手でジョッキを支えたまま、右手の指先を晴江の秘裂を形作る柔らかな肉の上に置き、淫靡なたたずまいを見せる谷間を押し広げ、鮮やかな色を染めた柔らかな襞を捲り上げていった。

「へへ・・見えて来たぜ！お姉ちゃんのション便する穴がよ！」

間近で実の弟にすっかり押し広げられた陰部を見詰められる羞恥に、晴江は身体をブルブルと震わせた。

その羞恥に身悶える晴江の姿を炬燵に入ったまま剛沢は冷たい目で見続けた。

「ああっ・・出して良い？英雄！このままお姉ちゃんはお出して良いの？」

羞恥に冷静さを失った晴江が身悶えながら泣き叫ぶように言った。

「良いとも！俺が受けてやるから、姉ちゃんは好きなだけ搾り出すが良いぜ！」

英雄が叫ぶ様に言った瞬間、晴江は英雄の捧げ持つジョッキの中に放水を始めた。

堪えに堪えていた激しい水の勢いは、ジョッキの底を叩き、渦を巻いて流れ込んだ。

英雄はその凄まじい状態に、姉の小水で満たされて行くビールジョッキと自分の指で押し広げられたまま後から後から排泄し続ける秘園の奥の放水口を交互に見詰め続けた。

「へへ、随分と腹の中に溜まっていたじゃないか？ジョッキから溢れ出しそうだぜ！」

英雄が捧げ持つガラス容器の中は、晴江の股間から噴出した黄色い液体で上端近くまで満たされている行くのを見詰めながら面白そうに大声を上げた。

実の弟に羞恥の姿を目の前で目撃される惨めさに、晴江は立ち姿で放尿を続けながら嗚咽を始めた。

陰裂に添えていた指を離し、掌で下腹をグッと押し込んで最後の一滴まで姉の身体から汚水を搾り上げた。

英雄の手にするジョッキには、まるでビールの様な泡だった黄色い液体が縁まで満たされていた。

もう、良いのかい？と、姉を見上げながら聞くと、晴江も涙に咽びながらコクッと肯いた。これまで、何をやってもまるで敵わず、散々悔しい思いをして来た姉の惨めな姿を眺めて溜飲の下がる思いで、嬉しそうに口がほころんだ。

満足した様に立ち上がった英雄はもう一つの空のグラスを手に暁美の方に向かった。

実の弟の前で羞恥図を晒した母の姿を見せ付けられ、暁美は抵抗する事無く、叔父の押し付けるジョッキに、大人しく腰を前に突き出し、怖ず怖ずと股間を開いて行った。

こうして一番近い肉親に、凄まじい羞恥図を見られるというショックに半ば憔悴したような二人の女が居た。

「何時まで、そこでボーッとしてやがんだ！さっさとお客様に白白ショーをお見せしないか！」

畳の上に敷かれ準備の整った布団を指示して、剛沢が悄然とした様子の母子に大声を上げた。

完全な敗北を思い知らされた二人は、剛沢の言葉に力無く布団の方に向かって行った。

何時もの様に暁美が下になり、晴江がその上に身体を被せて行った。

この無残な現実を狂おしい女同士の愛欲の渦に溺れることにより、暫しの間でも忘れようとするかの様に、二人は唇を寄せ合い、互いの舌を絡め、後手に手錠を嵌められたままの不自由な姿勢で互いの乳房を擦り付けた。

実の母と娘が肉付きの良い太股を開いて互いの白い柔らかな下腹を擦り付ける淫靡な様子が英雄の視界から良く見渡せた。

忌まわしい現実を忘れようと、何時ものにも増して激しい女同士の愛に没頭する二人の股間からは何時しか透明な淫液が流れ始めていた。

二人は姿勢を変えて、仰向けになった暁美の顔を跨ぐように覆い被さり69の姿勢で充血し

て熱を帯びた互いの陰部に顔を埋めた。

母親が舌を使いやす様に大きく股を開き、晴江も娘を誘う様に大きく股間を拡げた。

そして、互いの秘奥から流れ出した愛液を音を立てて啜り、舌先を延ばして秘裂の間をまさぐり、更に多くの樹液を求めた。

剛沢と英雄の存在も忘れたかの様に淫欲に狂う女達の荒い息と、陰水を求めて激しく蠢く舌先の音が部屋の中に響いていた。

母子の演じる熟達の艶技に魅せられ気もそぞろになった英雄は自分の股間に手を押し当て、しばらくは自ら慰めような仕草をしていたが、とうとう我慢出来なくなったのか、ズボンと下着を乱暴に脱ぎ捨て、上着も靴下も身に着けたまま、女同士の愛を交わす母子に武者ぶり付いて行った。

そして、今は母親の上になって愛を交わしていた暁美を剥ぎ取る様に押し退けると、しどけなく股を開く晴江の上に体を預けて行った。

実の娘との愛の交歓に自らを没入させることにより、周囲の事は忘れ果て、陶然となっていた晴江であったが、突然自分の身体の上に実の弟が覆い被さって来たのに気付いて、「いけない！英雄！私たちは本当の姉弟なのよ！そんな事をしてはいけないわ！」と、悲鳴の様な声を上げた。

「いけないも糞もあるか！今の姉ちゃんは唯の売春婦じゃないか！」

と、股間から醜く猛り立ったモノを、すっかり濡れそぼった姉の陰孔に押し当てた。

「へへ、これから弟が実の姉を犯すんだぜ・・・」

英雄に弾き飛ばされ、呆然と二人の様子を見詰める暁美を後ろから抱き起こす様に、膝の上^{かか}に抱え上げて、前に回した両手で暁美の撓^{たが}わな乳房を揉みしだきながら剛沢が嬉しそうに声を上げた。

いきり立つ弟の剣先から逃れようと腰を左右に振るわす晴江であったが、弟に上から組み敷かれ、その屹立した陰茎は徐々に晴江の女の^{ほこら}祠の中に納められて行った。

姉の必死の抵抗を嘲笑う様に、弟のモノが自分の肉を割って内部に侵入して来た事を感じて、悲鳴の様な声を上げて泣き叫ぶ晴江であった。

「見ろ！英雄の奴、自分の実の姉のオ███中にチ███をすっかり納めて仕舞ったぜ！」

剛沢も隆々と勃起したモノを暁美の後口に押し当てると、母親と叔父の禁断の性交を前にして茫然自失状態の暁美の無反応の肛口を押し開き、ゆっくりと根元まで収めて行った。

剛沢に背後から貫かれてもその感覚が脳に達しないのか、抵抗を見せない暁美の身体を厭らしく背後から撫で回しながら耳元で呟く様に言った。

何時もなら鍛え抜かれた箇所とは云え、剛沢の肉塊の硬さと太さにヒリヒリと痛みを感じる暁美であったが、今や肉体をピッタリと重ねてしまった母と叔父の姿にショックを受けて、肛口を苛む痛みも、剛沢の言葉も耳に入らず、呆然と見詰めるのであった。

晴江の暖かく湿った膣内に猛り狂ったモノを収めた英雄は、次に狂った様に腰を前後させ、猛烈な勢いでピストン運動を始めた。

これまで何人もの女を抱いて来た経験から、一端^{いっぽう}の女泣かせのテクニックを持った一と、妙な自惚れを抱いた英雄は、その技術を駆使して何をやっても敵わない姉をきりきり舞いさせて、これまでの劣等感を一掃しようと考えたのであった。

その激しい腰の動きに組み敷かれた晴江も悲鳴の様な声を上げた。

実の弟の性器を自らの生殖器の中に受け入れていると云う、受け入れがたい事実の前に精神は完全に混乱していて、訳の分からないヒステリックな声を上げ続けていた。

しかし、銀子達から鍛えられ改造された肉体は、懊悩する精神を無視して、自律的に蠢き、その内部に収めた英雄の肉塊を締め上げ始めた。

無我夢中で姉の穴の中に突き立てる英雄であったが、ほんの僅かな時間ピストン運動を繰り返すと、ウッと小さく声を上げて腰の動きを止めてしまった。

絶妙に鍛えられた晴江の極上の肉体の前には、生半可な英雄の能力では全く歯が立たず、最高級の娼婦として仕込まれた超絶的な技工を無意識のまま発揮させた姉の甘美な肉洞の中で煽り立てられ、堪らず射精してしまったのであった。

これから散々姉の身体を颯り抜き、自分の強さを姉に思い知らせることにより、これまでの鬱屈した劣等感を払い除けようとしていた英雄は、逆に姉から苦もなく跳ね返されてしまい、それも出来なかった事を思い知らされ、逆に強い無力感に苛まれ、晴江の身体から身を起こすと悄気返った様に背中を丸めて座り込んでしまった。

姉の体内に突き立てるまでは良かったが、10秒と保たず射精してしまって、悄気返る男の姿を見詰めながら、駄目な男は何をさせても駄目なもんだな一と、云うように暁美の媚肉を背後から犯しながら、蔑んだ目で下半身を丸出しにしたまま身体を小さくする英雄を見詰めた。

実の弟から犯されるというショックも和らぎ、白々とした自意識を取り戻し始めた晴江は、涙に霞むボンヤリとした視界の中で、自分に背を向けて身体を縮めて啜り泣きを始めた英雄の事を見詰めていた。

そんな実の弟の惨めな姿を見ている内に、この情けない弟のことが急に不憫に思えて来た。

一端^{いっぽう}のヤクザを気取っても女一人満足させる事も出来ず、莊那井組の跡目を自分で名告っても、こんな中途半端で情けない男には誰も付いてこないだろうと、想像した。

そして、早晚子分たちから見放されて組を追い出され、組長を失った莊那井組は消滅して、大亜門戸会に吸収されてしまうことになるだろうと、思った。

自分の弟がこんな情けない男になってしまった原因が、何をやっても自分に敵わないと、長年に渡って劣等感に苛まれて来たためだと改めて思い知らされ、晴江の心を締め付けた。

これまで自分では何も意識していなかったが、自分の存在がこんなにも弟を苦しめていたと思うと次第に哀しくなってきた。

弟が生まれてヤンチャ坊主だった頃の思い出や、物心付いて何かにつけて反抗し出した頃など、これまで英雄と過ごして来た日常の記憶が走馬燈の様に晴江の心に蘇った。

そして、何故かこの何をやらしても駄目な弟に急に愛おしい気持ちが込み上げて来た。

「剛沢さん、この手錠を外して下さい。」

晴江は暁美を抱いている剛沢の方を向いて静かに声を上げた。

「良いだろう・・・」

剛沢は、これまでと打って変わった晴江の態度に気付くと、抱いていた暁美の身体を退かせて、腰を上げると、晴江の背後に回って、後ろ手に固定していた手錠を外した。

晴江は、手錠を外されて痺れの残る手をさすりながら、悄気返って背を丸める英雄の背後に身を寄せた。

「良いのよ・・・男の人はみんなそうなんだから・・・暫くやって無くて溜まっていたんでしょ？・・・」

英雄の背に裸身を押し当てながら、耳元で優しく囁き掛けた。

「これでスッキリしたでしょうから、今度は私を満足させてね・・・」

背後から項垂れる英雄の頬に頬を擦り寄せて来たので、無力感に苛まれ悔し涙に鼻を啜り上げていた英雄がビクッと身体を震わせた。

晴江の口から漏れる甘い息が英雄の鼻腔を擦った。

そんな英雄の緊張を解きほぐすように、背後からそっと上着を脱がし、ネクタイを解き、ワイシャツのボタンに指を掛けた。

まるで母親が幼い子供の服を脱がすように、一つ一つ優しくボタンを外していった。

ワイシャツを脱がせると、肩から上腕にかけて申し訳程度の刺青が施されていた。

「まあ！英雄も暫く見ない内に立派な男になったわ！・・・この逞しい腕・・・男の人が羨ましいわ・・・」

背後から剥き出しになった弟の腕を愛おしげに撫でながらうっとりするように言った。

実際、英雄の身体は筋肉質の剛沢や黄原の裸体と比較すると締まりの無い、だらしない身体であったが、英雄を勇気付ける様に背後から乳房を押し当て、背中を撫で回しながら囁き続けた。

下着も脱がせて全裸にすると、英雄の前に回って、背を丸めて視線を逸らそうとする英雄の目を見詰めながら言った。

「貴男は立派な漢^{おとこ}なんだから、立派に莊那井組の組長が務まるわよ・・・ほら、こんな大きなモノを持っているんだもん・・・」と、股間に手を匍わせた。

姉に剥き出しになったままの陰茎を触られ、ビクッと身体を震わせた。

「良いのよ・・・お姉ちゃんに任せて・・・」

すっかり萎えてしまった男のシンボルを優しく指先で撫で上げながら囁いた。

これまで幾多の男達に奉仕して来た絶妙のテクニックを駆使して、優しく弟のモノを撫で続けた。

姉の巧妙な手技により英雄の男のモノは次第に硬度を増して行った。

「まあ！逞しいわ・・・こんなに立派なモノを押し立てて・・・」

晴江の巧妙な技の前に鎌首を擡げ始めた英雄のモノを揉み上げながらウットリするように呟いた。

「今までのお客さんの中にもこんな大きなモノを持った人はいなかったのよ・・・本当よ・・・」

そして、上体を倒すと英雄の股間に顔を寄せて行った。

突然姉に陰茎を咥えられ、驚いてウッと声を上げた。

そんな弟の狼狽を宥める様に、付け根まで口に含むと優しく舌を匍わせた。

何時しか姉の口技に煽られて、英雄は興奮してハアハアと息を荒げるようになっていた。

喉の奥まで亀頭を迎え入れ、喉の筋肉を駆使して亀頭を扱き上げた。これまで経験した事の無い刺激に煽られ腰をブルブルと震わせた。

こうして、これまでの肉体調教や客との経験で磨き上げたテクニックを駆使して、英雄を感激させたり、巧妙な舌使いで性感を煽り立てた。

そして、興奮の余り射精が近づいた事を感知すると、口から外して、睾丸を口に含んで優しく愛撫したり、竿に頬ずりしたりして異常に昂進した性感を押し下げた。

「美味しいわ！英雄のおチ●●は、とっても美味しいわ！・・・ねえ！もっとおしゃぶりさせて！」と、英雄の興奮が少しおさまり落ち着きを取り戻した頃を見計らって再び口に含んだ。

これにより、これまで英雄自身も経験したことが無い程、何時までも隆起した状態を保った。弟の身体を優しく布団の上に上向きに横たえると、その身体の上に覆い被さる様に身体を預けて行った。

そして、ドギマギと目を左右する英雄の瞳をじっと見つめながら、優しく微笑むと、ゆっくりと英雄の裸体の上に預けた身体を動かし始めた。

自らの柔らかな乳房や腹を英雄の胸や腹に押し当てて、身体を前後させて擦り付け、快感を押し上げて行った。

姉の柔らかな裸体で摩擦され英雄の股間のモノが逞しく隆起し、その先端から透明の液が滴り流れていた。

暫くの間、英雄の男のモノを太股に挟んで刺激していたが、硬く膨張していることを確認した晴江は、弟の裸体の上で身体をグルリと回して69の姿勢を取った。

今や上を向いた英雄の目の前には、大きく開いた姉の股間があった。

ジットリと湿った牝の匂いを放散させるパツクリと開いた股間を目の前にして、頭に血が上ったのか何か訳の分からないわめき声を上げて、すっかり濡れそぼった秘裂に顔を埋めていった。

弟の激情に刺激を受けた様に、晴江も再び弟の陰茎を口に含んだ。

制御の出来ない激しい肉欲に支配されたように英雄の舌先は狂った様に晴江の秘奥を嵐の様に嘗め回した。

弟の劣情に呼応する様に英雄の肉塊を口内奥深く含み、時には喉の奥まで誘い、刺激した。

晴江の股間に顔を埋めていた英雄がウツと声を上げて身体を痙攣させた。

その瞬間、激烈な飛沫が晴江の口内を襲った。

英雄の放出が間近であることに気付いて心の準備が出来ていた晴江は、慌てることなく、喉を上下に蠢かせて、自分の弟の発作を美味しそうにゴクゴクと飲み下した。

そして、激しい放出の余韻でピクピクと蠢く肉塊に優しく舌を舐わせて清め、舌を窄めて鈴口を嘗め、亀頭内部に残った精液を吸い上げた。

「美味しいわ・・・英雄のエキスはとても美味しかったわ・・・」

自分の弟の陰茎を舌先で十分に清め終わった後、英雄の方に顔を向けて艶然と微笑んだ。

「お願い・・・英雄。お姉ちゃんのオッパイを吸って！」

口の端に英雄の放出した濁液を滲ませながら、布団の上に横たわる英雄の傍に身を寄せていった。

十分に弟の陰茎を嘗めた後、母親が幼子に添い寝する様に身を寄せると、英雄の顔の上に自らの乳房をもって行った。

姉に誘われるまま、フラフラと上体を起こした英雄はそのまま姉の胸に口を寄せて行った。まるで赤ん坊が母親の乳房に顔を埋めて食べる様に、口を大きく開いて姉の乳房に食い付くように頬張り、舌先で姉の乳首を転がした。

「ああ・・・上手だわ！英雄！・・・お姉ちゃんはとても良い気持ちよ！」

と、時々涙にしゃくり上げながら姉の乳房に吸い付く英雄をまるで母親がぐずる幼子をあやす様に背中を優しくさすりながら声を掛けるのであった。

英雄の空いた手を取りもう一つの乳房に誘うと、揉み上げさせた。

稚拙な手技であったが、英雄に自信を持たせるため、ああ！良いわ！気持ち良いわ！と甘い声を上げ続けるのであった。

英雄に両乳房をいじらせながら、弟の股間の物を優しく愛撫した。

隆起した物から溢れ出た粘液が晴江の白い指を濡らした。

「ねえ・・・英雄がとても上手だからお姉ちゃんはこんなに濡れてしまったわ・・・」

と、布団の上に仰臥する弟から離れ、正面に位置すると見せ付ける様に股間を扇の様に開き、剃毛され隠す物の無い秘裂を自分の指で押し開いた。

「ねえ、お姉ちゃんはこのようにビショビショよ・・・」

と、指を秘孔の中に差し入れ、その中の様子を見せ付けた。

姉の媚態に牡の本能を呼び覚まされた英雄は、惚けた様に開け広げられた姉の股間に視線を向けると、まるで鶏頭の花の花弁の様な柔らかな、くすんだピンク色の襞を押し開き指先で自らの秘孔を愛撫する姉の姿に目が釘付けになった。

実の弟の熱っぽい視線をその部分に意識して、晴江は下腹がジュンと痺れるのを感じた。

「ねえ、良く見てちょうだい、英雄・・・お姉ちゃんのクリちゃんは、こんなに大きいのよ・・・」
と、指先で陰核の包皮を剥き上げ、まるで男性の亀頭部分の様な形をした先端を弟の視線に晒した。

驚いた様に、その部分を注視する弟の焦げる様な視線を浴びて、晴江の女の部分がジワジワと熱くなっていった。

「お客様はこれを見て、男みたいだって笑うのよ。・・・でもこの部分のお味はとっても良いのよ。・・・そこいらの若い娘なんかに負けないわ。」

指先を口に含んで、たつぷりと唾液で塗すと、その濡れた指先で陰核の表面を撫でた。

自らの陰核を愛撫する心地良い刺激に酔う様に、背を仰け反らせ甘い吐息を吐いた。

ひとしきり自慰の美酒に浸った後、英雄の手を取ると自分の陰唇に押し当てさせた。

「触って！英雄！お姉ちゃんのここを指で摩って・・・」

と、かすれた声で哀願した。

「ああ・・・気持ち良いわ・・・」

英雄が指先が子供の陰茎のような大きさの晴江の唾液で濡れ光る陰核の滑々した表面を摩り出したのに併せて背を仰け反らせて呻くような声を上げた。

「包皮を捲って・・・根元まで剥き出しにして・・・」

姉の言葉に浮かされた様に英雄は、夢中になって両手の指先で半ば覆った皮膚を捲り上げた。

まるで男の亀頭の様な形状の恥ずかしい女の芽が剥き出しとなった。

そして、熱に浮かされた様に姉のその部分に顔を押し当てると、剥き上げられた新鮮な果実を口に含んだ。

口中に含まれ舌先で肉芽を転がされながら、アウアウと激しく身悶えを続けた。

実の弟の劣情を誘うため大仰な艶戯を続ける母の姿を驚いた眼で見続ける暁美の姿があった。

晴江は再び英雄の手を握ると自分の淫口に押し当てさせた。

「英雄・・・お願い・・・お姉ちゃんの中に指を入れて・・・」

姉に言われるままに二本の指を濡れそぼる肉孔に差し入れた。

「ねえ、英雄、お姉ちゃんの中はヌルヌルでしょう？」

実の姉の淫技にすっかり煽られた英雄は放心した様に首を縦に振った。

「掻き回して！英雄、指で思い切り掻き回して！」

身を仰け反らせ叫ぶように声を上げた。

「気持ち良い！お姉ちゃんのココ、温かくてすごく気持ち良いよ！」

実の姉にすっかり煽り立てられた英雄は大きな声を上げながら、人差し指と中指を深々と沈め、夢中になって隠微な女の祠から熱い湧水を汲み出す様に激しく指先を蠢かせた。

「へへ・・・こんな物でも使ってみたらどうだい？」

二人の様子を黙って見ていた剛沢が英雄に太いバイブを差し出した。

剛沢の手から淫具を受け取った英雄がスイッチを入れた。ブーンと虫の羽音のようなモーター音をさせて野太い幹がクネクネと振動を始めた。

英雄が手にする巨大なバイブに恐怖の表情を浮かべた晴江は、「いけない！そんなモノをお姉ちゃんに入れないで！」と、怯えた声で後ずさった。

「へへ・・・良いじゃないか。これでお姉ちゃんの濡れ濡れ■■■■に思いを遂げさせてやるよ・・・」

と、淫靡な振動を繰り返すバイブを握り締めながら卑猥な笑みを浮かべた。

助けて！止めて！と腰をくねらせて英雄の繰り出す矛先をかわそうとする晴江であったが、それは全て英雄の劣意を昂進させるためのテクニックであった。

アッ！と悲鳴を上げて体を仰け反らせた。

英雄の押して出た淫具の先端が女体の中心をあやまたず捉えたのであった。

「嫌よ、嫌よ！痛いわ！」と、悲鳴を上げてブルブルと腰を震わせるのも構わず、力を込めて押して出た。

鮮紅色に染まった姉の女肉が柔らかく膨らみ、徐々に口を大きく広げて太いバイブを呑み込んで行った。

晴江の異物を押し出そうとする力に抗して、額に汗を浮かべて力を込めて押し入れた。

バイブの振動に併せる様に腰を振り立て、まるで海の底に生きる軟体動物の様に口を広げて、次々と呑み込んで行くその部分を英雄は驚異の眼差しで見つめた。

そしてとうとう太いバイブを根元まで体内に収めてしまった。

「へへ、こんな太いバイブをお姉ちゃんはズッポリ呑み込んでしまったぜ！」

ピッチリと隙間なく筒具を体内に取り込んだその部分を繁々と見つめながら嬉しそうな声を上げた。

妖しげな体液を流しながら淫具を頬張るその部分をしばし鑑賞した後、姉の股間から柄の様に突き出した部分を握り締めユックリと前後に動かし始めた。

アッアッと英雄が淫具を動かすのに併せて、眉根を辛そうに歪め、息を荒げ始めた。

「姉ちゃん随分気持ち良さそうじゃないか？」

自分の操作する攻め具に感応して喘ぎ声を上げ始めたのに気を良くして、嵩に掛かって動きを速めた。

「ああっ！・・・止めて！お願い！お姉ちゃんはもうイキそうよ！」

英雄の激しい操作の前に晴江は腰をくねらせ身悶え続けた。

「これ位で強い姉ちゃんがイクわけ無いだろう！もっと伸び伸びと楽しんだらどうだい？」

これまで何をしても敵わなかった姉が自分の操作する責め棒の前に激しく身悶える様を目にして、嬉しくって仕方無いと言うように口の端を歪めて攻め続けた。

「ああ・・・嫌！嫌！助けて！」

息を荒げ、体をくねらせる姉の姿に猫がネズミをいたぶる様な、どす黒い快感を感じながら責め具を奏し続けた。

「ああー！もう駄目！」と、ひと声上げると体を硬化させ、淫孔の間から英雄の持ち添える手にドッと熱い奔流を浴びせかけた。

それまでじっと姉弟の行為を見続けていた剛沢が、「いやー！見事！見事！何をやっても敵わなかった姉を見事イカせたじゃないか！」と、晴江の迫真の艶技に感嘆した様に手を叩いた。

筒具を股間に加えこんだまま動かなくなった姉を放心した顔で見つめていた。

バイブレーターは死んだ様に横たわる晴江の体内で、まだ振動を続けていた。

やがて晴江の下腹の筋肉がモゾモゾと蠢き、ズルズルと長い筒状の淫具が体外に押し込まれて来て、やがてポトリと畳の上に落下した。

ネットリとした淫液に塗れて艶々と光るバイブが畳の上で耳障りな音を立てながら跳ね回っていた。

自分の手で姉を絶頂に導いた事により英雄の心も落ち着きを取り戻し、牡の本能がすっかり呼び覚まされた事を確認した晴江は、物憂げに体を起こすと四つん這いの姿勢となり、英雄に尻を向けながら、

「ねえ、英雄、お姉ちゃんはこんな所にも刺青を入れているのよ・・・」と、自らの手で尻たぶを開きながら言った。

いやらしいでしょ？と、肛門の周囲に施された扇情的な刺青を見せながら誘うように言った。

「此処の味も前の味に負けない位、良いのよ・・・」と、英雄の視線をその部分に誘うように尻を淫靡に振った。

「前の穴でも、後ろの穴でもどちらでも良いから入れて・・・お姉ちゃんを慰めて・・・お姉ちゃんは、さっきから英雄のたくましいモノに衝いて貰いたくて仕方無かったのよ。」

と、男を誘う様に卑猥に腰を振りながら、擦れた甘い声で囁く様に言った。

晴江に淫靡な艶技に堪えられなくなった英雄は大声を上げると晴江に武者ぶり付いて行った。

「ああ・・・素敵よ・・・とても硬くて大きいわ・・・お姉ちゃんはとても良い気持ちよ・・・」と、英雄に背後から突き立てられたまま甘い呻き声を上げた。

「最初は動かなくて良いのよ・・・お姉ちゃんのおコの中をポの中をポの先で存分に味わって・・・」

晴江に言われる様に、陰茎を深く突き立てた儘、その暖かく湿った極上の内部の様子を楽しんでいる風情であった。

肉体調教により体得した秘技を駆使して、内部に咥え込んだ肉塊を柔らかに扱き上げた。

硬く膨張したモノを奥へ奥へと誘い込んで行く様な肉洞の動きに、姉の胎内に自らの肉体の一部を突き立てた儘、陶醉した様にじっと動かずに極上の内部を味わっていた。

英雄のモノを受け入れたままクルリと体勢を変え、今は正常位で英雄の背を抱き絞め、英雄と向かい合った晴江は、

「どう？お姉ちゃんの中は気持ちが良い？」

と、英雄の目を見詰めながらゾクッとする様な甘い声音で囁き掛けた。

英雄も姉の瞳を見続けながらコクッと肯いた。

「ねえ！キスして！」

身体を中心に弟に串刺しにされたまま上体を捻って弟の方を向いて、晴江が甘えた声で求めた。

姉の言葉に酔った様にフラフラと唇を寄せて行き姉の唇と重ね合わせた。

弟の唇を待ちかねていた様に、かさついた唇に肉厚の柔らかな唇を強く押し当てると、舌を延ばして英雄の舌を求めた。姉の積極的な行為に煽られ、姉の差し入れた舌に自分の舌を絡めた。

まるで恋人同士のように濃厚に互いに舌を絡め合わせ口付けを続ける姉弟に暁美を抱きなが

ら剛沢がハウッと声を上げた。

暁美も背後から剛沢に突き立てられながらも、叔父のモノとは比較にならない様な豪刀が胎内で荒れ狂っているのも気にならないかの様に、ボウッと母と叔父の愛情劇を見入っていた。自分の身体の中に英雄が慣れて来たのを確認して、甘い声で腰を動かす様に求めた。

そして、晴江に指導されて英雄はゆっくりと腰を使い始めた。

弟の腰の動きに併せて、アアッ・・アアッ・・素敵よ！とか、とっても良い気持ちよ！天に昇りそうよ！とか、嬌声を上げるのであった。

物心ついた時から殺伐としたヤクザ世界で育った英雄にとって、初めて触れた姉の優しさが心に滲みて来たのか、顔をクシャクシャにして涙を流し、鼻を吸りながら姉の身体に突き立て続ける弟がいた。

そして、そんな、まるでむずかる子供をあやす様に、弟のピストン運動に合わせて腰を動かす姉がいた。

弟を励ましながらかつ繋がる晴江の姿に剛沢も暁美も何か神々しい物を見る様に二人の様子を見詰め続けた。

実の弟を一人前の男として自信を持たせる為に、勇気付ける様に全身を使って奉仕する晴江の顔は、慈愛に満ちた女神の様に優しく光っていた。

哀哭の夜

女達が地下牢に幽閉され、常軌を逸した異様な売春行為を強要される様になってから既に二年以上が過ぎようとしていた。

剛沢は借金を完済すれば何時でもこの屋敷から出て行って良い—と言っているが、幾重にも奸計の張り巡らされた中では膨れ上がった膨大な借金を返せる目途も無く、従って、この地獄の屋敷から抜け出られる筈も無く、変態的な快楽を求める客達の目に淫猥な刺青を施された股間を晒し、気の遠くなるような羞恥の責めを受け続け、骨も砕けるような苦痛と疲労感の中に苦闘する毎が続いていた。

あの村崎親分達も上納金の集金を兼ねて定期的に訪問しては、毎度女達に陵辱の限りを尽くしていた。

大勢の子飼いの親分連中を引き連れては、毎回女達を相手に乱痴気騒ぎを繰り返して行くのであった。

まさに村崎親分にして見れば、金銭欲と色欲を同時に満足出来る定期訪問となっていた。

一方、剛沢の方も村崎親分に女と金を与えて歓心を買ひ、村崎會の強力な後ろ盾を得る事に成功し、大亜門戸会に敵対していた暴力団も背後の控える村崎會に恐れを為して、逆に、剛沢の杯を受ける事により我が身の安全を図るため進んで接近して来たのであった。

これらの対抗組織の脅威も完全に無くなったことにより大亜門戸会は、最早何の不安も無くなり安泰となっていた。

そして、3人の女の肉体を酷使して絞り上げる金や、横取りしたS市の縄張りから得られる金や、新しく傘下に加わった組織からの上納金など豊富な資金をバックにして、一頃の数十倍にも組員を増大させ、村崎會の中でも著しく地位を伸ばし、まさに日の出の勢いで勢力を増大させていた。

他の組の親分連中も大亜門戸会の急速な伸張ぶりを苦々しく思いつつも、村崎親分の後ろ楯と共に強大化した大亜門戸会に面と向かって対抗できる組織など存在する筈もなく、裏社会での不満は燻りつつも抗争が起きる事は無く、村崎會一大亜門戸会を軸とする奇妙な安定状態が続いていた。

一方、かつて目高組のトップに君臨し、男達を睥睨していた女達の矜持は、今はすっかり消失してしまっており、大亜門戸会がその力を増大させるのに反比例して、この地獄のような生活から脱出する望みも完全に失い、全てに絶望し切った女達が居た。

いつの間にか、客から与えられる呵責ない責め苦を逆に性的快感に代えられる能力を身に付けさせられ、間断無く客から与え続けられる侮蔑と苦痛を被虐の快感に転化し、その唯一残された性感に縋り付いて、客と交わっている間だけでも、自分たちの無念さと悲惨さを忘れようとするかの様に、自ら進んで股間を開き愛液を^{ほとぼし}迸らせて客と積極的に交わり、今日まで生き^{ながら}存えて来たように剛沢には感じられた。

しかし、そのような被虐の快感は、所詮麻薬のような一過性の物に過ぎないと剛沢には判っていた。

その強い快楽から醒めると、より一層強い惨めさが女達を責め苛み、その苦しさ辛さから逃れようと、更に強い被虐の快感を求めるようになるものだった。

まさに片時も休むことなく男達の暴虐の前に無抵抗な肉体を提供し続け、嵐の様な被虐の快

感から逃れられない、セックス中毒の状態に陥りつつあると感じていた。

「今日は、ちょっと外に連れて行ってやろう・・・」

珍しく剛沢自らが、女達を監禁する監獄にやって来て、暁美を押し込めた牢の前に立ち止まって言った。

陽の射さない牢の中で、現在の時間は判らないが、恐らく真夜中の筈であった。

浅い眠りから起こされた暁美は、無言のまま首を項垂れ、生まれたままの姿でモソモソとベッドから這い出すと、鍵が外されて開けられた狭い鉄格子の扉をくぐって出て来た。

男達からの呼び出しを受ける時は、この身を好色な客の餌食に捧げる事以外に用事は無い筈であるが、今回剛沢自らが来た事に嫌な予感を感じた。

晴江もお竜も鉄格子を握り締めながら、不安そうにじっと成り行きを見守っていた。しかし、最早暁美にも他の女達にもこの冷酷無慈悲な男達に逆らう気力も無くなっていた。

逆に無意識の内に、この後待ち受けるであろう悦虐に内心期待する様に子宮がジクジクと疼くのであった。

「久しぶりにお外に行くんだから、張り切って、おめかしして貰おう。」

全裸で檻の前に佇む暁美に鏡台に向かい、化粧するように命じた。

男のおモチャになるために化粧するのは何時ものことと、自分用にあてがわれた鏡台の前に気怠げに腰掛けると背後から冷たい視線を送る剛沢達を無視するように黙って白粉を塗り始めた。

剛沢は鏡に向かい無言のままメイクアップを始めた暁美をじっと見つめていた。

日々変態男達に責め立てられて、多少やつれたように見えるが、肌を塗り、紅を引くと、やはり若々しい美しさが現れて来ると剛沢が鏡越しに暁美の顔を見つめながら思った。

毎日休む間もなくその体内に男の精を受け入れ、熟し始めた果実の様に男好きのするような白いしっとりとした肌となったものだー、又、アクロバティックな体位で男を相手するため、しっかりとした筋肉と程良い脂肪の乗りが得も言われないプロポーションを生み出しているーと、ストールに腰掛けた逞しい尻と背筋に掛けて視線を送りながら剛沢は感じていた。化粧が終わり、何時もの自分の衣装に手を伸ばそうとした暁美に、

「今日はおもてに行くのだから、よそ行きを用意して来てやったぜ・・・」

と、言うと、一緒に入って来た銀子の方を振り向いた。

銀子がガサゴソ音をさせて、手に下げてきた紙袋からビニールの袋に入った黒い革ベルトのような物を取り出し始めた。

それは、欧米のSM写真に出てくるような、黒いエナメル革のボンデージスーツであった。銀子も手伝って、暁美に細いエナメル革のベルトで構成されたボンデージスーツを着用させた。

その、黒く艶々と輝る細いエナメル革のベルトを何本も金属環で接続したようなスーツは、衣装として女体を隠す役目は全く果たしておらず、逆に、乳房を絞り上げ、股間を括り上げて晒し、女性が本来隠しておきたい部分の卑猥さを一段と強調して、さらけ出すように出来ていた。

剛沢も手伝い銀子と二人がかりで、革ベルトをかつちりと締め上げ、乳房や股間を殊更厭らしく強調し、着付けを終えた二人は、しげしげと暁美の全身を眺めた。

晴江やお竜の様な日本風美人には縄による緊縛が良く生えるが、暁美の欧米人に似た風貌と体のラインには、ボンデージスーツも良く似合うと感心した。

スラリとした無駄肉の無いボディーラインに、革ベルトによりウェストを細く絞り上げられ、逆に豊かな胸は、革ベルトによりそれを絞り出すかのように、イヤらしく強調されている。ボンデージスーツに付けられた手枷により両手を腰ベルトの両脇腹の位置に固定され、両手の自由を封じられた。

次に太腿まである黒いエナメル革のピンヒールのブーツを履かされた。

羚羊のような細い足のラインにピッタリとフィットした、細身の艶々と黒光りするブーツにもベルトが付けられており、まるでストッキングをガーターに留める様に、ボンデージスーツに固定された。

雪の様に白い肌の上から光沢を持つ黒いエナメルベルトで締め上げられた、美しい女体をより強調するようにさらけ出す暁美の蠱惑的な姿に剛沢と銀子は、しばし見とれてしまった。

「おっと！忘れる所だった！道中退屈せずに済むように、良い物を呉れてやるぜ。」

銀子の方を振り向くと、銀子が紙袋の底から箱を取り出した。

箱の中身は、大小二つのバイブレータであった。

毒々しい色をした二本のバイブレータを冷たい醒めた目付きで見つめながら、二人の目的を理解した暁美は、諦めたように短く溜息を吐いた。

「お前達も、本当に娼婦らしい体になって来たぜ・・・」

二人がかりで前後の穴にバイブレータを挿入しながら剛沢が愉快そうに笑った。

「前技も無しに、この太いバイブが二つの穴に易々と吸い込まれて行くのだから・・・」
つい最近レーザーにより毛根を焼かれる永久脱毛を施されたばかりの、飾り毛の無いスベスベとした剥き出しの股間にピッタリと収められた二本のバイブの根元だけが、淡く色素を帯びた柔肉を押し広げて顔を覗かせていた。

ピンクのスイトピーの可憐な花卉を連想させる柔らかな襷の奥に覆い隠すように、二つのバイブを完全に埋没させた後、それが飛び出さないように、股間を禪のように別の革ベルトをくぐらせ、ベルトの端をボンデージスーツにきつく固定した。

これで、剛沢によってベルトを解かれるまで、何時までもバイブは暁美の股間に留まり、内部から暁美の下腹を苛み続けることになった。

仕上げを確認して、剛沢は股間から垂れているバイブのコードに接続されたリモコンのスイッチを入れた。

途端に前後を襲う振動に暁美が小さな悲鳴を上げ、その神経を蕩けさせるような痛烈な快感に思わず腰を折りそうになった。

下腹から込み上げる苦痛と快感が入り交じった様な強烈な刺激に暁美の口は自然に開きハアハアと息を吐いた。

その開け放たれた口に、剛沢がこじ開ける様にゴルフボールの様な球に革ベルトを取り付けた緘口具をねじ込んだ。

そして、抗議する様に首を振り立てる暁美を無視する様に手早く後頭部でベルトを固定した。

最後に、暁美の首に犬の首輪のような金色の鎖の付いた革の首輪を嵌め、

「それじゃ、行こうか。」と首輪の鎖をグイッと引いた。

前後を襲う激しい振動に、立っているだけでもやっとの状態で有るのに、股間に異物を挿入したまま歩かされ、更に激しい刺激が暁美の肉体を襲った。

接地面積が極端に少ない高いピンヒールのブーツを履かされ、バランスを取りながら危なっかしく脚を進める度に肉洞の筋肉がバイブと擦れ合い、股間から沸き上がる息も詰まりそうな快感に頭が白くなり、思わず歩みを止める暁美を剛沢は首輪の鎖をグイグイと引いて、強引に歩行を促すのであった。

こうして、剛沢達に引き立てられて、監禁室を出て行く暁美の後ろ姿を、晴江とお竜は不安げに見つめ続けるのであった。

話は、その日の朝に遡る。

剛沢が二人の元目高組の三下を前にして話していた。

「今日、青沼が出所してくる。」

剛沢が言うのを聞いて、元三下達の顔色が変わった。

「世間では目高組の赤鬼、青鬼と言われていたが、赤鬼の方はただ威勢が良いだけの馬鹿で、大したことは無かった。しかし、青鬼の青沼の方は違う。ヤツには人望があり、組を纏める力がある。ヤツを放っておいたら、先に出所したが居場所が無くS市から逃げ出して全国に散り散りになった元目高組の奴等をまとめ上げて、復讐を挑んで来るかも知れない。そうなれば、俺も目高組を裏切ったお前達もおちおち寝ていられないはずだな・・・」

二人の三下が、剛沢の話聞きながら大きく肯いた。

「特にお前達だ！目高組から受けた恩義もあっさり忘れ、皆と一緒にしてお嬢や大姐を面白半分に強姦する仲間に喜々として加わったんだからな！・・・あの青沼にバレたら絶対に許す訳がねえ、あの青沼の事だ、何があっても機会を見つけてお前達を八つ裂きにするぜ・・・」
青沼の性格を良く知っている二人が青ざめながら剛沢の言葉に耳をそば立てた。

「この際何が何でも青沼には死んで貰わないといけない・・・」

怯えた顔で剛沢の方を見つめる二人の目を見ながらキッパリと言った。

「ヤツを自由にさせてはいけない！ヤツが出所して動き出す前に叩き潰すんだ！

お前達は拘置所に青沼の出所を迎えに行って、旨いことを言って青沼をおびき寄せるんだ。いいな！」と、二人の三下に強く命令した。

剛沢はこの時の為に、二人の三下には未だに目高組に忠誠を尽くす子分の振りをさせて、刑務所の青沼や若親分に面会に行かせたり、大亜門戸会の目を逃れて身を隠しているため面会に来れない大姐からの差し入れと偽って、差し入れ品を届けさせたりして信用させていたのだった。

剛沢から手筈を教えられた、二人の三下は、拘置所に向かい、出所する青沼と会うことに成功した。

拘置所からS市に戻る道すがら、青沼は二人から自分たちが警察に逮捕されてから、目高組は解散に追い込まれ、S市のシマは大亜門戸会の手に残ったこと。

元目高組の組員は散り散りとなり、赤石の兄貴の行方も判らなくなっていること。

姐さんとお嬢は、大亜門戸会の追跡から逃れるために、秘密の場所に身を隠していること等、これまで刑務所の面会室では、看守も居て詳細に聞けなかったことを問い詰めるように聞き

出した。

そして、自分が捕まって何も出来ない間に、世の中が大きく変わってしまったことに歯噛みした。

三人がS市に帰り着いた頃には、日もすっかりと沈み夜になっていた。

二人の男は、姐さんやお嬢に会う前に腹ごしらえをしましょうと、青沼を食堂に誘った。

久しぶりに娑婆に戻ったんだから一杯飲みましょうと、ビールで乾杯すると、酒を酌み交わし始めた。

昔話に花が咲き、酒宴も盛り上がり、飲み物もビールから次第に強い酒類に代わっていった。S市はすっかり大亜門戸会のシマに替わり、姐さんやお嬢も大亜門戸会を逃れて身を隠しているというのに、青沼の目の前で旨そうに酒を飲む二人の三下の姿に、周囲に向かって大亜門戸会への警戒を見せる様子も無く違和感を覚えた。

そういえば、二人の様子も依然の組に居た頃と比べると、随分変わった様に感じられた。

罨かも知れない・・・、いや、きっと罨だろう・・・青沼は心の中で呟いた。

この二人は既に大亜門戸会に寝返り、自分をおびき出そうとしているのかも知れない・・・と、二人に気付かれないように心の中で用心した。

しかし、これが罨であっても、敢えて相手の罨に乗らなければ、この後の進展が見られないように思い、悟られないように行ける所まで行ってみようと思ったのだった。

二人に自分の心を悟られないように、二人から注がれる酒を慎重に咽に流し込んだ。

腹に入れた酒はアルコールが体内に回らない内に、トイレに行くと言って吐き出せば良いと心に決めた。

これまで数々の修羅場をくぐり抜けて来た青沼には、例えこれが罨であっても何とか切り抜ける自信があった。

これまで幾度も死地を切り抜けて来た経験と勘と冷静さを失わなければ――

時間は深夜を回っていた。

二人の三下が、姐さんの隠れ家に案内すると言って、青沼を連れ出したのは、S市の港の貨物埠頭であった。深夜ゆえ人影は無く、大きな貨物倉庫やうずたかく積み上げられたコンテナが月の光を受けて黒いシルエットを作っていた。

倉庫街の中央の広くなった場所に連れ出された青沼は、ここが罨の仕上げの場所かとでも問うように、二人の三下に向かってニヤッと微笑んだ。

身の危険を感じた三下達が青沼の傍からパッと離れた。

その瞬間、青沼の周囲を取り囲むように暗闇を切り裂いて、眩くヘッドライトが点灯された。周りを見回すと、オートバイに跨った暴走族風の若者や車が、逃げ場を塞ぐように青沼の周囲を嚴重に取り囲んでいた。

「よお！良く来たな！」

周囲を取り囲む、オートバイや車に混じって、駐められていた大型のベンツの後部ドアが開けられて、青沼の前に剛沢が姿を現した。

重いドアを全開にして、シートに腰を下ろしたまま、体を捻り片足を地面に着けた剛沢の膝の上には、ボンデージスーツに厳しく縛められた、全裸の若い女がぐったりとした様子で乗っていた。

周囲を取り囲むバイクや車の照明を受けて剛沢と女の姿がくっきりと照らし上げられた。背後から支えられながら、剛沢の膝の上で、しどけなく開け放たれた女の無毛の股間からは毒々しい2本のバイブが顔を出し、口には大きな黒いボール型の猿轡を填められていたが、ライトに浮かび上がった、その顔は紛れもなく幾度も互いに愛を交歓しあった暁美であることに青沼は気が付いた。

暁美はここまで連れて来られる間に、前後の穴を責めるバイブレーターに間断なく性感を責め立てられ続け、既に何度も絶頂を極めさせられており、今でも意識は朦朧としたままであった。

人々のざわめきの中で微かに意識を取り戻し、顔を上げると、朦朧とした霞む視野の中に突然青沼の姿が視界に入った。

暁美は全身に冷たい水を浴びせられたように、急に我に返り、惨めな姿を恋人の前に晒す羞恥に悲鳴を上げて、体を小さく屈めようとした。

これまで幾度となく男達の目の前に恥ずかしい姿を晒し続けて来た暁美ではあったが、愛しい恋人の前に惨めな姿を晒さねばならないことには流石に堪えきれず、悲鳴を上げて少しでも恥ずかしい所を隠そうと剛沢の腕の中で必死に身を振るのであった。

剛沢はそうはさせじと、片手でボンデージスーツに絞め上げられ、これ見よがしに前に突きだした乳房を掴み、片手で髪の毛を鷲掴みにすると、上半身を露わに引き起こし、嫌がる暁美の顔を正面から青沼の方に向けさせた。

余りの衝撃に悲痛な声を上げようとするのを口を大きく割って咥え込まされたボール型の絨口具が封じていた。

声にならない悲鳴を上げて、無我夢中で両手を動かして、自らの秘部を隠そうと藻掻いたが、両手は両脇腹の位置に手枷により革の腰ベルトにしっかりと固定されており、暁美の儚い努力を封じてしまっていた。

剛沢は、両脚を暁美の脚に絡め、必死の力で閉じようとする両脚を大きく青沼に向かって広げさせた。

バイブの脱落防止のため股間を縦に割っていたベルトは既に取り除かれており、隠す物の無い太股の間には太くて毒々しいバイブが突き立てられ、半ば秘奥からはみ出したバイブが秘肉を裂いてグルグルと嫌らしく振動する様子が、四方から、そして真正面から車やバイクの明るいヘッドライトに照らし出されて、影も作らず、まざまざと青沼の視界に入った。

そして二本の野太いバイブの振動に同調するかのように暁美が、堪えられず腰をビクビクと痙攣させる様子が青沼の血走った目に飛び込んだ。

快感の源泉を責め立てる二本のバイブにより、既に何度も絶頂を窮めさせられていた暁美の股間は、自らが吐出した豊かな樹液に塗れ、周囲から照らすライトを反射して、娼婦として鍛えられた貝類を思わせる豊かに肥大化した秘肉がテカテカと輝いていた。

羞恥心から必死に身悶え顔を背けようとする暁美の髪を掴んで押さえ付けながら、

「青沼！ 恋しいお嬢に会えて嬉しいだろう？ 今、お嬢の懐かしい匂いを嗅がせてやるぜ！」

と、言うのと、青沼に向かって扇の様に大きく開股された、脱毛され隠す物の無い暁美の股間に手を伸ばし、二つの穴を塞いでいたバイブレーターを鷺掴みにした。

ズボッ！と大きな音を立てて乱暴に引き抜くと、青沼の足下目掛けて暁美の股間の快樂の源泉を責めていた二つの性具を放り投げた。

カラカラと音を立てて、青沼の足下に二本のバイブが転がって来た。

その二つのバイブは、まるで巨大な芋虫のように、青沼の足下で気味の悪い大きな電動音を発しながらバタバタと蠢いていた。

そして、バイブの表面にベっとり塗された艶々と輝る濃厚な粘液に地面を転がった際に砂粒が厚く全体に付着しているのを見た時、青沼の心の中には堪える事が出来ない怒りが沸き上がり、冷静さを完全に失ってしまった。

「キサマ！ お嬢に何をした！」

怒りに我を忘れた青沼が、剛沢の車の方に駆け寄った。

その時、一台の暴走族の若者が乗ったバイクが青沼に襲いかかり、通り過ぎざまに鉄パイプで青沼の背中を殴り付けた。

突然、背後から鉄パイプで殴られた衝撃で、青沼の体は前のめりになり、ガクッと地面に片膝を付いた。

背中に受けた衝撃に苦しそうに蹲る、青沼を目の前に見て暁美が目を見開き、喉の奥で声にならない悲鳴を上げた。

苦痛で身動き出来ない青沼にトドメを刺そうとするかのように、バイクに跨った別の若者が鉄パイプを振りかざしながら襲いかかった。

しかし、これは青沼が誘った罠であった。青沼はこの時を待っていたのだった。

タイミングを見計らった青沼はすっと立ち上がると、暴走族の若者の振り下ろした鉄パイプを避けて、通り過ぎざま後ろを見せた男の背にキックを見舞った。青沼の鋭い蹴りにより乗り手を吹き飛ばされたバイクは、そのままフラフラと走って横倒しになり止まった。

青沼は直ぐさま、バイクに駆け寄り、倒れたバイクを引き起こして跨ろうとした。

その刹那、四輪駆動の大型クルーザーがバイクに跨る青沼の真横から追突して、青沼をバイクごと10メートル近く吹き飛ばした。

そして地面に落下した青沼の上を別の四輪駆動車が通過した。車が通り過ぎた後には、白い上着の上に車のタイヤ跡を残して、ゴロンと仰向けになって動かなくなった青沼の姿があった。

「それ！殺ってしまえ！」

と、鉄パイプを握り締めた若者達が一斉に地面に倒れたままの青沼に襲いかかった。

剛沢は相変わらず後部座席に腰掛けたまま、ズボンのチャックを下ろすと、このサディスティックな光景に興奮して、隆々と屹立し始めた肉塊を淫猥な刺青を施された暁美の後ろの穴に突き立てた。

自分の恋人がなぶり殺しにされて行く光景にショックを受け、貧血状態と成っているためか、剛沢に背後から羽交い締めにもされながらも暁美の身体は次第に冷たく成って行った。

血の気の失せた顔で、じっと死に行く恋人の方を見詰め、身体を硬直させたまま、剛沢の愛撫を受けても嫌がって身悶える事も無く、後ろの穴を突き破っても、何時ものように反射的に強く肉茎を締め上げる生理反応は現れなかった。

死に行く恋人を目の前にした精神的衝撃は、女体の本能的な反応をも停止させてしまったのか、何時ものような性的興奮により血流が増して熱く膨潤して柔らかく、そして強く男のモノを締め付ける弾力ある尻穴では無く、ツルツとした冷ややかな肉の筒に差し入れたような感触しか感じ無かった。

皮の拘束衣により括り上げられ、前に突き出した大きな乳房を驚掴みにして、強く揉みしだいても、最早、女体は反応を示さなかった。

暁美は剛沢から後ろを突き立てられ、剥き出しの乳房を弄ばれながらも、身動きもせず、愛しい男が袋叩きに合い殺されていく様子を熱い涙を流しながらじっと見つめているのであった。

おや？女はここからも涙を流すのか？と、剛沢はふと暁美の大きく広げさせた股間に手を移してその奥に秘められた花びらを押し開け、内部をまさぐろうとした時に気付いた。

その女の花芯からは、愛液とは明らかに違う、熱いサラサラした、まるで涙のような体液を果てること無く流し続けていた・・・

「もう、その辺で止めろ・・・」

剛沢が鉄パイプを振り立て、青沼を殴打し続ける暴走族の若者達に命じた。

剛沢の部下が、興奮して鉄パイプを振り回し続ける若者と青沼の間に入って制した。

青沼を取り囲む暴走族の輪が解けて、傷付いて地面に倒れ伏す青沼の姿がはっきりと映った。車に轢かれ、全身に何回も鉄パイプの洗礼を受けた体はドクドクと血を流し、手足は骨をへし折られたように変形していた。

再び暴れ出さないよう、暴走族の若者達が上から青沼の体を押さえ付けていたが、その心配は無さそうであった。

激しい暴行を全身に受け、骨を砕かれ、並の男ならとっくに死んでいても不思議は無いが、この男も奈和の様に不死身の体を持っているのかと思った。

しかし、血に塗れ醜く腫れ上がった青沼の顔を見て、イヤ奈和とは違う・・・此奴ももう長くは無いな・・・と思い直した。

地面に俯せになったまま、腫れ上がった臉の下から、それでも敵意の籠もった目で、こちらの方をじっと見詰める青沼に気づいて、剛沢が勝ち誇ったように言った。

「お前が^{ムシヨ}刑務所に入っている間に、お前の愛しいお嬢が、どのように肉体改造されたか教えてやろう。」

剛沢が暁美の背後から突き立てたまま、座席から体を起こした。

なぶり殺しに遭う青沼の姿を見て、貧血を起こしたようにぐったりしていた暁美であったが、自分を立ち上がらせて、恥ずかしい姿を正面から恋人の目に曝そうとする剛沢の意図が判っ

て、急激に羞恥が蘇り、冷たくなっていた肌に赤みが差し始めた。

恥ずかしさと惨めさに悲鳴を上げたが、声は口に深く嵌め込まれたボールギャグに封じられた。

そんな暁美の身悶えにも躊躇すること無く、剛沢は両手で乳房を驚づかみし、肛門に逞しい屹立を深く突き立てたまま、まるでピンで止めたように暁美の身動きを封じて、無理やり直立させた。

剛沢の巨体に背後から貫かれたまま立ち上がらせられた暁美の脚は、地面を離れそうになり爪先立ちになっていた。

逞しい業物で後門を抉られ身動き付かない自分の恥ずかしい姿を青沼の前に晒していることに気づいた暁美が、悲鳴を上げて羞恥に身を振った。

「どうだ？見てみろよ！このオッパイをよ！随分デッカクなっただとおもわないか？・・毎日毎晩、好色な狒々親父に無理やり揉みしだかれている内に、お前が乳繰り合っていた頃は、Fカップも無かっただろうけど、今では充分Hカップはあるぜ！」

地面に腹這いになったまま敵意の籠もった目でこちらを睨み付ける青沼を見て、暁美の豊かな乳房を両手で揉み上げながら嬉しそうに剛沢が叫んだ。

エナメル革のボンデージスーツで持ち上げられた豊かな乳房は、その量感と卑猥さを一際強調して青沼の目に見せつけた。

恋人の目の前で、背後から突き立てられたまま、剛沢の太い指で乳房を揉み上げられる惨めさに暁美が涙を流しながら顔を激しく振り立てた。

「その上、毎日毎晩嫌らしい手で揉み上げられたり、鞭で鞣されたりしているから、柔らかくてモチモチしっとりして堪らない揉み心地だぜ！」

と、青沼の目の前で、ワザとイヤらしく執拗に両乳房を撫で回しながら青沼を挑発するのであった。

「そして、こっちの方は、よー！・・」

乳房を揉み上げていた両手を離して、その手が下腹の方に移動した。

両手をボンデージスーツの腰ベルトに取り付けられた手枷に固定されているため、前を隠すことも出来ない暁美が、胸を押さえていた剛沢の手が離れた隙に、前屈みになって少しでも恋人の目から露出を減らそうと、上半身を折ろうとしたが、咄嗟に両側に居た剛沢の子分が手と肩を掴んで、暁美の動きを封じた。

「見てみろよ！ツルツルのピカピカだろう？」

剛沢が曉美の脱毛され、覆い隠す物の無い、剥き出しの女の割れ目をマザマザと晒す下腹を撫で回しながら言った。

「電気脱毛って云うやつでさ、全部の毛根を一つ一つ焼き潰してあるから、生涯もう二度とお毛毛が生えてくることは無いんだぜ・・・」

皮下組織にあった毛根を完全に消失して、幼児の皮膚のようにスベスベした股間を周囲を取り囲む車やバイクの照明が明々と照らし上げていた。

目映い光に浮かび上がったその部分は、長時間の肉責めの間に流れ出た曉美自身の愛液によりヌラヌラと輝いていた。

若い女のその妖艶な秘部を衆人が固唾を飲んで注視する中で、艶々と輝く蛤にも似た二枚貝の合わせ目のような柔らかく盛り上がった土手の作る溝部分を剛沢の指が嫌らしく上下になぞった。

「お陰で、見事な上付のオコが正面から丸見えだろう？」

剛沢に撫で回されながら、曉美が涙を溢れさせてイヤイヤとするように首を振った。

「こちらもよ一、毎日変態客から責められているから、前と比べて随分肥大したと思わないか？」

剛沢の指摘する様に、もっちり肉付き良く肥大した柔らかい肉をこじ開けると、中から濃いピンク色をした柔らかい襞が姿を現した。

剛沢は両手の指先を器用に使って、幾重にも折りたたまれた柔らかい襞を解きほぐすように押し広げて、秘密の花園の内部に秘められた微妙な構造まで露わにすると、指先でそっとその開孔部の上を撫でた。

背面から憎い剛沢の肉茎により深々と貫かれたまま、愛しい男の目の前で、女の源泉を弄ばれる羞恥にビクッと体を震わせた。

重傷を負わされ死を間近に控えた青沼ではあったが、堪えようの無い怒りでうめき声をあげた。

「オッパイだけじゃ無く、このクリちゃんも随分大きく成長したろう？」

剛沢が器用な手付きで、曉美の上付の女性器をまさぐり、その上部の襞を掻き分けると小豆粒のようなピンクの突起を掻き出した。

曉美が羞恥に悲鳴を上げ、腰を悶えさせるのを背後から突き立てた肉塊で制し、そのまま器用に指を使い、ピンクの突起の根本を覆い包んでいた包皮を丁寧に剥き上げ始めた。

「お前は当然知らないだろうが、この娘の母親の晴江は男の子みたいに大きなクリトリスを

持っているんだぜ。・ ・ 全く血は争えないもんだぜ！毎日毎夜スケベな狒々親父達に扱き上げられている内に少しずつ肥大して来て、母親のお豆に良く似て来たぜ・ ・ 」

と、青沼に見せ付ける様に指の腹で充血を始め、前に突き出す様に隆起始めた陰核を優しく撫で上げたり、二本の指先で摘み上げる様に廻った。

愛しい恋人の前であるにも拘わらず、被虐の快感を渴望する肉体が心を裏切って、怪しげな快美感がジワジワと込み上げて来て、剥き上げられた女核の先端がまるで弾けようとする蕾の様に膨らんだ。

剛沢の指がその神経の集中する突起に触れる度に、押し止めようとしても身体が自然に反応し熱を帯びた血流がその部分を中心に渦巻いた。

そんな肉欲の疼きに負けそうになりながらも、これ以上惨めな姿を愛しい男の前に晒す事に堪え切れず、涙を流しながらイヤイヤと首を振った。

剛沢の指先により陰核を被っていた包皮がすっかりと捲り上げられ、ピンクの真珠の様な小粒がすっかり露わとなっていた。

「お前が、抱いてた頃のお嬢と比べると、比較にならない位、感度も良くなったんだぜ・ ・ 」
柔らかくその表面を指の腹で撫で上げると、それに反応するように暁美の体がビクン、ビクンと痙攣した。

剛沢の巧みな指使いがその部分の性感を刺激し、抑えようの無い女体の本能で反射的に反応を始めたのか、外気に剥き出しにされた、そのルビーの小粒のような突起が次第に隆起し、小さな男性器のような形に変形した。

地面に押し付けられた青沼が必死に体を蠢かせ、悲鳴の様な大きな叫びを上げて、止めろ！と叫んだようであったが、大量の血が口から噴き出し、言葉にならなかった。

剛沢は、その様子を見て、折れた肋骨が肺に刺さっているのだと思ったが、それに構わず青沼の見守る前で暁美をいたぶり続けた。

「オコ^黒の肉付きが良くなっただけじゃ無い、その性能も大した物なんだぜ・ ・ 」右手の中指と人差し指を挿入して、華洞の内部をまさぐり、暁美に羞恥の悲鳴と身悶えをさせながら言うと、顎をしゃくって子分に太いバイブレーターを取らせた。

「今じゃこんなに太いイボイボ付きのバイブだって易々と飲み込めるようになったんだ・ ・ 」
子分から受け取った、直径6センチ近くありそうな特大のバイブを青沼に見せつけるように示すと、それを開ききった秘孔の上に押し当てた。

周囲を取り囲む暴走族の若者達もこれまでに見たことの無いような巨大なバイブに本当にこんな物を呑み込める女が居るのかとでも言うように声も上げずジッと成り行きを見詰めた。

既に後門に剛沢の太い物を受け入れている暁美の前門は大きくひしゃげ、新たに受け入れる余裕は無いように見えたが、銀子に調教された女体は、徐々にその柔褻を拡げてその先端を内部に収めていった。

両穴を襲う巨大な物がもたらす苦痛と、調教の結果として最早普通の女の体では無くなってしまった事を恋人の目の前に晒したく無いという拒否の身悶えにも関わらず、力任せにそれをズブズブと体内に押し込んで行った。

その太くて長い醜怪な形をしたバイブを大半体内に収めると、バイブのスイッチを入れた。この淫猥な情景に、誰も声を上げ得ず、男達の生唾を飲み込む音だけが静かに響いていた深夜の静寂を破って、特大のバイブに内蔵された強力なモーターのうなり声が響き渡った。

それと共に、苦痛とも快感ともとれない暁美の悲鳴のようなうめき声が響いた。

強力な振動に煽り立てられ、バイブ表面のイボイボの下に含まれたビーズ玉が跳ね回った。堪えようの無い激しい振動と、肉洞を内部から叩くビーズ玉の衝撃で、暁美が苦悶にブルブルと身悶えしながら止めようも無く快美の悲鳴を上げた。

その恋人の身悶える姿に、青沼が止めてくれと言うように、吐血しながらも悲鳴のようなうめき声を上げた。

愛しい男の目の前で、その恋い女を犯すという、勝利の快感に浸りながら、薄い粘膜一枚を隔てて伝わって来る、強い振動を隆起した分身に受け、性感を煽り立てられた剛沢は一気に緊張を解き、暁美の腸内にとどめの勝利の熱い美酒を放出した。

恋人の目の前で精液を体内に受け入れたことを感じた暁美が、思わず体をビクッと緊張させると悲鳴のような鳴き声を上げた。

溜まったものを、暁美の腸内に放出して、少しすっきりした剛沢は、暁美の後門を占拠していたモノをズルッと引き抜いた。

青沼の目に半勃起したままの精液が塗されて照明を受けてテカテカ輝る巨大な物がダラリと垂れ下がるのが見えた。

「鍛えられたのは前の穴だけじゃ無い・・・」

と、言って暁美の体を今度は後ろ向きにさせようとした。

ついさつきまで剛沢の逞しいモノで責め続けられていた、後ろの秘部を恋人の目の前に晒そ

うとする剛沢の意図に気づいて、曉美が拒絶の身悶えをしたが、男達に有無を言わず体を押さえ付けられ、無理やり背後を青沼の目に晒すようにされてしまった。

その上、男達は曉美に前屈みの姿勢を取らせて、豊かな尻が殊更青沼の方に露出するようなポーズを取らせた。

両脚を広げさせられ、女の花園から続く肛門が、明るい照明の中に照らし出された。

長時間剛沢の巨大な物を突き立てられていた肛門は閉じる事を忘れたかの様に大きくその口を拡げてその充血した内部を覗かせていた。

青沼は見ても成らない物を見てしまったかのように思わず固く目を閉じた。

その無様な尻穴の様子を指差して男達が卑猥な笑い声を上げるのが、刺すように青沼の耳を襲った。

前門に突き立てたパイプは未だにその強い振動を発していたので、開き切ったままの後ろの穴も押し止めることも出来ず、それに併せてピクピクと痙攣し、剛沢が直腸内に残した白い粘液をドロドロと体外に押し流していた。

青沼の上に馬乗りになった暴走族の若者が面白がって、固く閉ざしていた青沼の顔をこじ開けて、顔を曉美の方に向けさせた。

「どうだ？面白い刺青をしているだろう？」

剛沢が曉美の肛門を中心とする同心円状彫られた西欧風の幾何学模様の刺青に沿って指でなぞりながら言った。

曉美は終に自分の恥ずかしい刺青姿を恋人の目に晒してしまったことに、涙に咽んだ。

青沼は信じられない物を見るように、目を剥いて、曉美のその部分を注視した。

「この女、可愛い顔に似合わずケツの穴を掘られるのが真底好きなんだぜ！尻穴を掘る事に興味が無い様な客にも突っ込んで貰える様にと、自分の尻の穴がもっと嫌らしく見えるように見せたいから、刺青を入れてくれーと、せがむものだから彫ってやったんだよ。お陰で嫌らしい部分が一際卑猥になったろう。・・・今じゃこの刺青が自慢で仕方ないらしく、自分から尻を突き出して客に見せびらかしているんだぜ。」と、嘘を並べ立てて青沼の神経を逆撫でした。

男達に支えられて尻を大きく突き出したまま、猿轡の下で声にならない声で否定して、涙を流して身悶えるのであった。

「今、面白い物を見せてやるぜ・・・」

剛沢が子分の方を向いて顎をしゃくった。

剛沢の意を受けた子分が、巨大なガラス製の浣腸器を手に暁美の方に近づいて来た。

それは今までに見たことも無いような大きな浣腸器で500ccは入りそうな大きさがあった。

剛沢が両手で思い切り尻たぶを両側に広げると、卑猥な刺青を周囲に施された菊の蕾が大きく開いて、未だに剛沢の残滓の粘液を垂れ流す、赤黒い内部構造が露出した。

男は、浣腸液で内部を満たされた巨大なガラス器具を重そうに抱えると、その大人の親指ほどありそうな太い嘴管を、長時間の肛門性交から解放されてようやく本来の機能を取り戻して閉じ始めたばかりの菊花の中心にズブズブと突き立てた。

その太くて長い嘴管を深い皺を刻む花卉の中心部に埋め立てると、ほっとしたように一息吐き、次に重い浣腸器を抱えたまま、ゆっくりとピストンを内部に向けて押し込み始めた。

周囲を取り囲む男達に、透明な液が次々と体内に注入されて行く様子がありありと分かった。大量の浣腸液を注ぎ込まれる恐怖感といつ果てるともなく続く、冷たい液が腸内に浸透する違和感に暁美が尻を振った。

その前方では、未だに巨大なバイブが華洞内で荒れ狂っていた。

薄い粘膜を通して、長く太い嘴管とバイブが擦れ合う苦痛に、悲鳴を上げ続けた。

ピストンを終端まで押し込み一滴残らず浣腸液を体内に送り込んで、空になった浣腸器を肛門に突き立てたまま男は、ほっと溜息を吐いた。

周囲を取り囲む男達もこの卑猥な図に溜まらず溜息を上げた。

「お前達にも何か褒美を上げないといけないな・・・」

剛沢が絶世の美女を前にして咳き一つ上げず、目を皿の様にして見詰める、暴走族の若者を見渡して言った。

「ご褒美にこの女を抱かせてやろう。この女は娼婦として鍛えられて、ここの造りは極上だぞ。」と、目を血走らせて、涎を垂れ流さんばかりに覗き込む若者達を見渡しながら告げた。

暁美の二つの穴からスポンと音をさせて、内部を埋めていた器具が抜き取られた。

予め大亜門戸会から言い含められていたのか、暴走族の集団から3人の若者が前に進み出た。

「俺たちは、これから、お前を殺した罪で自首することになっているんだ……。暫く女も抱けないから娼婦の最後の思い出に、お前の恋人を楽しませて貰うぜ・・・」と、ニヤニヤ笑いながら、地面に組み敷かれた青沼の方を見詰めて言った。

青沼が、身を震わせ止めてくれと言うように大きなわめき声を上げた。

コンクリート敷きの地面にエアマットを敷くと、一人の若者がその上に仰向けになった。残りの二人の若者が暁美を両側から挟むように連れてくると、仰向けの若者の上に腹這いに暁美の体を預けさせた。

そして、下になった男が暁美の華洞に肉塊を収めたことを確認すると、自分も猛り立った肉棒に手を添えて、菊の花弁の中心にあてがい、そのまま腰に力を入れて無理やり蕾を押し開いて内部に突き入れた。

二人の若者に前後の穴を占領されて暁美が思わず悲鳴を上げて、腰を震わせた。

「こんな物、邪魔だぜ！」

と、言うのと暁美の正面に回った若者が暁美の口を覆っていたボールギャグのベルトを緩め、口から取り外した。

自由になった口で何かを叫ぼうとした時、有無を言わず隆起した怒張をねじ込んだ。

「このオッサンさつきからうるさいぜ！恋人が嘗めていたおしゃぶりなら嫌じゃないだろうから、これを咥えさせてやろうぜ！」

暁美の口を塞いでいたボールギャグを受け取った若者が叫んだ。

そうだ、そうだと青沼を押さえ付けていた若者達が、暁美の唾液にべっとりと濡れたそれを受け取ると、面白半分に青沼の口に無理やり咥えさせ、後頭部でベルトでしっかりと固定した。

「おお！この女、チョーヤバイぜ！」

暁美を後ろから突き立てていた若者が思わず叫び声を上げた。

「アアーッ！チョー気持ちイイーッ！」

暁美の下に回って前門を責める若者も歓喜の声を上げた。

「ホントにマジヤバ過ぎっすよ！激旨過ぎっすよ、この女！」

暁美の口内でしゃぶらせていた若者もつられて歓喜の叫び声を上げた。

恋しい男の前で、最低の肉奴隷の様な売春婦に改造された自分の姿を晒すことは、暁美にとって耐えられない苦痛であった。

しかし、この異常な環境下で、いや、むしろ周囲が異常な状態のため自分の正常な神経が遮断されて、銀子達によって改造された男に快感を与える器官が反射的に自律的に活動を始め、自分の意志に反して無意識の内にその鍛え上げられた機能を発揮始めていることが感じら

れた。

それは、この極限まで追い詰められた異常な精神状態が、男の逞しい物に縋り付き、そこから発する快美感に身を投げ入れ、その性感に没入する事により、発狂することを防ぎ、無意識の内に精神安定を得ようとするかのような女性の防衛本能であったのかも知れなかった。暁美の意識とは別の自律的な秘肉の活動であったが、色々な女を抱き尽くしたベテランの男を相手にしても、きりきり舞いに出来るほどのテクニックを調教された女肉は、経験の浅い若者達をたちまち快感の頂点に追い上げた。

「ああー！ヤバイ、ヤバイ！チョー気持ちいい！」

快感の余り大きな叫び声を上げるとそのまま堪らず、それぞれ暁美の体内に若い精を注ぎ込んだ。

普段客とするベテランの男達は、その年齢ゆえに射精に至るまでの時間は長いが、一端放出すると、次まで暫く間隔が空くものであるが、流石にこの若者達は放出を終えても未だに隆々と屹立した物を持っていた。

最初の放出を終え、満足した若者達がそれぞれ持ち場を交代した。

暁美の肛門を突き立てていた若者が、正面に回って可憐な唇にその隆起した物を押し付けた。

「お前、浣腸されてウンコが出そうなんだろう？突き立てながら腹の中でグルグル言っていたぞ。俺のセーエキとお前のウンコ汁が混じった物を嘗めてきれいにして見ろ！」

と、暁美の唇を割って、その汚濁の液で濡れ輝る肉塊を口内に押し込んだ。

青沼に見詰められながら、それを口に咥えるのは辛いことであったが、意を決したように拒否することなく口を大きく開くと口腔深く含み、舌を絡めてその汚れを拭い取った。

青沼が猿轡を嵌められた口で、必死に叫び声を上げながら、血走った目でこちらをじっと見詰めているのが何より辛かった。

二度目の男達も暁美の鍛えられたテクニックの前に、快感の叫びを上げて、激しく放出を遂げた。

再び持ち場を交代した若者達が、最後の快感の壺にそれぞれの怒張を突き立てた。

流石に血の気の良い若者達は二度の射精を終えても、その勢いは変わることが無かった。

二度の放出により体も軽くなり、また暁美の絶妙のテクニックにも慣れて来た若者達は、前の二度の様に短時間で射精に至ることは無く、暁美の絶妙の内部を余裕を持って味わうことが出来るようになって来た。

暁美も今は恋しい男の前に痴態を晒す羞恥も感じられなくなって来たかのように、鼻を鳴ら

して、獣のような若い男の体臭に酔い、男達が巻き上げる快感の中に身を投げ出しているか
のようであった。

若者達は色々体位を変え、最初腹這いになっていた暁美の体は、今は仰向けになり前後から
二箇所の秘孔を責められ、大きく仰け反らした顔を下に向け、鼻先をかすめる様に口中に突
き刺す男の肉茎を舌を延ばして嘗め上げていた。

今や青沼に見られているのも気にならないかの様に、牡の精フェロモンに煽られたように、
自ら体を開き、歓喜の声を上げ、身を振っていた。

そんな、暁美の痴態に青沼は信じられない様に目をきつく閉じたが、暁美のヨガリ声は耳に
冪した。

その間にも浣腸液は腸内で荒れ狂い、下腹からゴロゴロと大きな音が周囲に響き、柔らかい
腹の筋肉がビクビクと痙攣するのが見られた。

「お前、ウンコ出したいんだろう？だけど、お俺たちを満足させないとウンコさせて上げな
いぞ！」

今は余裕が出て来た若者が前方の快感の壺を突き立てながら言い放った。

腸内から突き上げる激しい苦痛に喘ぎながら、今は一刻も早く、この男と女の肉欲の勝負に
勝利して、この若者達を退散させるしか無いと、心に決めるのであった。

「オイ！彼氏！お前の彼女は前からネバネバした液を吐き出すだけじゃなくて、後ろからも
黄色い液を垂れ流しているぜ！全く汚^{きった}ねーな！後でその可愛い口で綺麗に掃除して貰うか
らな！」

暁美を背後から襲う男がその太い陰茎をピストン運動させる度に、雨水が溜まった長靴で歩
く時の様に、グショッ、グショッと音を発し、内部から押し出される腸内にたまった液が滲
み出していた。

その恥ずかしい音とハーモニーを作るように前の孔からも豊富な愛液を撒き散らしながら
淫靡な音が周囲に響き渡っていた。

腹部からの激痛が暁美を襲い、激しい腸の痙攣に体が仰け反り、全身びっしょりと汗に塗れ
ていた。

責める若者達も、暁美の素晴らしいテクニクに煽られながらも、その放出の瞬間を少しで
も後送りしようと、全身を汗に塗れさせ、下腹を激しく振り立てた。

季節は涼しさを増す頃であり、深夜の埠頭はじっとしていると寒さを感じさせたが、この^{せめ}悶
ぎ合う男女の間では、汗まみれの熱気に包まれていた。

血走った目で男女の肉の饗宴を見守る男達は、声も上げ得ず、その深夜の静寂の中で、息も
止まるような恍惚の快感を紡ぎ出す三つの快樂の壺にいきり立つ肉欲の鈍器を突き立てら
れ、男と女の粘膜が擦れ合い、男と女の濃密な樹液が混じり合う音が卑猥なりズムを刻み、
快感に鼻を鳴らす曉美の喘ぎと男達の快感に酔う声が官能的なメロディーを奏でた。

今や、恋人の目の前で痴態を晒す羞恥心もかなぐり捨てたように、心も肉体も一人の娼婦と
化した曉美は、持てる最後の力を振り絞り若者三人を同時にゴールに追い立てた。

その瞬間、若者達は歓喜の雄叫びを上げて、最後の熱い液を浴びせかけた。

放出の瞬間、若者達は、口と膣孔から自らのモノを表に抜き出し、熱い汗に濡れ光る曉美の
裸体めがけて放出したので濃厚な男の体液は、曉美の汗まみれの顔と下腹を撃ち、粘っこい
白濁した粘液が顔面と下腹を覆った後、ドロリと下に流れ落ちた。

その淫猥なフィニッシュに周囲を取り囲んで見ていた、暴走族の若者達から歓声が上がった。

「ほら。糞をしたいんだろう？見ててやるから、さっさと放り出すんだ！」

曉美を解放した男達が、曉美の髪を掴んで体を起き上げさせると、ふらつく体に踳踳の姿勢
を取らせた。

「その前にお前に汚された^黒ポを綺麗に洗って貰うぜ！」

男が精液と曉美の肛門液に塗れた半勃起したモノを曉美の眼前に突き付けた。

猿轡を嵌められ、地面に押さえ付けられた青沼が、止めてくれ、と言いたげな目で男と曉美
を見詰めた。

青沼が目を見開いて注視する中、曉美はうっすらと目を閉ざし、赤い唇を開くと、舌を延ば
して若者の汚れた肉塊を舌先で嘗め上げ、そのまま口内深く根元まで含んでいったのを目に
して硬く目を閉ざした。

若者の持ち物を口腔を使って綺麗に洗い終え、若者が曉美の前を離れた後、決定的瞬間を見
逃すまいと、大勢の暴走族の若者が曉美を取り囲んで作る輪が小さく縮まった。

取り囲む若者達は美女が大便を排泄すると云う、並のポルノビデオでも見られない様な瞬間
を見逃すまいと固唾を飲んで見守った。

そんなギラ付く男達に取り囲まれ、まだ精液の滴る顔を苦しげに歪めて、青沼の方を見なが
ら静かに囁いた。

「見て、健二さん、曉美はもうあなたに抱かれる資格の無い、最低の売春婦に身を落としたのよ・・・毎日休む間もなく、男とオコするのが大好きな、オチン無しでは生きて行けない淫乱な女になったのよ・・・犬猫以下の人間を捨て去った、ただ肉体を奉仕するだけ性の奴隷に落魄れ果てたのよ・・・今では人前でこんな恥知らずなことも出来る破廉恥な肉奴隷なのよ・・・」

男から与えられる淫蕩な感激だけが現在の生きる糧となり、堪えようとしても、どうしようもなく、自分の淫乱な娼婦性を恋人の前で暴露してしまった曉美は、もう、涙も涸れ果てたかのように、落ち着いた声で青沼に語りかけるのであった。

青沼が信じられないと言うように、血走った目で曉美を見詰めた。

青沼に見詰められて、白く輝る粘液を滴らせながら艶然と微笑むと、青沼に見せつけるかのように股をジワジワと大きく開いて行って、剃毛された股間を地面に倒れたままの恋人の前に余す所無く大きく開いて見せた。

血走った目を丸く見開いたまま、猿轡をされた不自由な口で、止めてくれと叫んだように聞こえた。

男達から長時間責められ、大きく開いた股間の奥では、未だ充血した秘部の肉壁が閉じることなくその姿を見せつけていた。そして、汗と粘液に濡れ輝る秘奥からは曉美のもののか男達のものか判らない粘っこい愛液が、いまだに滴り続けていた。

そして、その股間の付け根の奥には、忙しなく収縮を繰り返す肛門の先端が見え隠れしていた。

上下に動いて、その度に女陰の奥から表に突き出したり、凹んだりしていた肛門の先端の出入りの動きが一段と速く激しくなった。

汗と男の粘液に塗れた曉美が苦しように顔を蹙めた。

オオーッ！始めたぞ！その崩壊の瞬間、取り囲む若者達が歓声を上げた。

これまで必死に閉じていた筋肉の緊張を解かれた排泄器官から、一機に激しい黄褐色の水流が吹き出し、コンクリート敷きの地面を激しく叩いた。

美女の晒す落下無惨な醜態に、曉美の周りに輪を作って見守る暴走族の若者達が、大声で笑いさざめきながら手を叩いた。

開いた股間の奥に変形した排泄器官の先端がチューブのように突き出し、便塊と注ぎ込まれた浣腸液が混じった汚濁の液を放出している様子が、憑かれたように見詰める青沼の目に映った。

夥しい茶褐色の汚水が高いピンヒールを履いたままの暁美の足下に池を作っていた。

その凄まじい光景に、息を呑み若者達には声を上げるのも忘れた様に、辺りはシーンとした静寂が流れた。

波止場を流れる微風が、暁美の排泄した液が発する妙なる香りを、組み伏せられた青沼の方に送った。

若者達の血走った視線を浴び続けながら、暁美がブルッと腰を振った。

「見て！見て！健二さん！暁美がウンコするところを見て！」

興奮して全身を真っ赤に染め上げた暁美がヒステリックな叫び声を上げた。

暁美が再び下腹に力を含め、菊花の筋肉の緊張を解いた。

余りにも変わり果てた恋人の有様を見せ付けられ、ショックの余り放心したように、瞬きもせずジッと視線が集中する股間の奥で、再び粘膜質の肉の管が表に向かって伸び、そのチューブの先から絞り出されるように、柔らかい便が下に向かって送り出され、長く伸びた便塊が太いロープのように股間からぶら下がった。

腰をブルブルと震わせたため、途中でブラブラと揺れながら、ぶら下がっていた便塊は、根本で切れてポトリと足下に落下した。

そして、これをおもしろくするように、次々に太くて長い便が、肉のチューブの先から送り出され、開ききった股間の下に蛇のように蜷局を巻いた。

おいおい！今度は凄く太いのを出し始めたぜ！と、見守る若者達から驚きの声が上がった。

「アアーッ！暁美は銀子さんから肉体改造されてお尻の穴を拡張されて・・・お客さんからも散々太い玩具おもちゃを突っ込まれて、こんなに大きく広げられてしまったのよ！・・・だからこんな太いウンコもヒリ出せるのよ！・・・どう？凄いでしょ！ネェ！褒めて！」

恋人の面前で凄まじい羞恥の姿を晒さなければならない暁美は、気が狂った様に悲痛な声で泣き叫んだ。

「アアーッ！気持ちいいのよ！男の人に見られながらウンコするのは、オコオコするみたいに気持ちいいのよ！」

これまで、自分を内部から苦しめていた便塊が体外に流れ出て、徐々に痙攣が治まって行く快感に浸るように首を激しく振り立てながら狂った叫び声のような声を上げた。

取り囲む若者達も、今は固唾を飲んで美女の長い脱糞姿を目に焼き付けていた。

「ああーっ！目を瞑っちゃイヤ！もっともっと暁美の恥ずかしい姿を見て！見て！」

居たたまれず、硬く目を閉ざした青沼に気づいた暁美が、狂ったように上気した顔を振り立

て、泣き叫ぶようにヒステリックな声を上げた。

そして、開いていた股間を一層大きく広げて、その最奥のたたずまいを恋人に見せつけると、後ろから後から軟化した便をドロドロと排泄しながら、前の秘部からも黄色い液体を放出し始めた。

この美女の淫猥な排泄図に取り囲む男達が、歓声を上げて笑いさざめいた。

痛めつけられた傷口から流れ出す大量の出血により、意識が次第に朦朧となっていく、霞が懸かるように薄れて行く視野の中で、男達に嘲られながら何時までも排泄と放尿を続ける暁美の姿が脳裏に残った・・・

剛沢の私室にて

「これで一人は、片付いた。」

翌日剛沢が上機嫌で黄原に首尾を話した。

「青沼の野郎は、出所して来ても組は解散しており、行き場もなく、ヤケ酒をあおって、憂さ晴らしに暴走族に喧嘩を売ったところが、逆に袋叩きにあって殴り殺された・・・って云う、筋書きさ。司法解剖すれば体内からアルコールが検出されるだろうし、暴走族の方も酔っぱらったヤクザから喧嘩を売られて、怖くなった末に過剰防衛で誤って殺してしまったという過失致死だから罪は軽く済むだろう。出所して来たら、大亜門戸会の幹部に迎える条件を出したら、三人ばかり喜んで警察に自首しに行ったよ。これは、あくまでも青沼と暴走族の若者の喧嘩だ。この青沼の件で大亜門戸会が警察の追求を受けることは無いだろう・・・」

目の上の瘤の青沼を葬りされたことが余程嬉しかったのか、朝からブランデーをあおりながら、饒舌に黄原に語りかけるのであった。

「さて、もう一人の・・・若親分の方だが・・・所詮アイツは一人では何も出来ないボンボンだから怖くは無いが、折角掴んだS市のシマに将来別の組がチョッカイ出して来ないとも限らない。その時、大義名分としての錦の御旗として担ぎ出されるのが、あの若造だ・・・」

剛沢が、黄原の目を見つめながら話を続けた。

「御輿を最初から壊しておけば、誰も担ぎようが無いからな・・・青沼の時の様に既に手は打ってある。」と、ニヤッと黄原を見た。

それから、数日経ったある日、チンピラ達が嬉しそうに互いにタメロを叩き合い大声で笑いながら女たちを閉じ込めた牢舎にやって来た。

男たちの手にする逃亡防止の為の手錠と長い鎖の取り付けられた足枷が、ジャラジャラと不気味な音を響かせていた。

遠くから響く男たちの声を聴く度に女たちは、居たたまれない気持ちになるのであった。

笑い声を上げ合いながらゾロゾロと牢舎の中に入ってきた来た男たちは、晴江を押し込めた檻の前で立ち止まった。

又もこれから男にこの体を蹂躪されるのかと思うと、ベッドに腰かけ両手で胸を抱きながら陰鬱な気分に入る晴江であった。

「晴江姐さん！今日はお客の相手じゃないぜ。剛沢のボスがちょっと姐さんに用が在るってんで呼びに来たのさ。一緒に来てもらうぜ・・・」と、檻の中で項垂れる晴江に声を掛けた。

一体、剛沢の突然の呼び出しとは何だろうと不気味な思いが過った。

曉美もお竜も檻の中から不安げに様子を窺っていた。

男たちに促され、両手で胸と股間を押さえながら腰を屈めて低い檻の出口を這い出て来る晴江の姿に、長い年月男に体を売る家業をしながらもいまだに羞恥心を忘れない熟女の姿に何か初々しいものを感じるのであった。

何時もの様に壁際の鏡台に向かおうとするのを、「おっと！今日はお客が相手じゃないから化粧は要らないって事だぜ！それに着物も着なくて良いぜ！」と鏡の前に座ろうとした晴江を制した。

冷たく冴え渡った貌は連日の荒淫による褻れは在るとは言え、すっぴんでも十分美しいと改めて晴江の顔をマジマジと見つめるのであった。

「ほら！何時もの様に手錠をしてやるから手を後ろに回しな！」

かつて女達が反乱を起こし、男達を叩きのめして逃亡を計った事件があったので、女達の持つ格闘能力を恐れる警護の男達は、それ以来女達を牢から引き出す時は、用心のため必ず後ろ手錠を掛けさせる事にしていた。

男たちへの抵抗は無意味で在ることを骨身に染みて知らされている晴江は恥ずかしい部分を遮っていた手を退かせて後ろに回した。

股間を覆っていた手が退かされ、肉付きの良い割れ目が露わになって男たちがその部分を注視した。

いやらしい目で男たちが見つめるその部分は最近レーザーにより永久脱毛が施されたばかり

りで、成熟した女の生々しい亀裂があからさまに曝け出されていた。

初めて晴江の脱毛処理された秘丘を目にする男達もまだ多く、もの珍しようにスベスベの素肌に鼻先を押し付けんばかりに間近から見詰める者や指先を伸ばしてすべやかな表面を確かめようとする者も居た。

そんなヤクザ者達をまるで蠅を追ひ払うように腰を振って追ひ払うのであった。

後ろに回した両腕にガチャリと手錠を掛けると、二つの手枷を繋ぐ鎖の中央に長い鎖を繋ぎ止め後ろに回った男が鎖の端を手にした。

晴江の足元に屈んだ男が晴江の両足首に鎖で繋がれた足枷を嵌めた。

鎖の長さはようやく歩行が出来る程度の長さで、走ったり、まして足蹴りをする事を封じていた。

晴江の足元に屈みながら足枷を嵌める男が、ニヤニヤ笑いながらむき出しの股間を見つめた。童女のようにスベスベで何も覆い隠す物の無いその部分であったが、童女というにはあまりにも婀娜っぽい何か隠微な薫りを発散させるような風情があった。

前に立つ男が長い鎖の付いた首輪を嵌めた。

最早女達には抵抗の意思は喪失していたが、この女達が本気で暴れだしたら自分たちでは歯が立たない事を知っている男たちの警戒心は相当のもので在った。

こうして前後から鎖で繋がれ、周囲を取り囲む男が歩行を促すように、鮮やかな刺青の施された尻をピシヤリと平手で叩いた。

全裸のまま犬の様に首輪に繋がれた鎖を引っ張られて牢舎から連れ出されて行く晴江の姿を曉美とお竜が不安そうに見つめるのであった。

男たちに首輪に取り付けられた鎖を引かれて表に繋がる階段を引きずられるように登らされた。

地下牢と女たちの仕事部屋を繋ぐ地下通路は出来ていて、雨の日はそちらを通って行くのであるが、表に出る経路を男達が選んだと謂うことは、今日は天気が良いのだろうと想像した。思えば、自分たちが日の光を浴びることが出来るのは、この僅かな時間しか無いのだとしみじみと感じるのであった。

背後に回った男達が、階段を一段一段踏みしめる際に左右に揺れる豊かな尻肉を好色な目つきで見つめ、チラチラと垣間見える秘裂の佇まいを腰を屈めて下から舐めるような目つきで

注視するのであった。

表に面した厚い扉を開いた時、晴れ渡った外光に照らされて、まるで洋梨を立てたような柔らかな腰のラインが強い逆光によって黒いシルエットとなって照らし出された。

普段、客を取る時は着物姿で地下牢から引き出され、売春部屋まで子分の男達に連れて来られるのが常であるが、今日は客では無いから何も着なくて良いと剛沢から告げられ、足にサンダルを履かされただけで、全裸のまま牢から引き出され、明るい陽の射す中庭を通過して、剛沢の自室のある建物まで、男達に連れて来られたのだった。

後ろ手錠を掛けられているため、男達に引き立てられる晴江には永久脱毛されてしまい、表に向かってクッキリと恥ずかしい雌の内部構造を晒す、淫靡な股間の部分を手で隠すことも出来なかった。

色鮮やかな刺青の施された左右の脇腹に挟まれた、生まれたままの白い肌を残す下腹には、まるで童女のように覆い隠す物の無いスベスベの股間を晒していたが、その中心には童女と言うには余りも成熟した女の命を宿す深い峡谷が堂々と外部に向かって露出しており、男達は晴江を取り囲んで歩きながら、その淫靡で鮮烈な切れ込みに遠慮の無い卑猥な視線を浴びせ続けていた。

高く昇った陽の光を全身に受け、むっちりとした尻の回りに施された鮮やかな色彩の刺青や熟した女の恥部を明るく照らされながら、大亜門戸会に寝返った、かつての歯牙にも掛けなかったような三下組員らのネットリと嘗め回す様な嫌らしい視線を全身に浴びせられて歩み続ける屈辱感にぐっと唇を噛みしめるのだった。

普段は着物姿の晴江を連行する事に慣れた男達も、何時もとは違う、全裸姿の晴江に劣情を煽られ、前に回ったり、後に着けたり、時には腰を屈めて股間を覗き込んだりして周囲を取り囲んで歩きながら、薄笑いを浮かべて、ジロジロと遠慮無く卑猥な視線を晴江の全身に浴びせ続けるのであった。

雲一つ無い快晴の空の下で陽光は全裸の肌を気持ち良く照らしたが、秋も深まった気候は時折冷たい風を裸身に浴びせ掛けた。

「ちょっと待って・・・」

突然晴江が腰をもじもじさせて哀願するような眼を男たちに向けた。

「どうしたと言うのだ？」

取り囲む男達が歩みを止めて、じっと見つめた。

「おしっこがしたいの・・・」

男達から油断無く注視されて、恥ずかし気に俯いて小さく答えた。

途端に男達から笑い声が上がった。頬を桜色に染めて恥ずかしそうに腰を震わせる熟女から妖艶な色香が一気に放散する様な雰囲気を感じた。

男達が牢まで連れ出しに来た時から尿意を感じていた晴江であったが、このまま残酷な剛沢の前に連れ出され、尿意を訴えたらどんな恐ろしい責めを受けるかと不安を感じ、恥ではあるがこの男達の前で排泄した方がどんなに楽かと考えたのであった。

普段は着物を着て自分たちの仕事部屋に向かうのであるが、今日は全裸で表を歩かされたため体が冷えて尿意を感じたのだろうと男達は思った。

女達の排尿行為を見る事が出来るのは金を払った男たちの特権であり、連行途中の排泄は例えどんなに女達から懇願されても許されるものでは無かったが、今日は客では無く剛沢の個人的用事との事で許可しても良いだろうと思った。

それに大姐の生の放尿姿を間近で見るのも久しぶりだと、隠微な思いがこみ上げて来て、「良いだろう。ここでシャーと済ましちゃいな！」と、リーダー各の男が左右を見渡して生け垣で周囲から姿を隠せそうな庭の一角に連れて行くと、満面に喜色を浮かべながら叫ぶように言った。

「立ったままだと足の鎖を濡らしてしまいそうだから、しゃがんでやっても良いぜ・・・」

リーダー各の言葉に柔らかな芝生の上にしゃがみ込むと、どうせ男達はその瞬間を見たいのだろうと捨て鉢な気持ちとなり、男たちを挑発するようにガバッと股を開いた。

明るい陽の光に照らされ、飾り毛を喪失した淫谷はありありとその淫靡な女ならではの構造を晒していた。

首輪の鎖を持つ男も後ろ手錠の鎖を持つ男も周囲を取り囲んでいた男たちも決定的瞬間を見逃すまいと、晴江の前に回って腰を屈めて大きく開いた^{くつろ}寛いだ股の間に熱い視線を送った。

「そんなに近寄って顔にかかっても知らないわよ・・・」

劣意をむき出しにして顔を寄せる男たちに、^{うるさ}煩い蠅を見るように呟いた。

そんな晴江の侮蔑の声も気にならないかの様に、「さっさとシャーと始めろ！」と大声で囁し立てるのだった。

何も覆い隠す物の無い剥き出しの陰門の僅か上の尿道口が膨らんだと思うと、次の瞬間激し

く水が溢れ出した。

レモン色の液体が激しく地面を叩き飛沫となって男達を襲った。

男達は嬉しそうに悲鳴を上げて後ずさった。

大姐の体から流れ出た水が地面に小さな水溜まりを作って行った。

「もう良いのか？」との問いかけに小さく首を振って応えた。

「生憎紙が無いから拭いてやることは出来ないが、まあ、歩ている内に風に吹かれて乾くだろう・・・」と、リーダー各が立ち上がらせた。

再び歩み始めた晴江の後に続く元目高組の男達は、ふと屈強な男達を後に従えて颯爽と歩くのが好きな女であったことを思い出していた。

地味な色合いではあるが豪華な着物を何時も身に着け、その上から組の代紋を染めた黒半纏を袴に羽織り、常に荒くれ男達の先頭に立って、自分の縄張りであることを示威するかの様にS市の繁華街を威風堂々と申し歩いたものだった。

まるで船の舳先が波を掻き分けて進む様に、恐ろしげなヤクザ男を何人も従えて先頭に立って進む大姐の姿を見ると、目抜き通りの歩道を行く人々は、慌てて左右に避け道を譲ったものであった。

目高組の女親分の一行に道行く人々は、顔色を変えて歩道の端に除け、大姐達と目を会わせるのを避け、行列が通り過ぎるまで恐ろしそうに見送ったものであった。

通行人達の畏怖の視線を受けて、ヤクザの女親分としての虚栄心を満足させられたのか、白く美しい顔に赤く紅を引かれた唇が、うっすらと微笑んでいたことが思い出された。

自分も度々そのお供に加わり、前を行く大姐の襟足から延びたほっそりとした白いうなじをウツトリと見詰め続けたものだった。

そして、着物に包まれたその下に存在するであろう大姐のスラッと形の良い柳腰の肉体を思わず想像すると、組に帰ってもその印象が忘れられず、その裸身を想像しながら手指で自らのモノを慰め、眠れぬ夜を悶々としたものであった。

その畏敬の眼で眺めていた女が、今は女として恥ずかしくて見せられないような物をあられも無くさらけ出し、男達に引きずられながら歩まされている姿をみると、今でもまるで夢を見ているのでは無いかと、眼をパチパチとしばたかせてしまうのであった。

白いうなじどころか、全裸姿を男達の眼に晒す晴江は、極彩色の刺青を全身に彫り込んでいるが、胸の谷間から股間に掛けては、白い地肌を残しており、その雪のように白い股間の部

分は綺麗に電気脱毛されており、毛根を失った肌は、まるで幼気な童女のようなスベスベした割れ目をくっきりと晒しており、その厳めしい刺青姿と鮮烈な対照を示していた。

プックリと柔らかく見事に盛り上がった女の丘の直ぐ下から始まる大きな蛤にも似た二枚貝の様な合わせ目の狭間から貝柱に例えられる突起が、まるで幼児の陰茎の様な形状で僅かに顔を覗かせ、滑稽ともあるいは妖艶ともいえるような扇情的な色香を発していた。

色鮮やかな刺青で彩られた、無駄肉の無い良く張った尻が歩む度に柔らかく左右に大きく揺れて、男達の目を釘付けにした。

目高組の三下時代には、何とかしてこの美熟女の裸姿を盗み見れないものかと毎日悶々としていたものであるが、今は盗み見るどころか、強引に無抵抗な女の太股をこじ開け、その中心に在る奥の院まで無理矢理さらけ出し、花卉の色や形や陰部の何処に幾つ黒子が在るかまで目に焼き付け、秘園から立ち昇る馥郁たる香りまで脳髓に覚え込ませてしまっていた。

しかし、今まで何度となく、この女の全裸姿を目にしたとはいえ、この魅惑に満ちた肉体に決して飽きる事はなく、間近に接する度に、秘められていた色香を新たに見出し、益々この蠱惑的な身体に魅せられていくのであった。

運命の変転とは言え、毎日この美熟女の裸身を眺められる幸福に感謝したい気持ちになった。目高組の敗北以来、裸身を男達の目の前に強制的に晒し続けさせられる日々が続き、今はふて腐れた態度で、男達の目に開き切った秘部を見せる事に慣れた様に見える元女親分であるが、このままS市の繁華街に連れ出し、元の縄張り内を素っ裸のまま練り歩いたら、ましてや道の真ん中で排泄を始めたら、道行く人はどんな驚きの目でこの女の恥ずかしい姿を眺め、一方大姐は、どの様な羞恥を示すかと想像すると思わず股間が熱くなった。

男達のネットリとした嫌らしい視線に晒されながら漸く屋敷内の剛沢の私室の前まで連れて行かれた。

部屋の扉は開け放たれたままとなっており、廊下から中の様子が窺えた。

剛沢の私室は、まるで何処かの大企業の社長室のような30畳程の洋室で、立派な額に収められた絵画が壁面を飾り、何冊もの分厚い本が収められた造り付けの本棚や何本もの洋酒が並べられたサイドボードが壁面を覆い、コンピュータディスプレイを載せた執務用の大きな木の机が部屋の中央に置かれていた。

その大きな机の上に脚を投げ出して剛沢がどっかりと座っていた。

そしてその机の前に相対する様に、何やら真新しい黒革で覆われた、大きな電動マッサージ

椅子のような形をしたガッシリとした厳めしい椅子が置かれていた。

良く見るとその黒革の椅子から張り出した肘掛け部分には数カ所、手と脚を拘束するための物らしい革のベルトが取り付けられていたので、晴江にはそれが何かは判らなかったが、自分を辱めるための新たな責め道具ではないかと直感した。

今日は客の相手をする訳では無いからと、牢から剛沢の私室まで全裸のままで連れて来られた晴江であったが、部屋の中に置かれたその不気味な椅子の発する不吉な雰囲気、無意識に太股をこじ合わせた。

男達が怯えた様に入り口に立ち尽くす晴江の背を押して部屋の中に押し込み、連れて来た事を報告すると、剛沢は、「おう」と一言声を上げて、のっそりと立ち上がり、呆然とした様子の晴江の前に歩み寄った。

晴江の顔を繁々と覗き込みながら、化粧を施していない晴江の素顔を見るのは久しぶりだが、スッピンでもまた別の色香があると、色白で細面の顔を見つめながら思うのであった。

もう40半ばを過ぎているのに、日頃使用している高価な化粧水のせい肌には小皺や弛みやシミなど見られずスベスベとした地肌を晒していた。

普段は白く塗った化粧の上に眉を描いているため剃り落とされた無毛の額から、艶やかに化粧を施された見慣れた晴江の貌の下に隠された研ぎ澄まされた生身の女の凄艶な容貌を目の当たりにして逆にそそられるものを感じた。

普段は和服を着るため美しくアップに結われる長い髪もダラリと肩に垂れかかり、まるで平安貴族の姫の様でもあり、壮絶な女の艶美を発していると感じた。

連行してきた男達は、鎖付きの首輪と足枷と後ろ手錠に繋がれていた鎖を外すと、剛沢に一礼して立ち去った。

一人残された晴江の手錠を外しながら剛沢がしゃべり出した。

「お前も随分と長くこの屋敷に居るが、俺の部屋に入ったのは始めてだろう？・・・どうしたんだ？この椅子が気になるのかい？」

晴江の不安げな視線が、この部屋の中で不似合いな革張りの大きな椅子に向かっている事に気付いて、

「どうでえ、この椅子は俺が設計して作らした、ノーベル賞物の発明さ！出来立てホカホカで今届けられたばかりだから、チョット実験台になってもらうぜ。」

と、笑顔を浮かべて、言いながら、晴江を椅子の傍に引きずり寄せ、有無を言わず椅子に

座らせた。

そして、両手と両脚を椅子の分厚い肘掛けに数カ所に取り付けられたベルトにより固定してしまった。

それは晴江が体を振っても、動きを完全に封じることが出来るものであった。

剛沢の腕力の前には精神的に完全に屈服してしまっている晴江は、抵抗する気力も湧かないのか、この真新しい器具を使って又淫靡な性の拷問を受ける事になるのかと、観念して、ホウッと溜息を吐いて、大人しく剛沢の為すがままとなって、椅子に固定されてしまった。

「どうでえ？柔らかな革椅子で良い座り心地だろう？」

すっかり諦めきった表情で椅子に固定されている晴江を眺めながら剛沢が声をかけた。

幅の広い肘掛けに仕掛けられた枷は的確に晴江の腕の動きを封じ、更にその下部に設けられた足枷は晴江の両脚を大きく広げた状態で動きを封じていた。

不気味な革椅子に拘束された緊張感からか晴江の息は速く、極彩色の刺青を施された柔らかな腹が忙しく動いていた。

その艶めかしく動く腹の下の押し広げられた股間の奥には飾り毛を失った柔らかな肉壁が隠しようも無く露わとなり、つきたての丸餅を二枚並べた様な乳白色の丸みを帯びた柔肉が蠱惑的に突きだし、大きく広げられたその狭間から淫靡な色彩を帯びた艶めかしい襷がうっすらと姿を見せていた。

剛沢はその男を挑発する様な秘裂のたたずまいをじっと見詰めながら、これまで幾多の男達からその媚肉を破壊してしまう様な激しい肉体の責めを受け続けながらも、その淫靡な肉の攻撃を嘲笑うかの様に真っ向から受けて立ち、変形も変色する事も無く、孤高の薔薇の花の様に優美な姿をいまだに留めていることに驚きを感じた。

長年に渡って男達に散々突き立てられて、すっかり擦り切れてしまい、醜く変形してしまった売春婦のなれの果てを何人も見て来た剛沢には、信じられない思いになるのであった。余程銀子による肉体改造が効果を発揮したのか、それともこの女達には元々天性の売春婦としての素質が在ったのかと思いを巡らした。

晴江が椅子に完全に固定された事を確認した剛沢は椅子から伸びた長いコードの先に付いたリモコンを操作した。すると晴江の座っていた座面が大きく下に下がり、背もたれと一体になって後ろに移動した。

同時に晴江の体を固定していた肘掛け部分も上に向かって上昇し、両側の大きな肘掛けによ

り、股間を大きく開いたまま空中に固定されたような姿となった。

大腿を上げた不安定な姿勢で中吊り状態とされ、思わず悲鳴を上げて身体を震わせた。

そんな晴江の狼狽ぶりを無視して、後退した座面部分には剛沢がどっかと腰を下ろた。

再び手にしたリモコンを操作すると、元に位置に向かってスルスルと移動を始め、晴江の尻の下に剛沢の下腹が位置した。

剛沢はズボンのチャックを下ろすと、中から分身を取り出した。

既に剛沢の逸物は隆々とした勃起姿を晒していた。

真下から剛沢の巨大に膨れ上がったモノを空中に開ききった状態になっている牝芯に押し当てられ、何時も男に体を奪われる事には慣れている晴江ではあったが、初めての体位に思わず体がビクッと震えた。

剛沢はそれを晴江のその部分に狙いを定めたまま、再びリモコンを操作して座面をゆっくりと上昇させた。

晴江を空中に固定していた肘掛け部分も同時にスルスルと下降して来た。

激烈な肉体改造に末、晴江の体も前技無しで何時でも男の肉塊を受け入れられる娼婦の体に改造されていたので、椅子の動きと共に、肉褰を分けて押し入って来た剛沢の巨大な物も何の抵抗も無く体内に収めることが出来たが、心の準備も整わない内に、突然にスーッと機械的に押し入って来た逸物に深く女体を挟まれ、小さな悲鳴を上げて、ビクビクと体を痙攣させた。

自分の硬くなった物が完全に晴江の内部に埋没したことを確認した剛沢は、一時、晴江の湿った暖かい極上の内部を堪能するかのように溜息を吐いた。

しばし暖かく濡れそぼった得も言えぬ感触の膣内に身を落ち着けた後、ほっと一つ息を吐いてから、再びスイッチを操作した。

すると座面が波打つように上下にリズムカルに動き出し、剛沢の逞しい肉塊が晴江の媚肉の筒内を出入りし始めた。

その突然の動きに煽られたように、再び呻き声を発して、剛沢の下腹の上で晴江が身を揉んだ。

「へへ、こいつは楽ちんだぜ！」

剛沢が、くつろいだ姿勢で椅子に座ったまま、晴江を責め立てながら上機嫌で言った。

「こいつは、早くも遅くも、深くも浅くも出来るんだぜ。」と言い、そのように操作して見せて、晴江に甘い悲鳴を上げさせた。

「へへ、大分この椅子が気に入った様じゃないか？」

ゆっくりと深く浅く肉塊をそのジットリと潤い始めた肉洞に出し入れすることにより、熟れた女の肉欲の情念を引き出しに掛かった剛沢が、堪え切れないように甘い息を吐き始めた晴江の耳元で囁いた。

「だが、この椅子の機能は、まだまだこんなモノじゃないんだぜ・・・」

椅子に腰掛けたまま晴江の肉体を自由に制御出来る事実に満足して、笑みを浮かべながら剛沢が呟いた。

剛沢は晴江を上に乗せたまま、椅子の横に張り出した肘掛部分の扉を開くと、何やら電気コードの取り付けられたシートのような物をその肘掛け下のポケットから取り出した。

シートは5センチ四方程の柔らかいプラスチック製のように、その中心からコードが椅子の内部まで伸びていた。

剛沢は電気コードが取り付けられたシートの裏側に貼られていたシールを取り去ると、晴江の下腹に貼り付けた。

シートには透明なジェリーの様にネットリとした柔らかい樹脂がコーティングされており、染み一つ無い白い柔らかな肌に押し付けると隙間無く密着した。

その肌に密着した、ひんやりとした気持ちの悪い感触に晴江が腰をビクッと震わせた。

全部で4枚の電極付きのシートの内の2枚を、剛沢により突き立てられた肉棒が占有する、脱毛されてスベスベの局所の真上に、まるで体内に埋没した剛沢の物を中心として外側から挟むように左右に貼り付けた。

そして、残り2枚はその上に少し左右の間隔を広げて貼り付けた。

新たな剛沢の行動に不安そうに怯えた目を向ける晴江に、

「これはな・・・低周波と高周波を直接お前の膣と子宮に送り込むための電極だ・・・」と説明して、冷たく笑うと、新たなスイッチを入れた。

その途端、シートを通じて鋭い痛感が走ると、その電撃に反応して膣を構成する筋肉がビクッと収縮した。

その肉洞の鋭い締め付けを確認すると、剛沢は更にリモコンを操作した。

それに伴い、電極を通じて連続して電気刺激が流れ膣孔をリズムカルに収縮させた。

「へへ・・・これは良い気持ちだぜ！」

リモコンのボタンやツマミを様々に操作し、晴江の肉洞が最も反応する周波数と電圧を探り

ながら感激した声を上げた。

リモコン操作に操られて、晴江の肉洞の筋肉は、晴江の意志から外れて、強くも弱くも、また速くも遅くも剛沢の思いのままに自在に制御されるのであった。

晴江は自分の意志とは無関係に電気刺激に呼応して自律的に痙攣を始めた自らの肉体に堪らず悲鳴を上げた。

そして、機械的な収縮を繰り返す、華洞の中で剛沢のモノが更に硬度を増して行くのを感じていた。

「そして、こちらだ・・・」

剛沢がリモコンの別のスイッチを操作した。

すると、晴江は自分の子宮がジワジワと暖かさを増して、何か物欲しげに子宮が蠢くようなものを感じた。

ああ・・・思わず晴江が甘い溜息を吐いた。

下腹部に貼り付けられた電極を通じて、自分の子宮が切なく悶え、子宮口が開いて暖かいネットリした樹液がドロリと膣内に流れ出すような感じがした。

「随分と感じて来た様じゃないか？すごく濡れて来たぜ・・・」

剛沢に体の変化を見逃さず指摘され、自分の心を裏切って肉体が感応し始めていることに惨めさと羞恥を感じた。

憎い仇である剛沢に最初に貞操を奪われてから既に二年以上が経過しており、その間何度も剛沢から思いのままに犯され、抵抗する事も出来ず肉体を弄ばれ続けた。

これまで奈和と共に築き上げて来た目高組を崩壊させ、暴力により自分の夫を不慮者とするだけでは飽きたらず自分達親子を最下層の売春婦の位置に叩き落とした剛沢の事を憎み、心では、いくら剛沢の肉体を拒否し続けても、何時も剛沢の絶倫の体力と逞しい男性器と次々と繰り出す女体を知り尽くした絶妙な性の攻撃の前に熟れた晴江の女体は無残に敗北を繰り返し、女肉の奥深くから自分でも思っても見なかったような生々しい肉欲を引きずり出され、惨めな敗残の姿を晒すことの連続であった。

今回もまた、心では負けまいと必死に努力しても、銀子達に調教され無理矢理開花させられた熟れた女体は、それをあざ笑うかのように、痺れるような肉欲を求めて暴走を始めようとしているのを感じていた。

この剛沢の作ったという淫靡な動きを繰り返す機械仕掛けの椅子と、逞しい剛沢の肉塊の前

に、ジワジワと、しかし確実に牝の食欲な情念をさらけ出そうとしている自分を感じていた。

興奮状態が高まり、ハアハアと甘い喘ぎ声を漏らし始める頃になると、全身を赤く染めて、のぼせ上がった体温に炙り出されるように、全身から甘美な牝の匂いを立ち昇らせる特殊な肉体を晴江が持つ事を、男達に体を売るようになった何時の頃からか、剛沢は気付いていた。それは、晴江自身も気が付いていない体調の変化だろうと思われるが、その汗の臭いや愛液の臭いとは別の濃厚な体臭には、牝の獣欲を煽り立てるような性的フェロモンを含んでいると剛沢は感じていた。

動物の牝には牝を発情させ交尾を成功させるため、牝を嗅覚的に興奮させる様な肉体機能が潜んでいると云われるが、人間に進化する間にそのような生理機能は消失してしまったのかも知れない。

しかし、並の人間の女なら経験することの無いような壮絶な肉体改造を受け、絶え間なく男から蹂躪されるという女体の生き地獄を彷徨う内に、そのような獣的な牝の本能が呼び覚まされたのかも知れないーと、思った。

過酷な調教と度重なる男達の力に晒され続ける内に身に着けた、男達を快感の熱狂の混乱の中に巻き込んでしまい、興奮の渦の中で、きりきり舞いさせて男達を手玉に取り、自失に追い込んでしまうような、女の情念の籠もった魔性の力のように剛沢には感じられた。

お竜の場合は、本来秘めていた名器としての素質を無理矢理開花させられ、その高性能な女の武器で男に立ち向かい、男をきりきり舞いさせ、男を先に自失させることにより、男達の攻撃から己の肉体が破壊される事を防衛している様に見えるが、晴江の場合は、この性フェロモンが男達に立ち向かう大きな武器となっているのだと思った。

この晴江の身体から立ち昇る、男を狂わせずには置かないようなフェロモンの前には、まるで麻薬をやった様に、どんな男でも理性を失い、忘我の状態に追い立てられ、無我夢中でこの女体を食ろうとすることだろう。

奈和組長は夫婦として長い間この女の体を自由に抱いて来たとは言え、このように極度に牝として開発された素晴らしい女体の快感を決して味わったことは無かった事だろうと思うと、心の底から優越感が沸き上がって来るのであった。

身体の芯から疼く様な熱気が込み上がって来て、上気した体に薄く汗を浮かべ、無意識の内にアッアッと短い呻き声を上げるようになっていた。

唇を必死になって噛みしめ、襲い来る肉欲に負けまいと健気に抵抗を続ける晴江の姿が目映ったが、晴江の体から立ち昇る濃厚な牝の匂いは益々強くなっていた。

そして、その甘美な甘酸っぱい体臭に剛沢の本能も煽られて行った。

剛沢は、なおりズミカルに椅子を上下させ、それと同期するように下腹に、電流を注ぎ込み晴江の女性器をリズムカルに制御し続けていた。

ズンズンと真下から突き上げる剛沢の固くて太い業物が、今や女の情念をハッキリ意識の中に引きずり出し、電気刺激による緊縮を促されていた肉洞の筋肉は、今や自律的に剛沢の物を締め上げ始めていた。

可愛がっていた子分達から裏切られ、父とも思っていた村崎親分から裏切られ、配下の系列の親分達から裏切られ、実の弟から見捨てられ、そんな裏切り者達から身体を弄ばれる内に、最早外部から助けが来る望みは、完全に絶たれてしまっている事を何時しか意識する様になっていた女達であった。

そして、そんな絶望感を埋め合わせる様に、日々変態性を帯びた冷酷な男達から絶え間なく与えられる加虐の底無し沼で藻掻き苦しんでいる内に、何時の間にか剛沢達が望む様な、汚辱と暴力を被虐の喜びに変えてしまっている人間に改造されてしまった事に自分でも気付いていた。

何時も、快感の絶頂を極めて醒めた後の白々とした屈辱感と惨めさが襲い掛かって来るのは分かっていたが、今この僅かな時間だけでも、この目眩く肉体的快感の中に身を投げ込み、例え一時であっても、一切の悔しさや惨めさを忘れてしまいたいと願うのであった。

股間から込み上げる痺れる様な激しい快美感は、身を焦がし、激しく立ち昇る竜巻の様に今や晴江の脳髓を襲い、まともな思考能力も維持出来なくなっていた。

又しても剛沢の肉体の魔力に煽り立てられ、女の浅ましい情念を余すことなく剥き出しにされようとしている事が判った。

後ろを振り返ることの出来ない晴江の背後から芳醇な香りが漂って来た。

それと共にグラスに液体を注ぎ入れる音やボトルを置く音も聞こえた。

熟れた女の身体を楽しみながら時折サイドテーブルに手を伸ばし好物のブランデーを味わっている事が気配から窺えた。

晴江の様子に気付いたのか、「どうだ？お前も一杯やるか？」と、耳元に口を寄せ高貴なアルコールの匂いを帯びた息を吹き掛けた。

「お願い・・・私にも飲ませて・・・」

晴江はそれほど酒好きでは無かったが、強いアルコールに酔い痴れ、唾棄すべき男から陵辱され続ける汚辱感から逃れたい気持ちから、甘い声音で口にした。

「良いだろう・・・」と、一言呟くとグラスに並々と注がれたブランデーを一口含み、晴江の形良い顎に指を添えて、こちらに振り向かせた。

剛沢の意図を理解した晴江も逆らわず、剛沢に向かって柔らかな唇を差し出した。

互いに熱く唇を重ね合わせると、剛沢の唾液の混じったブランデーが晴江の口内に注ぎ込まれた。

剛沢と唇を繋ぎ合ったまま、晴江の喉が上下した。

口の端から溢れ出た黄金色の液体が喉を伝って胸の谷間に流れ落ちた。

「美味しいわ・・・」

酒にそれ程強くない晴江の身体が胃に注ぎ込まれた強いアルコールの影響でほんのり桜色に染まった。

「もっと飲むかい？」

「ええ・・・もっと酔わせて・・・」

背後から無骨な手でツンと尖った乳首を揉み上げられ、ジワジワと勃起し始めた陰核をまさぐられながら、熱い吐息の様な言葉で応えた。

その後も口移しで何度もブランデーを注ぎ込まれた。

アルコールが全身に回り始めたのか、熟女の潤いを帯びた女陰は一層甘美さを増し、その中を蠢き回る男根をネットリと絡め取るかの様に感じた。

ああっ・・・と、甘美な吐息が半開きの晴江の口から上がった。

酒の酔いに煽り立てられ制御出来ないまでに肉欲は込み上げ、椅子の上で剛沢に真下から突き上げられたまま、甘い喘ぎ声を発しながら上体を激しくくねらせる様になっていた。

激しく揺れ動く頭の動きに結われていない長い髪が剛沢の顔面を擦った。

剛沢を載せた淫靡な椅子は益々その動きを強くして、剛沢の逸物を咥え込んだ秘孔はズキズキと激しい刺激を脊髄に送り、両手でわさわさと揉み上げられる乳房の甘美な感触は、まるでピンクの靄がかかった様に脳髄を支配し、後僅かでもたしても惨めで恥ずかしい敗残の姿を晒してしまうであろう事を哀しい諦めの気持ちで迎える晴江であった。

何時しか豊富な愛液を溜めた蜜壺に剛沢の業物が出入りする度に、まるで足首まで水が入っ

たゴム長靴で歩いた時の様な大きな恥ずかしい音が部屋の中に甦る様になっていた。

そんな切羽詰まった晴江の姿を無視する様に鼻歌を歌いながら、剛沢がフカフカのソファに腰掛けたまま、女を真下から犯す快感に酔っている時、ドアをノックする音がした。

剛沢は、晴江との情事の現場を他人に見られことも気にならないのか、「おう、入れ！」とドアに向かって声を掛けた。

ドアを開けて入って来たのは黄原であった。

突然の黄原の侵入に、最後の頂きに向かっていた晴江は、突然冷や水を浴びせられた様に身体がビクッと震わせた。

そして股間を大開にして肉擦れの恥ずかしい音を響かせながら、真下から剛沢に責められる自分の姿を直視される事に恐怖の様なものを感じた。

黄原は、手に大きな薄茶色のクラフト封筒を抱えたまま、無言のまま表情を変えることなく、こちらに歩んで来た。

「八方手を尽くしてやっと手に入れることが出来ました。」

目の前で繰り広げられる二人の激しい情事もまるで気にならないかのように落ち着いた口調で、二人の傍に歩み寄り、晴江の背後に座る剛沢にA4サイズの封筒を手渡した。

剛沢に封筒を手渡す時、黄原は、醒めた目で、ちらっと剛沢の業物で真下から串刺しにされている晴江に目をやった。

絶頂を前にした薄い意識の中で、うっすらと開けた目に、冷酷な眼差しで自分に視線を送る黄原の様子が映り、まるで全身に水を浴びせられた様に、これまで狂わしく込み上げていた快美感が一機に減退するのを感じた。

晴江の良く熟した秘肉が左右に大きく開いて、椅子の動きに合わせて滑らかに出入りする剛沢の太い肉茎を周囲の柔らかな襞が包み込む様に呑み込んでいる様子が、隠しようもなくさらけ出されていた。

レーザーにより綺麗にツルツルに脱毛され、まるで童女のような姿を晒す一方で、娼婦として鍛え上げられた形良く肥大した陰部に、椅子の動きに合わせて機械的に剛沢の逞しい肉茎が柔肉を押し広げて、上下する様子がまざまざと黄原の目に捉えられた。

そして電極シートを貼り付けられた下腹の筋肉が強く弱くリズムカルに痙攣し、剛沢のモノを喰い絞める様子が、ありありと分かった。

晴江の膣内から滲み出した夥しい愛液に塗されて、深く浅く出入りする剛沢の長大な肉塊は艶々と輝いていた。

晴江にとって憎い敵方の男であるはずであるが、その敵方の男によって開発された尽くした身体は心の反発を押し退け、左右に大きく押し広げられた女陰は、寸分の隙も無く剛沢の太い肉塊を咥え込み、開花された女の本能に従って喜々として迎え入れ、その付け根までギチギチと喰い絞めていた。

血反吐を吐く様な激烈な肉体調教の末に鍛え上げられた最高の女肉は、剛沢の陰茎を深々とその極上の肉洞の中に咥え込み、過酷な訓練により身に付けた自律的な収縮に電気による刺激で加勢されビクビクと下腹の筋肉を痙攣させる様に体内に埋め込まれた剛沢のモノを強く締め続けていた。

そして、硬化した剛沢の巨大な肉塊を思い切り食い締める事は、反作用として得も言われぬ快美感を晴江の肉体にももたらすのか、全身を赤く上気させ、半開きになった口からは甘い息を忙しなく吐いているのであった。

自分の肉体を法悦の境地へと導いて下さる有り難い剛沢の肉茎に感謝の気持ちを伝える様に、後から後から夥しい樹液を吐き出して、上下に出入りする剛沢のモノをテラテラと塗り込めて行くのであった。

黄原の蔑む様な冷たい視線を痛切に意識すると、これまで幾度となく恥ずかしい裸姿を男達の目の前に晒し、客を歓待するための見せ物として曉美やお竜と女同士の情事やその手の行為を稼業とする男を相手に淫靡な艶技を披露する事には慣れたとはいえ、目高組を滅亡に追いやった憎むべき元幹部に自分が剛沢の陰手の前で感じている姿を見られることは、今となっても晴江にとって最も辛く感じることであり、剛沢から与えられていた肉欲から精神的にすっかり醒めた晴江は、黄原の目から逃れるように顔を背けた。

剛沢の様に好きな時に好きなだけ自分の身体を蝕むのであれば、他の自分の肉体を蹂躪するだけの男達に対して憎しみや軽蔑心を掻き立てる事により耐えられたかも知れないが、この男は剛沢から命令された時以外は、決して自分の身体に触れようとせず、常に一步下がったところから、まるで蛇の様な表情の無い目で見詰めるだけであった。

それが余計に晴江にとって得体の知れない不気味さと嫌悪感をもたらすのであった。

そんな黄原に対する嫌悪感を裏切る様に、剛沢が突き立てる股間から、太い肉塊が出入りする度に発する恥ずかしい響きを黄原の耳に聞かれる事に恐怖感さえ帯びた激しい羞恥を覚えるのであった。

「ご苦労。」と、一言言って剛沢は黄原から封筒を受け取ると、クルクルと封筒を封印して

いた紐を解き、中から書類を取りだして目を通し始めた。

剛沢が封筒の中に物に目を通していている間に、黄原は氷の様な冷たい目で晴江の様子を観察している様に見えた。

長時間に渡って剛沢に責め立てらる最中に、黄原の突然の出現により冷や水を浴びせられ、正気を取り戻した精神状態とは裏腹に、熟れた女体は肉欲のゴールに向かって一人暴走を始め、最早体の疼きは引き返すことが出来る線を越えてしまった事を、そののぼせたように火照った体の様子から完全に見切っている様で在った。

剛沢のモノを深々と咥え込んだ際に晴江の陰裂からジュブッと大きく音が響いた瞬間、黄原の口元に冷たい笑みが浮んだように感じられ、思わず全身を硬化させる晴江であった。

激しく狼狽する晴江に、冷たく一瞥をくると、そのまま無言で退出して行った。

黄原が後ろ手にドアを閉めて姿を消したのに気付いて、晴江は、ホッと救われた様な気分になった。

剛沢から命じられると自分達を虐待する仲間に加わるのに、剛沢のように自らの肉欲と男性本能の赴くままに自分達を積極的に抱こうとせず、逆に、常に一步引いた所から、蔑むような冷たい目で見詰める黄原に、まるで爬虫類の冷たい目で見られるように、何時もぞっとするような不気味なものを感じていたのだった。

黄原が立ち去ったという安心感が、さっきから連続して突き立てられている秘所からの心地良い摩擦感と、女陰内奥から込み上げる、疼くような、痺れるような刺激と呼応して、熟れた晴江の女体に、快感を求める牝の本能を押さえも効かず再び呼び覚まそうとしていた。

堪えようとしてもハアハアと吐息が断続的に口から漏れ、腰がブルブルと震え出し、剛沢の貫く陰門からは、今や恥ずかしい音を連続して発生していた。

一方、剛沢は、椅子を自動で動かし、猛々しい肉茎で熱い樹液を吹き出す陰門を貫き、熟れた女体を楽しみながらも何も声を上げることはなかった。

がっちりと拘束されているため、後ろを振り返る事は出来ないが、雰囲気から、どうやら封筒の中から写真を取り出して眺めているらしいことが判った。

椅子を滑らかに上下させ、電撃により痙攣を繰り返す晴江の内部を堪能しながら、剛沢は、丹念に一枚一枚の写真に目を通していた。

じっくりと写真を眺める剛沢の物が、晴江のグッショリと濡れた秘奥の内で、また一段と膨張するのが感じられた。

一通り目を通し終わって、ふーん、と短く溜息を吐くと、

「どうだい？お前も見るか？」と数枚の写真を晴江の眼前に差し出した。

黄原が立ち去り、ほっと心が緩み、一度は頂上を目前にして突き落とされた情欲が再び頂点を目指して登り始め、熟れた女体が食欲に官能を貪ろうとするかのように、無意識にそして自発的に筋肉を動かし、肉洞深く突き立てる剛沢のモノを積極的に食い絞め始めていた矢先に、その写真を見せられ、晴江は愕然となり、一気に血の気を無くした。

それは一人の若い男が木の枝から垂れたロープにより首吊りしている写真であった。

そして、その男は苦悶の表情を浮かべて死に顔を作っているが、明らかに自分の息子の征雄であった。

他の写真も、全て同じ首吊り風景を色々アングルを変えて撮影した物だった。

首吊りの台に使った物だろう、宙に浮いた足下に転がるビール瓶を入れるようなプラスチックの箱を撮影した写真もあった。

「これはな一、警察の内部にあちこち手を回して、やっと手に入れた現場写真だ。・・・可哀想に、お前所の息子もムショ^{トコ}から出所して来ても、行く場所も無く、酒をあおった末に、首吊り自殺してしまったよ・・・」

と、写真を元の封筒に収めた剛沢が背後からショックで硬く凝った乳首を指先で弾きながら言った。

写真を見せられた直後から晴江の身体は硬直して、酒の酔いも肉体的欲望も一機に失せ、蒼白の表情となり・・・お前達が息子を殺したんだ、お前達が息子を殺したんだ・・・と、小刻みに体を震わせながら小さく讒言のように呟き始めていた。

「おいおい、人聞きの悪いことを言うなよ。警察の見解でも100パーセント自殺で、事件性は、ゼロと言っているんだぜ」

剛沢が晴江をなだめるように囁いた。

「お前が息子を殺したんだ！人殺しめ！人殺し！お前なんかに抱かれたく無い！」

涙を流し、段々とヒステリックな叫び声になりながら、死に者狂いで体を振って椅子に固定された手脚を振り解き剛沢から逃れようとした。

「おいおい、息子が自殺してショックなのは判るけど、人の事を人殺し呼ばわりは、良くないぜ！・・・泣いて叫んでも死んだ者は還って来ないだろう・・・それより今はそんなことを忘れて楽しもうぜ」

と、椅子の動きを一層激しくするのであった。

狂ったように泣き叫び、怒りと悲しみに激しく身悶える晴江の体を貫くように強烈な振動で

責め上げるのであった。

自分が殺させた男が二十数年前に通り抜けて、この世に生を受けた母親の産道を今自分の凶暴な男根が占拠して、思う存分蹂躪しているのだと思うと、何か悪魔じみた背徳の愉悦感が沸々と沸き上がり、痺れる様な勝利の快感が込み上げて来て、更に甘美な肉洞の中で大きく膨張するのが判った。

そんな荒くれた凶悪な肉茎をピッタリと押し包む肉のトンネルからは、まるで温泉を掘り当てた様な、熱く滾る夥しい体液が湧き出し、剛沢の物を洗う様に熱く包むのが判った。

子供を殺された悲しみと怒りで懊悩し、錯乱して身悶える母親の姿に、剛沢のサディスティックな心が刺激され、晴江の中心に突き刺している剛沢のモノが、更に硬く大きく膨らんだ。電撃の強度を最強に上げたため、晴江の意志の拘わらず、今や膣の筋肉は痛い程剛沢のモノを締め上げ、熱く火照った子宮は男の精を求めて激しく疼いていたが、晴江の心はそのような肉欲を拒絶するようにわめき続けていた。

性感を希求する熟れた女体と母親としての理性が、一つの身体の中で分離してしまった、そんな頑なな晴江の態度を力尽くで打ち破ろうとするかのように、剛沢の猛々しく勃起した巨大なものが、猛烈な勢いで晴江の体内を上下した。

「お前も口先だけでは、息子が自殺してしまって、悔しいだの何だの、ほざき上げているが、どうでい！オ●から本気汁をダラダラ垂れ流しやがって、上等の本革製のシートもグショグショでまるで池の様じゃないか？お前はチ●を●コに突っ込んで貰ってアクメ汁を垂れ流すことが大好きな、男のアレが無ければ生きて行けないマゾ牝なんだよ！」
なおも必死に抵抗して身悶える晴江に対して、性感帯を弄びながら剛沢が怒鳴るような声を上げた。

「アアーッ！違うわ！私はマゾ牝なんかじゃない！お前なんかにイカされたくない！」と、狂った様に泣き叫び、必死に身を揉む晴江に対して背後からしがみ付く様に乳房を揉み立て、股間の敏感な木の芽をまさぐりながら、

「うるさい！このマゾ牝め！息子が死んだというのにヨガリ狂ってスケベ汁を撒き散らすだけの最低の売春婦め！」と、声を荒げ荒々しく性感帯を責め上げた。

「それ逝け！さあどうだ？」と、汗塗れになって必死になって責め立てる剛沢であった。

「アアーッ！嫌！アアーッ！離して！」

心とは裏腹に外部からの電気刺激に呼応して膣内に突き立てられて剛沢の肉茎を強烈に絞

め上げ、熱く火照った子宮はその内部から熱湯の様な樹液をドクドクと噴き出し、剛沢の指摘するように肉体は本能の頂点に向けて暴走しようとしていたが、息子を殺された怒りと悲しみが、憎い男の体によって最後の瞬間を迎えさせられることを頑強に拒絶していた。

「まだ逝けないのか？これでどうだ！」と剛沢も声を荒げて汗を浮かべながら苛烈に責め上げた。

剛沢の獣じみた肉塊に責め立てられ、無惨に蹂躪され、普段ならとっくに絶頂を迎えている筈であったが、その日の晴江は息子を殺された怒りと悔しさで心と体が分離して、悲痛な叫び声を上げ激しく身体を震わせるだけで、なかなか頂上を極める事は無かった。

しかし、絶頂の瞬間を堪えれば堪える程、その瞬間の衝撃は破壊的な大きさになることを知っている剛沢は、ともすれば晴江の熱い肉の中で自失しそうになるのをグッと堪えて責め続けた。

それから何時間も残酷な椅子に拘束され、身動き出来ない哀れな女の二つの穴を電動椅子に腰掛けながら散々責め上げ、怒りと悲しみに打ち震える母親を精魂を尽き果てるまで嬲り尽くしたのだった。

その時の様子を好物のブランドーを嘗めながら、剛沢が、面白そうに黄原に向かって説明した。

「小便まで撒き散らして嫌がる女を最後は無理矢理往生せてしまうとは、さすがはボスだ！」

黄原が感心したように応えた。

「それだけじゃない！電気刺激に煽られて、開き始めた子宮の入り口を無理矢理こじ開けて、俺の太いのを子袋の中に強引にねじり込んやったぜ！その時の締め付け具合は凄まじかったぜ！・・流石の俺も思わず子袋の中に有りっ丈の熱い精液をぶちまけてしまったぜ！・・その瞬間、気が狂った様な大声を出しやがってよ！その時のヨガリ狂う晴江の姿を見せてやりたかったぜ！」と、すっかり酔いの回った赤い顔で、勝ち誇ったような笑い声を上げるのであった。

愛虐の父娘

牢内に据え付けられた医療用ベッドの持ち上がった背もたれ部分に支えられて、上半身を起こした奈和組長が、暁美の手にしたスプーンからお粥を与えられていた。

晴江とお竜は上半身と下半身とを分担して、蒸したタオルで体を拭いていた。

暖かい湿ったタオルで全身に拭かれて、その下から全身に彫り込まれた刺青が艶々と輝いていた。

青沼と若親分を剛沢の陰謀により殺されてから既に数ヶ月が経っていた。

これで外部からの救出の見込みが全て断たれた女達に取って、奈和組長が奇跡的な回復を遂げて、助け出して貰うことが、儚い最後の夢となっていた。

自分達の力ではどんなに頑張っても剛沢の力の前には敵わないと諦めていたが、奈和組長が昔の力を取り戻せば、剛沢とも対等に戦えると信じていたのであった。

女達の献身的な看護により、体は驚く程回復しているように見えたが、全身の麻痺は残り、自力では体を動かすことも喋ることも出来ず、記憶も完全に失っているように見えた。

「お前達の手厚い世話で、随分血色が良くなってきたじゃないか？」

銀子や黄原を伴い監禁室を訪れた剛沢が、女達の世話を受ける奈和組長を見て薄笑いを浮かべながら言った。

「この分じゃ、又元気を回復して暴れ出すかも知れないな？」

と、囚われの女達の最後に残された微かな希望を小馬鹿にする様に笑い飛ばした。

剛沢が自ら女達を閉じ込めた牢に足を運ぶ時は、女達にとって良くないことが起きる事を身に滲みて判っているので女達は、不安そうな顔をした。

「今日は、俺も黄原も一日中暇だから、銀子の調教を手伝わせて貰うぜ。」

と、新たな肉体調教を開始することを宣言した。

「先ず、すっかり元気になった奈和組長にお前達のこれまでの調教の成果を見せてやったらどうでい。」

と、言うのと、組長が入れられた檻と向かい側の檻の鉄格子に三人の女を並べて正面を向くように後ろ手に手錠で固定した。

自分の夫や父である男の目前で、恥ずかしい姿を晒す羞恥に身悶えたが、両手を手錠で後ろ手に鉄格子に固定されてしまい、逃れる術もなく、女達は観念して下を向いた。

三人をずらっと横一列に並べた剛沢は、三人の裸体をじっくりと観察しながら言った。

「どうでい？揃いも揃って見事なウツキが三つ並びやがったじゃないか！それに3人とも赤子みたいに正面から大事な所が丸見えだろう？」

「本当ね！肉の花が三つ咲いたみたい！」

全身に刺青を入れた晴江の爛熟した裸身や、お竜の女盛りの裸身や、これから盛りを迎える若い曉美のそれぞれの年代による特色を持った裸身が並んでいた。

しかし、三人に共通していたのは、レーザーにより永久脱毛処理を施され、二度と生える事の無いスベスベの股間に改造されていたため、正面からは隠しようも無く上付の女性器がさらけ出されていたことである。

そんな羞恥に身をもむ女達が自分の妻や娘や愛人であることも理解できないのか、立ち上げたベッドに背を預けて奈和組長がじっと濁った眼で見つめていた。

「ちょっと！恥ずかしくないの？三人ともそんなビラビラしたものを堂々とさらけ出して！こっちまで変な気分になってくるわ！」

銀子が口を隠しながら可笑しそうに笑い声を上げた。

「どうでい、連日性交渉を重ねて、男の精を毎日浴び続けて、女達も随分艶っぽく成って来たと思わないか？」

と、半開きの口から涎を垂らしながらワウワウと獣のような呻き声を立てて、こちらをじっと注視する奈和組長に向かって声を掛けた。

脱毛処理されて、艶々とした童女のような性器を晒す女達を一々点検するように指し示しながら、

「特にテメー^{トコ}所の娘はよ、ここに来た当時は、まだ、おぼこみたいだったがよ、今じゃ並の女が一生掛かっても出来ないほどの経験を積んだんだぜ・・・」

両手で曉美の柔らかい肉を押し広げ、内部の柔らかい微妙な形をした薄い襞を両手の指で摘んで広げながら、「ほら、こんなに成長したんだ。」と、曉美が涙を浮かべてイヤイヤと身悶えるのも構わず、笑いながら説明するのであった。

「今じゃ、この女達はこんな芸当を易々と出来るんだぜ・・・」と、剛沢は銀子に茹で卵を持って来させた。

お竜、晴江、曉美の順に立たされた女達の前に、それぞれ銀子、剛沢、黄原が卵を手にして腰を屈めた。

充分に股を開けさせた、女の股間に茹で卵をあてがった。

正面から見詰める奈和親分の目には、飾り毛を失った女達の淫靡な部分に卵が埋め込まれピンク色した股間の狭間から白く艶々した卵が半分以上姿を見せている様子が在り在りと映った。

抵抗しても逃れられない事を悟った女達は、黙って教えられた通りの技術を発揮しようと努めた。

そこに卵を押し付けられた後、加虐者の手から卵を受け取るように下の口が大きく開いて、暫く卵を咥え続けていたが、腰を小さく二三回振り、股間を緊張させると、吸い上げるように卵をするすると上昇させて行くのであった。

柔らかい下腹の脂肪越しに腹筋が蠢き、太股の筋肉が緊張する様子が映った。

手を使わず、卵が体内に完全に吸い込まれた様子を見て、男達が手を叩いた。

真っ白い大きな卵は今や完全に桜色の股間に飲み込まれ、柔らかな肉襞が何事もなかったように閉じ合わされた。

「そら！入れた物は、今度は出すんだ！」と剛沢が晴江の心なしか膨らんだように見える下腹をポンと叩いた。

すると花園の花びらが見る見る開き、その赤黒い襞の中心から白い卵が徐々に姿を現し始めた。

体液に濡れ輝る卵は徐々にその姿を大きくさらけ出し、もう少しで卵を産み落とすまでになったが、嗜虐者達は意地悪く肉襞を押し分け飛び出て来た卵を押し戻すように手で押し上げた。

剛沢達の意図を察した女達は、再び肉洞を使って卵を吸い込みにかかった。

大きく姿を晒していた卵は再びスルスルと胎内に吸い上げられ、その姿を隠した。

充分に奥まで卵が上昇した事を確認すると、再び卵を降ろすように命じた。

こうして嗜虐者達が満足するまで何度も卵を胎内深く吸い上げたり、体外に押し出したりとの反復運動を繰り返させられた。

白く艶々した卵の表面は女達の愛液に塗れて妖しく輝いていた。

神経の集中した華洞内を上下するピストン運動に性感が煽られたのか、あるいは客の前で卑猥な花電車の芸を披露する時には、仕込まれた仕草が自然と出てしまうのか、卵を胎内で上下に操りながら、女達は辛そうに眉根を寄せて甘い悲鳴を上げて腰をなよなよと揺らせ続けた。

この状況を理解出来るのかどうか、奈和組長は目を血走らせて、女達の秘部にじっと視線を

注ぎながら、獣の呻き声のような声を上げていた。

「どうでい？面白いだろう？」

必死に卵と格闘する女達を瞬きもせず、じっと見詰める奈和に剛沢が声を掛けた。

「だがな、こんな事は、女なら誰でも出来る位の芸で、本格的な花電車の芸に入る前のウォーミングアップみたいなもんだぜ」

剛沢が奈和の方を見ながら笑い声を上げた。

もう十分体も柔らかくなったろうと、晴江の白い下腹をポンポンと叩いた。

全身に薄く汗を浮かべた女達は、嗜虐者達の許しが出たことにホットしたように、卵を産み落とした。

コンクリートの剥き出しになった床の上に茹卵が落下し、表面をベツトリと被っていた粘液を撒き散らせて、黄身や白身が幾つにも砕け散った。

「前の方は、一人前になったが、後ろの方は、まだ客から串刺しにされて、ヒイヒイ喘ぐだけしか能が無いから、そろそろ後の穴を使った芸も身に着けて貰わないとな・・・」

剛沢が血走った目で、瞬きもせずこちらを見詰める奈和の方を向いて、歯を見せながら言った。

これまで長い間絶えることなく変態性を帯びた客達により後ろから犯され続け、何時の間にか肛口と直腸の筋肉を駆使して男の精を搾り上げる能力を身に付けてはいたが、まだ前の穴の様に器用な芸を出来る程では無かった。

「剛沢ボスの命令よ！久しぶりにあなた達に芸を仕込む事になったのよ！前の方は綺麗囃姐さんをお願いして一応の花電車の芸は仕込んでもらったけど、一通りお客さんに芸を披露して新鮮味が薄れて来たから、今日から後ろの穴でも前の穴と同じ様な芸当が出来る様に調教して上げるわ！」

元目高組の女達が売春婦に身を墜とした直後は、珍しさも有り、また目高組と因縁を持つ男達も多かったので、正規の料金にプレミアムを付けても抱きたいという男達が引きも切らなかったが、これらの男達も一巡して女を抱き飽きると、一頃のようにぼろい稼ぎが出来なくなって来ていたのだった。

そこで尻穴を使った花電車の芸を覚えさせて、再び客足を取り戻そうと剛沢が考えたのであった。

「以前貴女たちを調教していた頃は、奈和親分も生死の境を彷徨っていたから、貴女たちが

性技を磨いて行く様子をお見せ出来なかったけど、本日から奈和親分にも貴女たちの調教の様子をお見せするわ！親分が見ているのだから張り切って覚えなければ駄目よ！」

銀子が嬉しそうに声を上げた。

客の面前では恥ずかしい芸を披露することに慣れた女達であったが、記憶を失っているとはいえ、自分の夫や父親や情人の前で惨めな姿を晒すことに羞恥を覚え、檻の鉄柵に繋がれていた手錠を外された時、なよなよと崩れ落ちそうになった。

嗜虐者はそんな女達を抱き抱え、無理矢理背後を向かせると、今までとは逆に奈和組長の方にお尻を突き出すような姿勢で、女たちを鉄格子に両手を固定した。

「まず、ケツ穴を鍛える前に、そこの中から汚い物を搾り出しておかないといけない。」と、巨大な注射器のようなガラス製の浣腸器を持って来させた。

たっぷりと浣腸液を吸い上げた、ガラスの太い嘴管を肛門に突き刺し、ピストンをゆっくりと押し上げながら、

「どうでい、毎日毎回客から浣腸されて、こんな事が楽しくて仕方なくなって来ているんじゃないか？」

と、肛門から腸内に向かって突き上げてくる痛感とは異なる妖しげな圧力を下腹に受けながら羞恥に身を揉む女達をからかうのであった。

剛沢が意地悪く指摘する様に、腸内に浣腸液をドクドクと注ぎ込まれると、心臓の鼓動は早くなり、前の方が熱く疼く女達であった。

何度も浣腸器で微温湯を注ぎ込んだ後、晴江の良く張った尻を後ろから撫で回しながら剛沢が嬉しそうに声を掛けた。

「お前がマン■に筆を突っ込んで書くマン字は客の間で凄く評判が良いんだぜ・・・好き者の間で高値で転売されていると言う話だぜ・・・」

左手で尻を撫で回しながら、右手で秘裂をゾロリと撫でたので、晴江はビクッと身体を震わせた。

「今度はケツの孔に筆を咥え込ませて、ケツ字を書かせてやるぜ！垂直に立てた半紙にケツを向けて字を書くって寸法だ！」

と、自分の考えを披露して嬉しそうに大笑いした。

「字が逆になるし自分の書いている字が見えないから格段に難しくなるけど、晴江なら易々とやってくれるだろうぜ！」

今度は右手の親指をピクピク痙攣する菊花に宛がい笑い声を上げた。

微妙な部分を撫でられながら、今後自分を襲う事になる惨めな調教に思いを巡らし、悲痛な呻き声を上げた。

大量の微温湯を腸内に注ぎ込まれた後しばらく時間を置かれた。

その間、女達の下腹を重く襲っていたお湯は腸内の汚物を溶かし、ゆっくりと渦を巻くように腸内を駆け巡り始めた。

そして、グルグルと腸が自律的に運動して、ひっきりなしに汚物を掻き回す音が周囲にも響き始めた。

やがて、堪らなくなったように、女達は迫り来る排便の欲求に身を振らせ始めた。

「まあ、そう慌てるもんじゃ無い、ゆっくりと時間を掛けて腹の中の物を浣腸液で溶かしてしまわないとな・・・」

何時も浣腸責めを仕掛けてくる客に対して客の陰情を昂じさせるテクニックとして身に付けた艶技として、淫靡に尻を振り立て、啜り泣きを漏らして、込み上げる排泄の欲求を嗜虐者の目に示す女達の様子を卑猥な含み笑いを浮かべて眺める剛沢が、「もう少し我慢出来るように栓をしてやろう・・・」と、言う、汗にビッシヨリまみれ、ピクピク収縮を見せる晴江の菊の蕾に中指を強引に差し入れた。

突然の剛沢の指の侵入にビクッと腰が震え、鼻に掛かった甘い呻き声を上げた。

何時の間にか晴江も娼婦としての本能を身に付け、男を喜ばせる艶技を自然と演じられる様になったものだと思しさが込み上げてきた。

剛沢は指の根元を痛いほどの力で締め付ける肛門の強い筋力と腸内で渦巻く熱い液体の動きを指先で感じ取っていた。

グルグルと動き回る濁液の中で腸内に突き立てた指先を掻き立てると、鼻の頭に汗を浮かべながら鼻に掛かった甘い悲鳴を上げた。

本来は腸内に滞留した便を排出するための医療行為である筈の浣腸であるが、男と女の間の秘めた性行為の一部として、性交にも似た激しい快感を強制された浣腸から得る事が出来る身体に改造されて来た事は明らかであった。

前に手を回してその様子を探ると、腸内を掻き巻く様な激痛に見舞われながらも、二つの柔肉の割れ目がジットリと濡れている事が確認された。

左右の女の様子を見回すと、二人とも浣腸責めに感じている様子が在り在りと映った。

さて、そろそろ良いだろう。と三人の後ろにポリバケツを用意させた。

両手を頭上で鉄格子に手錠で固定されているため、女達は完全にポリバケツの上に腰を下ろすことは出来ず、中腰の姿勢で、尻穴をポリバケツの方に向けた。

剛沢の許可が出て、女達が一斉に放射を始めた。激しい勢いで噴出する茶褐色の液体は激しくバケツの壁を叩き、バケツを吹き飛ばしてしまうのでは無いかと思われた程であった。

長い苦悶の末に溜まりに堪った苦痛の液体を一機に放出した瞬間、女達は絶頂時に発する様な艶美な咆吼を上げた。

それも男の劣情を掻き立てるためのこれまで客との交情の間に身に付けたテクニックであるが、今や自然に女達の口を吐いて出るようになっていた。

最初の激しい放水が終わると、女達の身体からガクッと力が抜けた様に下腹を下げ、その後はドロドロとした軟便を滝のように何時までも放出し続けた。

又しても加虐者立ちの目に羞恥の姿を晒してしまった屈辱感に、女達は嗚咽しながら、汚物を垂れ流し続けた。

剛沢達の持ち支えるポリバケツの中にドロドロとした汚物の山を積み重ねていった。

「へへ・・・お前達随分と溜め込んでいたじゃないか？こいつは重くて仕方無いぜ！」

バケツの中に蜷局を巻く便の山を見詰めながら剛沢が戯けた声を上げた。

この凄まじい光景と牢内に充満した強烈な臭気に、檻の中から奈和組長は、血走った目を大きく見開き、猿のような奇声を発して、じっと眺め続けていた。

加虐者達から尻穴の周りの汚物を紙で拭き取られ、蒸しタオルで股間を清掃される間、女達は、ぐったりと中腰の姿勢を続けていた。

「どうだい？気持ち良かったかい？・・・こんな楽しい思いを何時もさせて貰って、後始末までして貰って、何時までも此処に居たいと思うだろう？」

蒸しタオルで脱毛されてスベスベした晴江の股間を丁寧に拭き取りながら剛沢が楽しそうに尋ねた。

「さて、これから調教に入るか・・・先ず、卵を埋める前に、パイプでここの筋肉を柔らかくほぐしておこうか？」と、加虐者達はこれから埋め込む卵と同じくらいの直径のありそうな巨大なパイプを手を取った。

低い電動音を響かせて、パイプが先ほど汚濁物を排泄したばかりの、薄く開いた菊の華の上に押し当てられ、そのままズブズブと埋め込まれて行った。

「ケツの穴にオイルを塗らなくても、前の穴同様に何時でもこんな大きなパイプを飲み込めるようになったのだから、お前達も本当の一人前のアナル娼婦になって来たぜ！」

前の肉穴は何時でも前技無しでも太い性具を呑み込めるように調教して来た剛沢達であったが、後の肉穴も同様の機能を持つよう開発されて来た様子を見て、野太いパイプを根本まで押し込みながら剛沢が嬉しそうに言った。

以前は、激痛を伴い不潔な孔に肉棒を突き立てられるアナルセックスを肉体的にも生理的にも毛嫌いしていた女達であったが、女の尻穴に目の無い村崎親分に訪問毎にアヌスを責め立てられ、巧みな親分のテクニックの前にアナルセックスの快感をすっかりと身体に覚え込まされ、何時しか後門を襲う快感を求めて、自ら客の前に尻を振る娼婦と成り果ててしまっていることを剛沢達は知っていた。

アナルセックスの快感に慣れ、筋肉もそれなりに解されて来た女達にとって、後の孔を使った芸を仕込むには良いタイミングだろうと思った。

低い周波音と共に、肛門を押し分けて侵入してくる、巨大なパイプに女達は悲鳴を上げ、痺れるような振動に下腹を振った。

「なんだかんだ言っても、お前達はこんな事が好きなんだろう？後ろの穴で太いのを加えながら前の口からも嬉しそうに涎を垂らしているぜ・・・」

剛沢が、陰門から滴り出した熱い粘液を指で掬い取りながら、パイプの刺激に身悶える女達を揶揄した。

始めて調教を受け始めた頃は菊門を割られる苦痛に悲鳴を上げていた女達であったが、今は苦痛に身を揉む事も無く、逆に肛門から込み上げる妖しげな感触に快美感を感じているのか、何時の間にか、自ら積極的に腰を振って深く迎え入れようとする女達に熟練した娼婦としての頼もしさを感じた。

剛沢の指摘する通り、変態客達から度重なる肛門性交を強制され続けて、今や女達はその部分も前門と同様な性感帯として感じる体になっていた。

女達は自分の夫や父や愛人の前に羞恥図を晒す苦悩を、剛沢達が強制する暴行の中に没入させ、その後ろの門から発生する怪しげな快美感に恥辱を押し流そうとするかのように自ら積極的に尻を振るのであった。

剛沢達は巧みなテクニックを駆使して、今や完全に第二の快感のツボとして開発された隠微な菊門を責め立て、女達の快感を煽り上げたり、焦らしたりしながら存分に責め上げた。

男達の巧みな責めに女達は、堪えようもなく歓喜に咽び泣き、堪らず腰を振った。

その様子を、檻の中から奈和組長が大きな奇声を発しながら血走った目で凝視していたのだった。

この女達の泣き所を知悉した剛沢達に巧みに執拗にバイブで責められ、終には組長の見詰める前で、堪らず絶頂に達した。

ハアハアと肩で息をして、ぐったりと腰を落とす女達に、

「さあ、これでケツの穴も通りが良くなったろう？これを含んで貰おうか？」と、ゆで卵を差し出した。

まだ薄く開いたまま、その灰暗い内部を僅かに晒す菊花の中心にあてがうと、クイクイと卵の先端をその部分に押し付けた。

剛沢達の陰湿で執拗な行為に根負けしたように、女達は深い溜息を吐くと、自分の後門の筋肉に哀しい指令を送った。

すると、度重なる肛門性交で良く開発された後門の筋肉は、ゆっくりと自発的にその肉の扉を開き始め、まるで丸くすぼめた唇を突き出すように表に向かって、ぽっかりと洞門を開いた。

「ほおー！やるもんだな」と、嗜虐者達は、腰を屈ませて下方から、赤黒い内部構造をあからさまに覗かせ、特有の臭気を漂わせる、外に向かってポツカリと開いた肉で作られた管の中心をマジマジと見詰めた。

「昼と言わず夜と言わず、浣腸液をぶち込まれて限界まで堪えさせられたり、^{フット}太いバイブを突っ込まれたり、ちょっとやさっとじゃ逝かないようなスケベ親父達が昇天するまで其処の筋肉を使って突っ込まれた肉棒を締め付けている内に、鍛えられたんだな・・・」

ポツカリと開いた肉の洞窟の周囲や内側を指先でなぞりながら、剛沢が嬉しそうに呟いた。これなら卵飲みの技を覚えるのも造作は無さそうだなーと、頬を歪めると、準備の完了した、その開け放たれた肉の洞窟に卵を差し入れるのであった。

「ほら、肛門と直腸の筋肉を動かして卵を吸い上げるのよ！」

内部に押し込み半分姿を消した卵から銀子が手を離すと、豊かに肥大したお竜の尻をピシヤと叩いて、普段は排出するだけの機能の筋肉を駆使して、逆に吸い上げるように命じたのだった。

女達はモジモジと必死に腰を振り立て、半分体外に姿を晒している卵を自らの尻の筋肉だけで吸い上げようと必死に努力した。

その汗を流して淫らに腰を振る扇情的な姿を嫌らしい笑みを浮かべながら剛沢達が見守った。

檻の中からは、まるで熱帯に住む怪鳥のような奈和組長の興奮した奇声が激しく聳っていた。暫くの間、汗と陰液に塗れ、卵と格闘していた女達であったが、何かの拍子に吸引するコツを会得したのか、徐々に卵が上昇を始めた。

その様子を目敏く見付けた嗜虐者達が励ますように女達に声を掛けた。

細い腸管に卵の最も太くなった部分が通過する際に、女達は汗に塗れながら喘ぎ声のような苦悶の悲鳴を上げ、それを吸い込もうと必死の努力を繰り返した。

会陰の回りにビッショリと汗を浮かべ、卵を咥えた菊花の周辺の粘膜は引き延ばされ、菊花を彩っていた皺は消失していた。

しかし、その山場を通過すると、卵は体内にスッとその姿を隠し、後には何も無かったように菊の蕾がピッタリと閉ざされ元通りの莖色の皺を作った。

自らの努力の結果ではあるが、直腸内にすっかり収められた大きな卵の発する違和感に女達が、堪らず悲鳴のような声を上げて尻をぶるっと震わせた。

女達の下腹奥深くまで卵が吸い込まれたことを確認した、嗜虐者達は次に吸い上げた卵を自らの力で押し出すように命じた。

「どう、出す方は、ウンチを放り出すのと同じ要領だから別に難しくも何とも無いでしょ？」

銀子に言われて、下腹に力を込めて、排便する時のように息ませた。

腸の奥深くまで吸い込まれていた卵がスルスルと腸内を滑り降り、まるで大きな便塊が直腸を通過する時のような妖しげな感触が女達を襲った。

菊の蕾が内部から盛り上がり、次に、見る見る蕾が開花を始めて、その奥から白い艶々とした表面が面に姿を現し始めた。

卵がすっかりその球状の表面を外部に突き出した時、嗜虐者達は内部からの強い圧力を受け今にも排出されそうな卵を手を受け、そのまま力を込めて内部に押し戻そうとした。

「まだ、出しちゃ駄目よ！もう一度吸い上げるのよ！」

銀子に言われて、女達は眉間に皺を寄せながら、腰を振って再び胎内深くに卵を吸い上げようと努力を始めた。

嗜虐者の見守る前で卵は、見る見る姿を肛門内部に隠し、菊の蕾は何事も無かったように再び閉じ合わされた。

その後も無慈悲な命令を受けて、卵を上げたり下げたり of 往復運動の調教を繰り返させられ

た。

下腹の筋肉を酷使した厳しい調教に女達は全身にうっすらと汗を浮かべ、切なげな声を上げていた。

「ああー！もう出させて下さい！」とうとう堪えられなくなったように暁美が悲痛な声を上げた。

何度も卵を排泄する寸前まで追い込まれ、その最後の瞬間を迎える前に寸止めされ、再び腸管を駆使して吸引する作業は、まるで排便を途中で止めさせられるような、もどかしいやる瀬無い感触を与えるのだった。

「何を言ってやがる、こんなに前をビショビショにして！ほんとには楽しくて仕方が無いのだろう？」と、何時の間にか、前の果肉の狭間から滴り落ち始めた花蜜を指にたっぷりと掬い取ってからかった。

「いやー！お見事、お見事！お前達もとうとうケツの穴の筋肉の使い方を会得したようじゃないか？」と、手を叩いて喜んだ。

「これなら、直ぐに卵呑みの芸も完璧に覚えて、今日中にもっと難しい芸まで進めそうね」と、銀子が満面に笑みを浮かべた。

「どうだ！お前の女達は大したモンじゃないか？」と、嬉しそうに奈和組長の方を振り返った。

ふと、奈和組長の様子を窺った剛沢が、薄い掛け布団越しに組長の体の変化に気が付いた。そのまま開いたままになっていた組長の檻の中に入ると、掛け布団を剥がし、パジャマのズボンをズリ下ろした。

「これは、これは、立派な物を持っているじゃないか！」と、剛沢は組長の股間に屹立する巨大な物を目にして大声を上げた。

「これは、傑作だ！自分の女房や娘や愛人が浣腸されて、ケツ穴を責められている所を見て興奮してやがるぜ！」剛沢が、組長の男根を指で摘み、その先端からネバネバした液を染み出させている様を見ながら大笑いして言った。

そして、暁美の手錠を外すと、檻の中に連れ込んだ。

「おい！親の悩みを解決して上げるのも親孝行でヤツだろう。その口を使って、お前達の悩ましい姿を散々見せ付けられた親父の悩みを解いてやれ！」と、剛沢は暁美に組長の物を口に含むように命令した。

自分の実の父親の肉塊をしゃぶれと言う破廉恥な命令に、暁美は涙を流し、激しく首を振り拒絶したが、剛沢に首根っこを押さえられ、顔を無理矢理、屹立した物に押し付けられた。どんなに拒否してもこの男は最後は、無理矢理やらせるのだろうーと哀しい諦めをした暁美は、口を大きく開いて静かに、自分の父親の物を口に含み始めた。

鉄格子に後ろ向きに固定されたままの晴江とお竜が不自由な体を振って顔を後にまわして、不安げに成り行きを見守っていたが、暁美の唇が実の父親の男性器に触れた瞬間、見ては成らないものを見てしまったかのように、さっと首を正面に戻して、苦しげな表情を浮かべて俯いてしまった。

記憶を失い、知能もまともでは無くなっている奈和組長は、それが自分の娘の口内であることも判らないのか、性器を暖かく包み込む快感に奇声を上げた。

「そうだ、その調子だ！今まで教えたように真心を込めて、シャブリ上げるんだ！」と、剛沢が暁美を励まししながら、暁美の体を抱えると、組長の横たわるベッドの上に暁美の体を押し上げた。そしてその豊かな臀を組長の顔を跨ぐように移動させた。

実の父親に自分の秘部をまともに見せ付ける位置に置かれ、羞恥に悲鳴を上げて、思わず口を離した。

「誰が、しゃぶるのを止めて良いと言った！」と組長の真上に位置するようになった暁美の臀をピシャリと平手で叩いた。

仕方なさそうに、涙を浮かべしゃくり上げ、羞恥に身悶えながら、父親の物を舌先で愛撫し続けた。

「どうだ、娘のここをこんな近くから見るなんて、初めてなんじゃ無いか？」と、剛沢は奈和組長に話しかけるように言った。

「それに、尻の穴の回りにこんな嫌らしい刺青まで彫り込んで・・・」

意地悪く指先で肛門周りの皺を一本一本伸ばすように指先で撫でながら、剛沢が奈和の目に示した。

間近から直視される実の父親の視線を、その隠された部分に感じて、抑えようとしても羞恥で腰がブルブルと震えた。

そして、いまだ腸内に収められたままのゆで卵が、気味の悪い感触を発していた。

「ほうら、もっと良く見えるようにしてやろう。」と、両手の指で、目の上ほんの僅かの高さに位置した、女陰の花びらを摘むと、押し広げ、その中に佇む赤黒い肉孔を露わにした。

その瞬間、余りの羞恥で、口技を止めようとする暁美の尻をピンチャリと叩いた。

記憶も知能も失った組長は、ただ動物的な生殖本能だけに突き動かされているのか、血走った目で食い入るようにそれを見つめていた。

「どうだ？ 実の娘のこの匂いをもっと良く嗅がしてやろうか？」組長の後頭部を掴まえると、その顔を娘の花園に押し当てグリグリと擦り付けた。

実の父親の顔をそこに押し付けられるという羞恥と気味の悪い感触に、暁美は口に咥えたまま悲鳴を上げた。

一方、実の娘の秘所であることも理解できないのか、久しぶりに接した牝の香りに、獣欲を掻き立てられるのか、暁美の口内で男のモノがビクビクと痙攣して、一層肥大化して行くのが分かった。

散々、奈和組長の顔を暁美の秘部に押し当て続けやっとな離れた時には、組長の鼻の周りには、暁美の分泌液にビッシヨリと濡れていた。

「娘が成長して立派な女になったことを見せてやろう・・・」と、言う間隙はズボンを下ろして、奈和組長の横たわるベッドの上に這い上がって来た。

そして、奈和組長に負けないほど猛々しく屹立する肉塊の先端を組長の鼻先をかすめるように暁美の肉孔に押し当てると、そのままズブズブと暁美の体内に体を埋めて行った。

実の父親のほんの目の上数センチの所で、愛娘を犯す快感に剛沢は酔い痴れた。

もし、この奈和組長の症状が周囲を騙すためのものであったら、自分の睾丸は今この瞬間組長に食い千切られてしまうだろうと、微かな恐怖感を覚えながら、激しい獣欲に突き動かされていた。

奈和組長の方も、目の上ほんの数センチの所で繰り広げられる、男と女の愛欲図に動物的本能を刺激されたのか、激しい興奮状態にあった。

いつの間にか銀子と黄原も晴江たちの調教の手を休めて、奈和組長の檻の中に入って来て、父娘と剛沢の肉の絡みを見守っていた。

晴江とお竜も鉄格子に両手を拘束されたまま、為す術も無く、実の父と娘の演じる陰惨な情交を振り返って目に涙を浮かべながら注視したが、余りの陰惨な光景に固く目を閉ざして俯くのであった。

剛沢に命じられて、必死に口内で実の父親の物を愛撫を続ける暁美には、舌先の愛撫に反応して一段と大きく膨らむのが判った。

先端から滲み出るほろ苦い先走りの汁から、放出が間近に迫った事を感じた。

実の父親の陰茎を口で愛撫しながら、父にこのような傷害を与え、破滅に追いやった男から、父親の目の前で犯されるなどと云うことが有るだろうか？心が張り裂けるほどの悲惨さを感じながらも、男達に調教されて来たこの体が、一方では、その羞恥と惨めさから不思議な快美感を伴う陶酔に誘われ始めていることを感じていた。

剛沢が突き立てる陰部からの刺激と、同時に両手を使って揉みしだく乳首からの刺激が、男の臭いを立ち昇らせる口内からの感触と一体となり、目眩のような不思議な快美感を伴う陶酔感に襲われ、股間から夥しく愛液を迸らせていることを感じた。

後から後から吹き出す愛液に塗れながら、女陰を激しく突き立て、これで完全に目高組を征服し滅亡させた一との征服欲に浸りきり、獣欲に身を委ねる剛沢は一層激しく腰を振り立てた。

薄い肉の壁一枚を通して擦れる、腸内に留め置かれたままのゆで卵が不思議な陶酔感を呼び起こした。

激しい腰の動きに、女陰からほとぼしり出た熱い液が組長の顔にかかり、組長の顔を濡らし続けた。

暁美の肉体を串刺しに突き立てる、腰の動きが極限まで達した瞬間、剛沢がウツと呻いて暁美の胎内に精液を思い切り噴出した。

そして、まるでそれにタイミングを合わせるかのように、奈和組長も実の娘の口内に大量の精液を放出した。

見てはならないモノを盗み見るようにチラチラと暁美達の様子を覗っていた、晴江とお竜であったが、この瞬間、自分達を破滅に追いやった憎い男に後から犬のように犯されながら、実の父親の精液を吸い上げた事を知り、自分達の腸内に留まったままの卵の発する違和感も忘れて、首をガックリと折ってシクシクと啜り泣いた。

ハアハアと激しく肩で息をしながら、ぐったりと実の父親の上に身を投げ出す暁美の尻を銀子がピシッと一つ叩くと、

「折角だから、この際、卵を産み落とすところも見せて上げたら」と、実の娘の口内で果てた父と実の父の目の前で憎い敵方の男に犯された娘を隠微な目で見交わしながら満面に喜色を浮かべて意地悪く命じた。

「そうだ！そうだ！さっきまで頻りに出したって言っていたじゃないか？」

剛沢が笑いながら暁美の双臀を撫でた。

実の父親の目前で、恋人をなぶり殺しにし、父を不随にした憎い男に犯されるという被虐感を超越した陶酔感にすっかり神経が麻痺していた暁美は、夢遊病者のように、怖ず怖ずと、少し腰を持ち上げると、奈和組長の顔を大きく跨いだまま秘奥を実の父親に向けた。

嗜虐者の熱っぽい視線の中で、つい先ほどまで剛沢の剛棒に突き立てられ、いまだに剛沢の精の残滓を垂れ流す肉華のわずかに上に位置する菊の花にも似た蕾がモリモリと盛り上がりを見せ始めた。

菊花に似た深く刻まれていた皺がピンと押し広がり、剛沢達の目の前に艶々として粘膜を晒すと、やがて中心部の内側から捲れるようにその内部の秘めた濃いピンク色をした粘膜を外部に晒して開花し始め、その秘奥から少しずつ白い表面が現れ始めた。

恥ずかしい筒状の肉を内部から押し広げ、次第に大きくなるその姿を見詰めながら、「ほら！頑張ってもう少しよ！」と、銀子が汗の滲む尻を叩いた。

スポン！と大きな音を立てて、ぽっかり開いた肉洞からゆで卵が飛び出した。

産み落とされた卵は、組長の額で跳ねて、コロコロと枕元に転がった。

実の父親の目の前で、後門からゆで卵を産卵するという破廉恥な姿に、不可思議な陶酔感から現実に戻され、羞恥に泣き叫ぶ暁美の声と、哀れな父娘を取り囲む嗜虐者の嘲笑が狭い牢獄の壁に反響して響いていた。

「そら、折角ケツ穴を使っただけの卵飲みの芸を会得したんだ。もっと父親の目の前で披露してやったらどうだ。」

剛沢が卑猥な笑みを目に浮かべると、銀子にゆで卵を入れた籠を持って来させた。

「大好きなお父様の目の前で、これまで磨いた技を披露出来るんだから嬉しくて仕方無いんじゃない？」

と、銀子が面白くて堪らないと言うように満面に笑みを浮かべて、籠の中から卵を取り上げて剛沢に手渡した。

「そら、卵は幾らでも在るんだ。好きなだけ父親の目の前で練習して良いんだぜ・・・」と、言うとき銀子から渡された卵を尻の穴に押し付けた。

「ほら、さっきみたいに、自分でお尻の穴を開くのよ！」暁美の横に陣取った銀子が、励ますように声を掛けた。

顔を真っ赤にして、羞恥を堪えようとするかのように下唇を噛んで、暁美が顔をブルブルと振った。

やがて、この周囲を取り囲むサディスティックな男女に逆らっても無駄で在ると諦めたように、唇を固く噛みしめながら辛そうに眉根を寄せ、下腹に一層の力を込めた。

「アハ！ 開いて来た！開いて来たわ！ まるでウンチを出す時みたい！マア！恥ずかしい！」

実の父親の目の上僅かの所で、恥ずかしい技術を晒す、暁美の姿に銀子がヒステリックな笑い声を上げた。

「そうだ、自分の力で開けるだけ開いて見ろ！」 剛沢が大きな声で笑い立てた。

今まで皺を刻んでしめやかに閉じていた、後の孔が今は、まるで蕾が開く様に大きく開花して、口を拡げその赤黒い内部を覗かしていた。

「どうだ！いくら実の父親と言えど、娘の肛門の中なんて覗いた経験はないだろう？」 剛沢が腹を抱えて笑った。

アアッ！イヤ！実の父に向かい尻を向けて、肛門の内部を露出するという倒錯的な行為に思わず開いていた孔を閉じてしまった。

「馬鹿野郎！誰が閉じて良いと言った！俺たちの許可があるまで開きっぱなしにしておくんだ！」

剛沢が暁美の臀肉を鷲掴みにして、左右に押し広げるようにして喚いた。

剛沢の暴力の前に諦めたように、再び尻の孔が怖ず怖ずと開き始めた。

その時、剛沢の目に、一旦放出して硬度を失っていた奈和組長の男のモノが、暁美の腸内から発する濃厚な匂いに刺激を受けたのか、再び固さを取り戻し、ムクムクと隆起し始める様子が目に入った。

「へへ・・・お前の親父は、年取っても元気だぜ！一回イッた位じゃ満足しないようだな・・・ほら、もう一度喰えるんだ！」と、暁美の首筋を掴むと、大きく隆起した親分の物に顔を押し付けた。

抵抗しても無駄であることを知り、再び実の父親のモノを口に含み始めるのであった。

父親の獣じみた男の臭いが口内に拡がった。

剛沢は奈和親分の後頭部を支え、開き切った肛門の内部が良く目に入るように、頭を持ち上げた。

片手には黄原から渡されたペンライトが握られ、直腸内部の粘膜の様子を、照らし上げていた。

脳を酷く傷付けられ自分の娘との分別も無くし、若い女の肛門内部をマザマザと見せ付けら

れたことに性本能が刺激されるのか、訳の分からない奇声を上げて、締め切り無く開いた口の端からは涎を垂れ流していた。

「へへ・・・お前も何だかんだ言って、お前の親父も結構変態的な行為が好きなんじゃないか？」

奈和親分の様子に剛沢が満足そうに話掛けた。

「実の娘とは言え、ここの匂いは臭いだろう？もっと良く嗅がしてやろうか？」

と、親分の後頭部を掴んだまま、開き切った肛門に親分の鼻先を差し込むように押し付けた。

暁美が激しい悲鳴を上げて、思わず、咥えていた口を離した。

「誰がしゃぶるのを止めて良いと言ったの？」

銀子がトゲのある声を上げて、暁美の髪を握ると、隆起した組長のモノに押し付けた。

性器から発する性臭とは別の強い陰臭に性的本能が刺激されたのか、口内で愛撫する縄組長のものがピクッと痙攣し一層逞しくなるのを感じた。

「それじゃ、早速卵を吞んで貰おうか・・・」

組長の後頭部を押さえていた手を離して、ポツカリと開いたままの肛門にゆで卵をグイッと押し入れた。

剛沢が手を離した後には、まるでバンカーに捕まったゴルフボールのように、半分を腸内に収めたまま、残り半分以上を体外に露出するゆで卵が残った。

「そら！自分の力で最後まで吸い込むんだ！」

剛沢が暁美の尻をピシッと叩いた。

実の父のモノを口内でシャブリ上げながら、命じられるままに肛門の筋肉に神経を集中した。体外に露出した白い半球がピクピクと動き、卵をピッタリと咥え込んだ肛門の筋肉がヒクヒクと収縮を始めた。

「アハハ！本当に吸い込み始めたわ！マア、イヤらしい！」

汗に塗れて卵と格闘する様子を眺めながら、銀子が大げさな声を上げた。

残忍な敵方の男女の哄笑を浴びながら、実の父のモノを口唇で愛撫しながら、尻を狂ったように振り立て、少しずつ卵が体内に吸収されて始めた。

海底に棲む軟体動物の口腔のように、周囲の肉壁が盛り上がり、卵を包み込むように徐々に体腔に押し込み、いまや直径2センチ程に丸く開いた、ピンク色をした肛門の肉壁の奥に白く球面が僅かに見えるだけとなった。

「ほら、もう少しよ！自分だけの力で完全に吸い込むのよ！」その扇情的な姿に興奮したよ

うに銀子が、苦悶する曉美の尻を平手で叩いた。

「オオッ！完全に中まで吸い上げてしまったぜ！ピッタリ閉じて見えなくなったぜ！・・・どうでえ・・・実の親としても自分の娘は大したモンだと世間に自慢したくなるだろう？」

剛沢が親子の記憶も人間としての知能も喪失した奈和にからかうように声を掛けた。

その頃女達を閉じ込めた檻の在る一郭を、常時交代で監視する役目を負っていた若いチンピラ達が、檻の中で繰り広げられている騒ぎに興味を持ってゾロゾロと中に入って来ていた。4人のチンピラ達は、奈和親分の檻の鉄格子に顔を押し付けいやらしい目付きで内部で行われている羞恥図を見守っていた。

その様子に気付いた銀子が、

「あなた達も唯見ているだけではつまらないでしょう？良いわ！表の女の調教を手伝わせて上げるわ。」

若者達は喊声を上げて、両手を頭上に手錠で鉄格子に固定されたままの二人の女に武者ぶりについていった。

最初、目高組の女達がこの屋敷に囚われて来た当時は、自分達も調教のおこぼれに預かり、この妖艶な女体を存分に楽しんだものであるが、調教も一旦終了し、客を取る様になってからは、自腹を切って女達を買うしか方法がなかったのだった。

それが久しぶりに調教のおこぼれに預かれると知って有頂天になる若者達であった。

「お前達大腸の中に卵を入れているのか？」

男がお竜の下腹をいやらしい手付きでそろりと撫でたので、お竜がビクッと身を揉んで小さく悲鳴を上げた。

一人のチンピラが身を屈めて、真下から晴江の尻穴を眺め、両手の指を掛けて無理矢理その狭間をこじ開けようとした。

男の乱暴な行為に晴江が悲鳴を上げた。

「よっぽど奥まで入っているようだな？見えないぞ！」

男がペンライトを手に、仲間が両手でこじ開けた菊門から中を覗き込みながら呟いた。

「在った、在ったぞ！」

中指を根本までお竜の直腸内に突き立てていた、若者が指先に卵のツルツルとした感触を感じて喊声を上げた。

「本当だ！入っている！」

中指を差し入れ、晴江の腸内をまさぐっていた男が、腸内奥深くに卵が在ることを確認して声を上げた。

「ほら、腹の中に入れた卵を産んでみな！」

女達の臀をピシヤピシヤ叩きながら男達があざ笑うように言った。

突然の男達の侵入に怯えて緊張状態にあった女達は、臓物の中から卵の違和感を発する違和感を感じつつも、硬化した下腹は排出の動きが出来ずにいた。

「お前達、卵を呑み込んでから、暫く時間が経ってしまったから体が硬くなってしまったんじゃないか？」

下腹をクネクネと身悶えさせるだけで、一向に卵を吐き出そうとしない女達に苛立つ様に声をあげた。

突然、男達が背後からお竜達の胸を掴むと柔らかく揉み始めた。

後の穴も性感帯として開発された女達が、直腸内部から妖しい刺激を受け続けながらも、両手を固定されているため自らの体を愛撫することも出来ず、腸内から込み上げる違和感に、もどかしい思いを続けていた所に、男達から胸を揉まれて何かホットしたような感じを受けるのであった。

男達に揉み上げられる乳房の頂点に在る乳首が見る見る固く屹立して行った。

「お前達は本当にスキな女達だぜ！俺たちにオッパイ揉まれて嬉しそうにフンフン鼻を鳴らしやがってよ！ほらほら前の穴もジットリと湿って来やがったぜ！」

真下からソコの様子を注視する若者が嬉しそうに声を上げた。

「ほら、もう良いだろう？出してみな！」

女達の情感が十分に盛り上がり、体もほんのりと火照って来たのを見て、男達が女の周りに腰を降ろして、その部分を見上げた。

ああ・・・いや・・・と、晴江もお竜もさも恥ずかし気に顔をなよなよと振ると、ハァ・・・と一つ甘い溜息を吐いて尻を柔らかく振った。

「おお！ケツの穴が膨らんで来たぞ！」

男達の指摘するように、晴江もお竜も内部から押し出されて来る卵の圧力を受けて、肛門の回りの柔らかな粘膜が大きく盛り上がり来る様子が在り在りと映った。

晴江とお竜の肛門の周囲に施された鮮やかな姿勢が、卑猥に姿を歪めた。

「おお！開いて来た！開いて来たぞ！」

「ほらほら！白い先っぽが見えて来たぜ！」

「いやいや！何だか少し黄色くないか？」

女達の悲痛な努力を目を皿の様にして見詰めながら男達が卑猥な声を掛け合いながら笑いさざめいた。

まるで火山の様に盛り上がった菊花の頂点で蕾がゆっくりと綻び始め、その中心からゆで卵の白い表面が姿を現し始めていた。

菊の花の皺をいっぱい伸ばして、周囲を押し広げ、卵は益々その姿を見せ始め、環状の筋肉の膜の中心に白い球体を晒し始めた。

卵の最も直径が太くなる部分で一端排出が止まったが、ウンウンと呻く様に尻を振るとスポッと大きな音を立ってて卵を体外に吐き出した。

勢い良く放出された卵がコンクリートの床に打ち付けられ、ひしゃげて二つに割れ、中の黄身を見せていた。

壊れたゆで卵であったが、充分その大きさを知ることが出来た。

「お前達、こんなに大きな卵を飲み込んでいたのか？」

男達は女達の体内に宿されていた大玉の卵を見て驚くような声を上げた。

床に落ちて砕けたゆで卵を指先で、ツンツンと触りながら、

「何だかこの卵、表面が黄色くないか？それにちょっと臭うぞ！」

と、卵に鼻を寄せて笑いながら言った。

「まあ、良いや！・・・卵はまだいっぱいあるし、どんどん飲み込んで貰おうか？」

銀子が持ち込んだゆで卵を大量に載せた箆を手にも男達が嬉しそうに笑った。

一方奈和親分の檻の中では、剛沢達が見守る前で暁美が苦しい調教を続けさせられていた。普段腸内の汚物を押し出すだけの機能しかない筋肉を逆回転させて、卵を吸い上げるという作業に苦闘した暁美は、思わず父親のモノから口を外し、額に汗をビッショリと浮かべ、眉根を蹙めてハアハアと荒い息を吐いていた。

「ほら、ちょっと目を離すと直ぐにサボる！ちゃんと舐めなきゃ駄目でしょう！」と、銀子が左手で暁美の髪を掴むとグイグイと扱き上げ、再び、父親のモノに押し当てた。

「ここから出すモノはバッチィ物だからね・・・」銀子は悪戯っぽく笑うと、右手に手術用の薄いゴム手袋を詰め、指先で菊花の中心を撫でた。

指の腹で完全に卵を埋没させた肛門の上をグイグイと押して内部に収められた卵の様子を表から観察した後、そっと中指を菊の蕾を割って内部に挿入させた。

突然の指の進入を受けて暁美の体がビクッと震えた。

「お見事！お見事！結構奥まで入っているわね。・・・これなら訓練すれば後2つや3つは入りそうね・・・」挿入した指先で腸内の卵の位置を探りながら銀子が満足そうな声を上げた。

「先ず、入れた物を出してご覧なさい。入れたり出したりの練習よ！」

自分の父親のモノを口にほおぼり舌先で愛撫しながら、銀子に命じられたように下腹に力を込めて、卵を排出する作業に掛かった。

体内に排出するのは、普段の筋肉の使用と同じであるので、吸い上げるよりは楽であった。

ただ普段の便塊と比較して卵の大きさが腸壁を刺激した。

冷酷な男女が見詰める前で、肛門が徐々に開き始め、ピンク色に襞を押し分けるように卵のスベスベと輝く白い表面が姿を現し始めた。

見る見る肛門の周囲の筋肉を押し広げ、卵が体外に大きく姿を現した。

肛門を押し分けて飛び出て来た卵を、銀子が薄いゴム手袋を填めた手で受け取った。

「マァー！暖かいわ！」充血して体温の上昇した腸内で暖められた、まだ暁美の直腸の温もりを残すゆで卵を手にして、頓狂な声を上げた。

「ねえ、ねえ、ゆで卵じゃなくて、普通の卵を突っ込んでおいたら中で孵化するかしら？」

「そんな物を尻穴に入れといたら、雛が孵化する前に暁美のオナラでガス中毒で死んでしまうぜ！」

剛沢が愉快そうに笑いながら冗談で応えた。

「ホントね！少し臭うわ！」

銀子が手にした卵を自分の鼻に近付ける仕草をした。

「親分も自分の娘が、お尻から産んだ卵がどんな臭いがするか嗅いでみたいでしょ？」と、言うのと、手にした卵を奈和親分の鼻に押し付けた。

「ついでだから、娘の調味料の塗されたゆで卵料理を食べてみる？」

奈和組長の口をこじ開けて、卵を口内に入れようとした。

「イヤッ！止めて下さい！」

銀子の狂気の行為に、思わず口に咥えていたモノを外し、暁美が泣き叫ぶような声を上げた。

「ほら、また、おしゃぶりを休む！・・・親分は、こんなに押っ立てて、発射しがっているんだから、誠意を込めてイカせて上げなさい！」

再び、逞しく隆起する組長のモノに押し付けながら言った。

「判ったわ、親分に貴方の卵を食べさすのは止めるから、サボらず一所懸命練習するのよ。」

銀子の言葉に、全身不随の父親への陰湿な意地悪を防ぐことが出来た安心感で、口に咥えたまま、肯くように首を振った。

「それじゃ、練習、練習・・・新しい卵が入るわよ！」銀子は籠の中からわざと大ぶりの卵を探すと、暁美の後門に押し付けた。

剛沢達の檻の外でも若者達が、二人の女に卵産み調教を続けていた。

「ほら、又入るぜ！」

若者が新たな卵を手にするとお竜の菊の蕾に押し付けた。

そんな若者の邪険な態度にお竜はウウンと甘い声を上げて、すねたように色っぽく尻を振って男の劣情を掻き揚げるのであった。

その頃には監視カメラの映像から牢の中で行われている調教の様子に気付いた大亜門戸会の男達が檻の周囲に押し掛け、卑猥な笑みを浮かべながら見物をしていた。

大勢の見物人の見守る前で、男の手にした卵が、まるで魔法のように女達の体内に姿を消して行く様子を、驚いた様子で男達が見守った。

既に何度も卵を体内に吸い上げ、吐き出しを繰り返し、お竜も晴江も全身にびっしょりと汗を浮かべていた。

「大分旨くなったじゃないか？今度はもう一つ呑み込んで見たらどうだ？」

男が籠からもう一個卵を手にするお竜のソコに押し当てた。

「ああ・・・無理よ・・・」

「何が無理なモノか！最初の卵は随分奥まで入って、まだ入り口には充分余裕が在るじゃないか？」

若者に卵を押し付けられ、諦めたように二つ目の卵を吸引しようと腰を振った。

新たな卵を吸い上げようとして、腸管を蠕動させると、先に腸内に留まった卵が意地悪い刺激を与えて、思わず、お竜辛そうに眉間に皺を寄せた。

晴江も二つ目の卵を含まれる所であった。

一方暁美の方も、その後も、奈和組長の目の上僅かの所で、卵の出し入れの訓練が続けられた。

卵が出入りする度に、肛門の筋肉が、隠微な菊の花にも似た周囲の皺を押し広げ、また包み込む様子を、正常な人間の神経を失った奈和組長は、何かの本能に突き動かされるように、

じっとその猥褻な動きを見詰め、口から涎を垂らしながら、意味不明の呻き声を上げていた。そして、その視覚からの刺激や実の娘から湧き出る牝の匂いと直腸内部の臭いが入り交じった嗅覚への刺激が、大半が破壊された脳内に奇跡的に無傷で残った、性欲を司る中枢を刺激するのか、暁美が口にする男性のシンボルを一段と遅くするのであった。

既に何度か狭い陰門を卵が出入りして、苦しい調教に暁美の全身は汗を浮かべ、腰をブルブルと震わせ、男のモノを口に咥えたまま、鼻から荒い息をしていた。

腸内に送り込まれた卵が、性感を刺激するのか、暁美の前門もグッショリと濡れ、膣孔から溢れ出た陰液が、下に横たわる奈和組長の顔を濡らしていた。

まるで軟質のゴムで出来た輪のように柔軟になった菊花を満足そうに見ながら、

「まだ充分余裕が有りそうね？それじゃ、今度は二個よ！」と、銀子が二つの卵を手にした。一個目の卵を呑み込み終えた後に、新たに挿入される卵に、肛門と直腸の筋肉を総動員して吸い込み上げようとするが、既に腸内に収まった卵が意地悪い刺激を与えた。

その苦痛とも快美感とも付かない妖しい刺激に、アアーッと思わず、叫び声を上げて体を仰け反らした。

「2個位どうしたと言うの？これから貴方は、ここに2個だって3個だって詰められるだけ詰められるよう練習するのよ！」

暁美の必死の吸引作業を手伝うように銀子が表から卵を押した。

「ほら！入ったわよ！やれば出来るじゃない！」

2個の卵を収めて何事も無かったようにピッタリと口を閉ざした陰門を見て、銀子がはしゃいだ声を上げた。

「それじゃ、もう1個行くわよ！」銀子が新たな卵を手にとると、陰門の中心に押し付けようとするのを「アアー、もう止めて下さい！」と暁美が溜まりかねたように叫ぶのであった。

「貴方は後の口で卵を吸い上げて、上の口で男のモノを吸い上げていれば良いのよ！」と、思わず離してしまった口を奈和組長の隆起した物に押し付けるのであった。

暁美は必死に腰を蠢かして、3個目の卵を吸い込もうと藻掻き続けていた。

既に腸内に収まった2個の卵が擦れ合い、腸壁から隠微な刺激が襲い意識が薄れて行くような感覚を味わっていた。

嗜虐者の見守る前で、前の穴からネットリとした粘液を垂らしながら、後の穴に白い卵を半分露出させて苦闘する暁美の姿が映った。

そして、徐々にではあるが、露出していた卵がその姿を小さくして行く様子が見守る男女に

目に映った。

完全に腸と肛門の筋肉を制御する技を身に付け、卵を自力で吸い上げることが出来る力を身に付けた暁美の姿を見て、大したモンだと感嘆の声を上げた。

3個目の卵を完全に体内に収め上げた暁美の体内では、最初の卵が後の卵に押されて直腸の屈曲部を超えて大腸内に送り込まれて、下腹が内側から押し広げられる様な異物感に苛まれていた。

「お見事！お見事！人間やれば出来る物ね！」

銀子が手を叩いて褒めた。

そして、まともな意識を失っている奈和組長に向かって、

「ねえ、貴方の愛娘は大した物ね！この芸だけでも充分食って行けるわよ！」と、奈和の額をピタピタと叩きながら笑い声を上げるのであった。

「前の穴で卵を吸い上げる芸は、もう簡単に出来る筈よね？」更に新たな卵を手にした銀子は暁美の膣孔に卵の先をあてがった。

これまで調教を積み、客の前でも実演している、普段なら簡単に出来る芸であるが、薄い粘膜の隔壁を挟んで、腸内に充填されている卵が、意地悪く吸引作業を妨害した。

「ほら！何をやっているの？早く吸い込むのよ！」

銀子が膣孔から半分卵を露出させたまま苦悶する暁美の尻を意地悪く平手で叩いた。

直腸内の卵の妨害に遭いながら、何とか膣壁の筋肉を蠢かせて、卵を膣内に収めた。前後に収められた卵の刺激で暁美の心は今にも飛びそうになっていた。

「ほら、もう1個よ！」後にも前にも卵を呑み込んだ暁美の姿に満足した、銀子は更に1個卵を手にとると、暁美の前門に押し当てた。

暁美が抗議するように呻き声を上げて、腰を振り立てた。

そんな暁美の態度を気にする様子も無く、「ほら、何をしているの？早く吸い込むのよ！」と、冷たく命じるのだった。

最後の力を振り絞るように膣孔の筋肉を励まし、銀子に外部から押されながら、最後の卵を体内に全て収めた。

いまや、暁美は体内に収めた5個の卵の発する妖しげな充満感に責められていた。

一方、銀子はそんな暁美の精魂尽き果たした様子を気にする様子も無く、調教師として極めて事務的に、前の穴も後の穴もピッタリと閉ざされ、体内に卵を含んでいる痕跡をすっかり

と隠してしまった陰部の状況を目で追い、指で触りながらじっくりと検分していた。

「大体良いよね・・・それじゃ、今度は腹の中に納めた物を出して頂戴。先ず最初に後の穴から、それが済んだら次に前の穴からというように交互に卵を産むのよ！」

まるで号令を掛ける様に、柔らかく肥大した暁美の尻を平手でピシッと叩いた。

下腹を内部から刺激する5個の卵の発する膨満感に、まるで産気づいた妊婦のように、体内から押し上げる陣痛にも似た疼痛に耐えかねていた暁美は、銀子の合図を待ち詫びていたかの様に肛門の筋肉の緊張を解いて、腸壁に力を込めた。

下から見上げる奈和組長の目の前で、深い皺を寄せていた可憐な菊花を思わせる蕾が内部からの圧力でモリモリとドーム状に隆起して来た。

そして火山の様に隆起した、火口部分が少しずつ開き始め、その奥に艶々した白い表面が見え始めた。

その白い球面は、見る見るその面積を拡大し、肛門周囲の筋肉を内側から押し開き、ピンク色した直腸の粘膜を捲り上げるように、その丸い表面が体外に姿を現した。

その様は開き切った肛門の中心に突然白目が出現したように見えた。

卵の最大直径の部分で少しつかえるように一時動きを止めたが、暁美が腰に力を込めると、ポンと音を立てて体外に飛び出した。

その最初の尻穴からの産卵に引き続くように、肥大した柔らかな二枚貝のような襞を内側から押し開き、幾重にも畳まれた鮮やかな色をした襞の内部から白い表面が少しずつ姿を現し始めた。

その繊細な襞が形作る中心に在る膣孔を、大きく押し広げ、白い球面が次第に大きく姿を見せ始めていた。

奇声を発しながら真下から憑かれた様に見詰める奈和組長の目が、先ほどの後門の産卵から前門の産卵作業に視線が移り、瞬きもせず、実の娘の出産風景を眺め続けた。

レーザーによる永久脱毛により、一切の飾り毛を奪い取られ、無駄毛一本無い、覆い隠す物も無い会陰部の前後の秘孔を剥き出しにして、汗と自らの分泌した体液に艶々と輝る秘肉を押し広げ産卵する若い女の姿を本能が命じるままに一心不乱に臉に焼き付けているようであった。

アアッ・・・と言う声が漏れたように聞こえた。暁美の産道を潜った卵が濃密な粘液を引きずるように、膣孔を離れ真下に落下した。

「ほら、次はもう一度後からよ！」銀子が目をギラギラさせ隠微に笑いながら暁美の尻を叩

いた。

度重なる尻穴の調教で柔らかく充血した筋肉を押し広げ、2個目の卵が体外に姿を現し始めた・・・

今や、ベッドに横たわる奈和組長の顔の周りには、暁美の体液に妖しく滑輝る3個の卵が転がっていた。

「最後は前と後から2個同時に産んでみなさい。」

銀子の命令を受けて、直腸と膣の筋肉を同時に引き絞った。

組長の眼前に大きく広げられた、蟻の戸渡りと呼ばれる二つの秘孔をつなぐ陰部が在り在りと広がり、粘膜質のテカテカと輝るすべやかな表面を示すと、その上下に位置する二つの穴が内部からの圧力で広がり始め、開花した内部から白いものを見せ始めた。

二つの穴を押し広げ、二つの目玉のようにゆで卵がその半円形の姿を見せていたが、二つの穴を結ぶ八の字筋がその大きさに耐えかねたように、排出作業が途中で止まってしまった。

「どうしたの？後少しよ！下腹に力を入れて、前と後から同時に双子を産んでしまいなさい！」

苦闘する暁美の姿に可笑しそうに銀子が声を掛けた。

汗塗れになって苦悶していた暁美が、最後の息みを加えると2個の卵は勢い良く体外に放出された。

その瞬間堪えに堪えていた奈和親分の砲口から夥しい粘液が暁美の口内に放出された。

生臭い男の臭いが、意識を喪失しようとしていた暁美の口内に広がった。

5個の卵の出産に精魂使い果たしたように暁美が荒い息を吐きながら、ベッドに横たわる奈和親分の上に俯せに倒れていた。

親分の目の前の愛娘の2つの穴はまだ閉じることなく、赤黒い内部を覗かせ、粘液を垂らしながら、ピクピクと収縮を繰り返していた。

「いやー！お見事、お見事、良くやったぜ！」

剛沢と黄原が満足そうに手を叩いた。

檻の外でも、休む間も与えられず、数知れず卵を呑み込んだり吐き出したりの調教を受けた二人の女がグッタリとして床に倒れ伏していた。

既に鉄格子に繋がれた手錠は外され、和式の便所に跨るような姿勢で卵の呑みの調教を受けていた女達ではあったが、疲れ果てて最早そのような姿勢も維持出来ず、冷たいコンクリー

ト床の上に俯せに倒れていたのであった。

疲弊した女達は自分の恥ずかしい所を隠す気力も失い、荒い息を付きながら股を開いたまま俯せに横たわっていた。

だらしなく開いたままの股間からは、前の穴からも後の穴からもネットリとした樹液のような液体が滴り落ちていた。

「へへ、・・どうでい、この調教が随分お気に召した様じゃないか？」

「前からも後からも口からもいやらしい涎を垂らしやがってよ！」

「俺たちも変な気分になって来たぜ！ちょっと相手して呉れや・・」

さっきから晴江を責め続けていた男がズボンを降ろした。

先程から絶え間なく女体を責め続けていた快感で、男のモノは大きく膨らみ天を突くように立ち上がっていた。

男は力無く横たわる晴江の手を掴むと、無理矢理起き上がらせて、立位のまま晴江の股間に自分のモノを押し入れた。そして、晴江の両太股を二の腕で掻き揚げ晴江の大きく開いた股間を自分の腰の上に載せたので、男の大きなモノが晴江の体重をまともに受けて膣内に深く食い入った。

晴江がウッとうなった。

周囲の男達が対面立位で結合する晴江が男の腹から落ちないように背中を支えた。

別の男もこれを真似てお竜を自分の腰の上に載せて、下から突き上げていた。

「どうだ？後の穴も良いだろうが、こうして前からやられるのも良い気持ちだろう？」

男が腰を振りながら快感に鼻を鳴らす晴江の顔を見詰めて言った。

お竜も男から激しく腰を突き立てられ、甘い悲鳴のような声を上げていた。

「どうだ？そのままケツの穴の卵飲みの調教を続ける・・てのは、どうだ？」

一人の男が策から卵を一つ手に取ると、開き切った晴江の股間に押し付けた。

それは良い考えだ！と見物の男達も囃し立てた。

男の太いモノが深々と突き立てられたそのわずか後の菊の蕾は男のモノが出入りする度にピクピクと収縮を繰り返していた。

その中心を狙って卵の尖った球面が押し付けられた。

男に前を犯されながら、晴江は後の筋肉を蠢かせて、押し当てられた卵を吸引しようと努めた。

「おお！卵が吸い上げられていくぞ！」

見物の男達が前の華肉を割られながら、後の穴から卵を徐々に吸い込んで行く晴江の様子を見て喊声を上げた。

隣では、それを真似て、お竜にも卵を押し当てていた。

「オオッ！良いぞ！卵が腹の中を昇っていく様子が伝わって来るぞ！」

晴江を前から責めている男が、男根の微妙な神経に、薄い隔壁一枚を通して卵が上昇して行く様子を感じて歓声を上げた。

そして、その余りの気持ちの良さに、晴江の体内に熱い男の樹液を放出した。

男の放出に煽られ一機に情感の昇り詰めた晴江も体を激しく収縮させて悲鳴の様な叫び声を上げて絶頂に達した。

隣では、お竜を責める男が感激して大きな叫び声を上げている所であった。

男達の喊声と笑い声を聞いてそちらを振り返った銀子が、「あなた達もなかなかやるじゃない？」と、ニッコリと微笑んで、男達に声を掛けた。

「ご苦労だったわね、だけど、あなた卵呑みの芸で内側から卵に責められ続けて、さつきからイキたくて仕方なかったんじゃない？でも、並の女じゃ経験した事も無いような性交渉を重ねて来た体には、卵の刺激だけでは、イキたくてもイキなかったんじゃない？」

過酷な調教を終えて精魂尽きたように倒れ込む暁美の目を覗き込む様に尋ねた。

銀子の指摘するように、卵呑みの芸で腸内は、卵の膨満感で責め続けられていたが、卵の発する刺激だけでは、快感を昂進する事は在っても、異常な性交渉を積み重ねて来た暁美の女体をイカせるだけの鋭い快感を生み出すことは無かった。

その中途半端な性感の持続に責め悩まされているところであったのである。

「まだ調教の途中だけど、今日は特別に、ご褒美でイカせてあげるわ・・・お尻を上げなさい。」
奈和親分の上に四つん這いの姿勢で腰を上げさせると、銀子は直径4センチ以上ありそうな野太い長いバイブを手にした。

そのバイブをいまだに閉じることを忘れたように開いたままのアナルにズブズブと挿入した。

空腹に苦しんでいた獣が餌を呑み込んだ時のように、性的刺激に飢えていた暁美のアナルは嬉しそうに腰を振りながらそれを迎え入れた。

10センチ程尻穴に埋没したのを確認して、銀子がバイブのスイッチを入れた。

その尾てい骨から脳天を突き上げるような快美感を伴った電流にも似た刺激に、ウッと声を

上げて体を仰け反らした。

暁美の反応に満足したように、銀子はバイブをゆっくりと前後に動かし始めた。

奈和組長の顔を跨いで大きく広げた股間の上部から太い棍棒のようなバイブが突き出ていた。

長い間の暁美に対する調教で暁美の泣き所を知悉した銀子が、的確に暁美のスイートスポットを一つずつ占拠して行くように暁美の興奮を押し上げて行った。

銀子の押して出る太いバイブをまともに受けて、押し止めようも無い快美感に巻き上げられる暁美は腰をブルブル震わせ、開き切った前門からは、熱く滾る様な滴を止めどなく溢れさせ、真下に位置する奈和組長の顔を濃厚な香り立つ粘液でべとべとに塗していくのであった。そして、その若い女の愛液に咽せ、目の前僅か上で繰り広げられる淫蕩な作業に本能を呼び起こされたのか、再び奈和組長のモノは猛々しく天を突き、その太く広がった亀頭部の先端からは、透明の粘液が溢れて、太い竿を伝って下に流れ落ちていた。

「どう？良いでしょう？良いって言いなさい！」銀子がバイブを細かく前後左右に操作しながら、身悶える暁美に声を掛けた。

「ああー！良いわ！」鼻を鳴らしながら上擦った声で暁美が応えた。

「あなた達が現在置かれている境遇をお父様に話して上げたら・・・」

銀子が意地悪く微笑みながら気もそぞろになっている暁美に話掛けた。

「ああー！暁美は大亜門土会様に飼育されている、哀れな牝奴隷です・・・」

奔流の様な快感に押し流され、最早正常の思考が出来ないまま、泣き叫ぶように応えた。

「それから？」

意地悪くバイブの先端で小突く様に責めながら、隠微な微笑を浮かべた銀子が聞いた。

「ああー！尻の穴で快感を感じて逝ってしまう、変態の牝犬です！」

如何にかつての正常な意識を失っているとは言え、実の父親の前で恥ずかしい言葉を強制されて、涙を流しながら叫んだ。

「そう？良く言ったわね。それじゃ尻穴で逝ってしまいなさい！」

これまでの暁美に対する調教経験から、後一責めで絶頂に達することを察知していた銀子が、最後の障壁を打ち破るべく、強くバイブを突いて出た。

その瞬間、卵を使った調教では叶えられなかった絶頂への希求を一機に解放するかのよう、獣じみた絶叫を上げて、暁美が体を仰け反らせて硬直した。

その暁美の凄まじい絶頂の姿に、誘発されたように、天を向いて突き上げていた肉塊の先端

から大量の粘液が突如噴出し、暁美の顔を汚した。

父親の目前で尻穴を責められ絶頂に達し、実の父から顔射されて顔を精液でベタベタにした暁美の姿に、周囲を取り囲む冷酷な男女の狂った様な笑い声が、狭い牢内に何時までも飢し
ていた・・・

そんな行為を剛沢から強制されてからというもの、暁美は奈和組長の専用の性欲処理道具と
されていた。

最初は、実の父親と繋がる事に激しい拒絶を示していた暁美であったが、次第に拒否の態度
を示すことが少なくなり、何時の間にか強制されなくても父親の肉塊を口に咥え、鍛えられ
た暁美の技巧の前に本能を刺激されて勃起を始めた父親の上に跨るようになっていた。

そして、変態客から傷付けられた心と体の癒しを実の父親に求めるかのように、今では、逆
に暁美の方から積極的に父親と背徳の交わりをするようになっていた。

そんな、父娘の浅ましい行為を晴江もお竜も檻の中からじっと見続けるだけであった。

奈和組長との行為を剛沢は暁美にしか許さなかったのも、かつて肉体を通わせあった二人の
女は、父と娘の背徳の行為に羨望と嫉妬のような物を感じながら見守るしかなかった。

耳を塞ぎ、目を閉じても娘の喘ぎ声と、父の獣じみた咆吼が耳に突き刺さり、その姿が残像
として脳裏に残った。

実の父と娘の浅ましい喘ぎ声に、何時しか熱に浮かされたように晴江もお竜も必死に耳を押
さえていた手を無意識の内に自分の撓わな胸に持って行って、自らの乳房を揉みしだきツン
と屹立した乳首を刺激し始めていた。

そして、父娘の嬌声と激しい息遣いに同調するように切なげに荒い息を吐き、その手を自ら
の股間に持って行くと、今は夥しく熱い樹液を滴らせる肉の虚ろの中に指を差し入れ、かつ
ての自分の体を愛した親分の肉体のなごりを思い出すかのように指を這わせるのであった。
野獣のような変態客に昼夜を別たず陵辱され、肉体も心も傷付き疲れ果てている筈なのに、
実の父娘の交合の呻き声に煽られて、まるで熱病にうかされたように、その熱く熟れた内部
を激しく掻き回すのであった。

今や奈和親分を閉じ込めた檻と晴江を閉じ込めた檻とお竜を閉じ込めた檻の三箇所から激
しい息遣いと嬌声が牢内に飢していた。

そんな様子を牢内各所に仕込まれた監視カメラを通して、剛沢や大亜門戸会の男達が酒を嘗
めながら面白そうに眺めるのであった。

今日も、父親の上に騎上位となった暁美が、父親の巨大な分身を下腹に収め、上下に体を揺すっていた。

「どうでい、製造元のオ●ンだけあって、お前のオ●コにぴったり嵌るだろう？」と、傍で、二人の交接を見守りながら、剛沢が笑って声を掛けた。

暁美は、そんな剛沢の卑猥な揶揄も気にならないように、今日もさつきまで抱かれていた男達とは違う、逞しくも優しい父の分身に、変態的性欲に狂った連中に傷付けられた心と肉体の癒しを求めるかのように夢中で腰を振り続けていた。

快感を更に昂めるために、自分で乳房を揉みしだき、股間に指を這わせて自らの肉芽を刺激して時には甘く、時には激しい喘ぎ声を上げ続けるのだった。

「まったく・・・嬉しそうに涎を垂らしながら、大声で喘ぎ声を上げやがって・・・下からはアクメ汁を潮みたいに吹き出しやがて・・・盛りの付いた犬みたいに嫌らしい牝の臭いが全身からプンプンしやがるぜ。・・・全くお前も恥知らずな獣以下の牝に成り下がりやがったぜ。ここに連れ込まれた当時は、オッパイ触られただけでも悲鳴を上げていやがったのがよー！今では自分から進んで、自分の親父と繋がっているんだからよー！」

剛沢は憑かれたように実の父親との肉欲に浸り続ける暁美を揶揄し続けたが、快感に没頭する暁美には聞こえないのか、何の反応も示さず、父親の上で激しく腰を振り続けるのであった。

そんな自分を無視するような暁美の態度に敵愾心を燃やした剛沢は、黙って二人が行為を続けるベッドの上に上がって来た。

そして、いきなり暁美の背中を押し倒した。

父親の上に前屈みに倒れて、豊かな尻周りが持ち上げられ、逞しい父親の男根で貫かれる、女の花園がハッキリと剛沢の目に映った。

剛沢に押し倒されても、肉欲に溺れる暁美はそれでも、父親のモノを喰い絞め続けていた。そして鍛えられたその秘孔の筋肉を駆使して、父親の物を締め上げる際に、後ろの穴も歩調を合わせるようにピクピクと収縮を見せていた。

肉欲に狂う男と女の吹き出した、粘っこい二人の愛液が混じり合い、暁美の菊花の回りもまるで刷毛で塗り立てたように嫌らしく艶々と輝いていた。

卑猥な刺青をその周囲に施されて、ネットリとした濃厚な粘液の中で、海底に住む軟体動物の口腔のように柔らかく収縮を繰り返すその部分を注視している内に、剛沢の獣欲が沸き上

がって来た。

ズボンのチャックを下ろすと、いきり立つ自らの物を取り出した。そして、それを空き家になっている後ろの門に挿入し初めた。

二つの人並み外れた大きな物を前後に受けて、そのはち切れそうな張力に、始めて曉美が悲鳴を上げた。

剛沢は調教により鍛えられた、肛門と直腸の強い締め付け力を堪能し、前後に体を揺すりながら、

「これで、俺とお前の親父は娘を仲立ちとして目出度く穴兄弟という訳だ。これからお前は調教された技術を駆使し、前と後ろの穴を上手に使って、二人を同時にイカせるんだ！失敗したら出来るまで何度でもやらせるからな！」と、曉美の後ろを激しく突き立てながら脅した。

父親との愛欲に没頭して、全てを忘れていた所に、剛沢から後ろを突き立てられ一瞬我に返った曉美ではあったが、再び二つの男の武器が掻き立てる痺れるような肉感に巻き込まれて行った。

巨大な二つの逸物に、前後の穴を塞がれ、息も止まるような激痛と其処からか沸き上がる得体の知れない痛烈な快美感に翻弄されながらも、女肉の本能に突き動かされ、最早押し止める事は不可能なように、体に叩き込まれた技術を駆使して前と後ろの筋肉を同時にあるいは別々に動かし、男達を同時にフィニッシュに導くべく懸命の努力を続けた。

全身に汗を浮かべ、苦悶の表情を浮かべて、体を身悶えさせ、二人の男を追い上げようと必死の努力をする曉美の姿を、晴江もお竜も声も無く、ただじっと見守るしかなかった。

腰を振り、尻を押し付け、剛沢の快感を煽り立てようとする曉美の努力が、功を奏して、剛沢も次第に荒い鼻息を吐き始めるように成って来た。

そして、父親の方も硬度が一層高くなり、心なしか体内で大きく膨らんだように感じ、ゴールに近いことを感じ取った。

曉美は最後に残された力を出し切り、剛沢が自らの分身を埋設する後ろの器官を強く振り絞った。

剛沢もかつて経験したことの無い、強いリズムカルな締め付けに、股間から脊髄を通して、一機に脳天に突き上げるような鋭い快感を感じて、曉美の腸内に夥しい精液を放出した。そして、同時に父親も獣のような呻きを上げて、曉美の膣内に激しく精液を放出した。

二人の男の性を同時に絞り出した曉美は、精魂尽きたようにぐったりと倒れ込み、ハアハア

と肩で息を吐いていた。

そんな暁美に、未だに体内に肉塊を残したまま剛沢が、「良くやった、これで俺たちは晴れて穴兄弟だ！」と、嬉しそうに笑い声を掛けた。

診察室にて

「おや！これは元目高組の姐さん達じゃないか？」

晴江とお竜と暁美の3人が、週に一度の検診のため大亜門戸会の三下達に引き立てられて、和久井医師の診察室に入ろうとした時、丁度診察室から別の三下に引きずられるように出て来た女とすれ違った。

女は随分と身体の具合が悪いか、頬骨が突き出る程痩せこけた頬で、落ち窪んだ眼窩の奥で異様に大きな丸い目がギラギラと光り、顔色は土色をして、金色に染めた髪の毛はバサバサに荒れており、粗末な薄いワンピース越しに骨張ったやせ衰えた身体が分かった。

晴江達は、大方この女は、大亜門戸会の売春婦で、和久井医師の性病診断を受けに来ていたのだらうと思ったが、こんな病的な女にまで大亜門戸会は売春をやらせているのかと思うと暗い気持ちになった。

女は鉢合わせした診察室の戸口に立ったまま、敵意の籠もった目で全裸の三人を睨み付けていた。

「あの時は、目高組の女親分です・・てな顔をして、偉そうにふんぞり返っていたのに、笑わせるじゃないか！今では、自分達が、大亜門戸会の売春婦に落ちぶれて、毎日変態男達の相手をしているなんて！」と、三人を睨み付けたまま甲高い声で笑い出した。

三人には憎悪の籠もった目で睨み付け、自分達を蔑むようにヒステリックに笑い立てるこの女に見覚えが無かったので、訝しそうに女を見詰めていた。

「私の顔に見覚えが無いと言うのかい？流石は、偉い女親分さん達だよ！チンケな売春婦の顔など覚える気もないんだろうよ！・・あの時、騙されて目高組に誘拐されてしまった為に、娼婦にされてしまった麗夜だよ！」

女の振り絞る様な怒気を孕んだ呻き声の様な声を聞いて、晴江達は麗夜の事を思い出した。そして、そのあまりの変わりように驚いて息を呑んだ。

これが、目高組の事務所に連れ込まれ、ヤクザ者達に取り囲まれて、怯えた目で身体を縮め

て震えていた家出娘の変わり果てた姿であったとは！

しかし、この変わり様はどうだろうと思った。

あの時は未だ幼さを残す少女であり、顔にも身体にも若さ故の張りがあったが、今はそのような精気は感じられず、痩せさらばえ、70歳の老婆の様にも見えた。

「誘拐したのは目高組だったが、どういう訳か大亜門戸会の男達から輪姦されて、それから大亜門戸会の監視の下に、毎日休む間も無く、飢えた男達に身体を売る人生さ！」

麗夜は振り絞るような声でまくし立てた。

「だけど、あんた達はどうか！あんた達が客に抱かれる所のビデオを見せて貰ったことがあるよ！あんた達はケツの穴の周りにイヤらしい刺青を入れて貰って、得意そうに尻を振って客に見せびらかして、綺麗に刺青した穴を掘って貰ってヨガリ声を上げたり、客の目の前で大きな尻を開いて、嬉しそうに刺青した穴からウンコをひり出したり、大股おっぴろげて小便をしたり、鶏みたいに前の穴からも後ろの穴からも卵を産んでみたり・・・犬や猫じゃあるまいし、私にはそんな事は、恥ずかしくてとても出来ないね！あんた達は売春婦の中でも最低の売春婦さ！」と、ヒステリックに笑い立てながら晴江達を激しく罵倒するのであった。麗夜の怒りの籠もった誹謗や罵倒は、止まることは無かったが、大亜門戸会の男達に無理矢理引きずられるように連れて行かれ、廊下の角を曲がって完全に姿が見えなくなるまで、ヒステリックな声で泣き笑いしながら、あらゆる罵詈雑言を浴びせ続け、三人の心を掻きむしり続けるのであった。

晴江、曉美の順番で和久井医師の診察を受け、今はお竜が検診台の上に上げられていた。

産婦人科で使うような診察椅子に縛り付けられ、両脚を大きく広げて脚載台に取り付けられた皮ベルトで固定されたまま、剥き出しの股間を和久井の方に向けていた。

和久井は極めて事務的な態度で、血液を採ったり、乳癌の診断と称してお竜の豊かな両乳房を揉み上げたり、妖しげな器具を股間に突き立てたり、肛門に挿入したりして、入り口を押し広げ懐中電灯でほの暗い内部を照らしその内部の様子を観察した。

医者なのに自分の身体の体調管理する意志は無いのか、何時も大酒を食らい、酒臭い息を吐きながらお竜の股間を検める姿があった。

剛沢とたいして年齢は違わないはずであるが、薄い髪を残しただけで地肌が見える禿げた広い額をして、落ちくぼんだ眼窩の中の腐りかけの魚のような目で、じっとお竜の局部を見詰める和久井の顔は、その張った頬骨や歯並びの悪い出っ歯の上顎の形状から頭蓋骨の上に薄

い皮を被せただけの死人の様な気味の悪さを女達は感じていた。

その死人のような不気味な顔を広げ切った股間に押し当てるように近付け、手にした懐中電灯で照らしながら、しげしげとその内部を観察したり、綿棒のような物で敏感な内部の襞を掻き回して分泌物を採取して、その臭いを嗅いだりするような仕草に堪えられない羞恥と嫌悪感を感じた。

嘘か真か分からないが、聞いた話では和久井という男は誰でも知っているような有名な国立医大を出て、将来を嘱望された有能な医者であったと謂うことだ。

ところが、その優秀さに嫉妬して、将来の自分の椅子が危うくなるのでは無いかと恐れた大学病院のボスから疎まれ、病院で医療ミスが露見して新聞ネタになった時に、濡れ衣ではあったが、その責任を押し付けられ病院を叩き出されたのだと教えられた。

挫折を知らずにここまで来た和久井は、生まれて初めての挫折に堪えられず、酒浸りの荒れた生活をしていたところを剛沢に見いだされて、大亜門戸会の面倒を見るようになったとの話であった。

いつもの一連の検診が終わって、和久井が「さて、この後ちょっと医学的実験に付き合っ貰おうか。」と呟く様に口にした時、女達をこの診察室まで連行して来て、そのまま検診の様子を見学していた三下達から「待ってました！」と、歓声が上がった。

男達は和久井の診察中に女達が暴れ出して逃亡を図らないように監視すると言う指命を与えられて留まっていたのだが、もう一つ和久井の言う医学的実験を見ることを楽しみにして、今まで診察室の隅でじっと待っていた一と、というのがもう一つの理由だった。

診察椅子に固定されて、股間を男達の方に晒しながら身動き出来ないお竜は、また新たな和久井による加虐が加えられるのかと思うと暗い気持ちになった。

「お前達は大人のオモチャの製造が薬事法と言う法律の規制を受けるのを知っているか？」

と、見物の男達に和久井が問い掛けたので、見物の三下達がキョトンとした顔をした。

「もっともアダルトショップで売られている殆どの性具は、薬事法に関係無くモグリで製造した物ばかりだがな・・・

どういう訳か、内のボスは法律に煩い処があって、医者なら薬事法にも詳しいだろうと、儼に新しい性具の開発をさせおる・・・」と、男達を見回して小さく笑いながら言うのだった。

「前回試したバイブ付きの手袋は・・・」と、和久井が口にした時、お竜達は前回和久井に責められた時の事を思い出した。

それは、外科手術の時に使うようなゴム手袋の指や掌に幾つもの小型の振動装置を取り付けた手袋で、その手袋でまさぐられ、鋭い刺激に煽り立てられたことがあった。

棒状のバイブを肌に押し当てられただけでは、微妙な女体に上手く刺激を伝えることは出来ないが、絶妙な感触で器用に性感帯を撫で回す両手の指がバイブの振動を併せ持って性感を刺激するため、柔らかく乳房を揉み立てられると自然にその振動で乳首が起立し始め、秘部に指を突き入れら、その性感神経の集中した部分を搔き立てられ愛撫された時、繊細な指の動きとバイブの振動が組み合わせたり、堪えようとしても思わず短時間で絶頂に達してしまったことがあった。

「・・・何と言っても手袋に覆われて手が暑いし、振動で手が痒くなって来るし、お前達は随分感じたかも知れないが、こっちは手袋越しで、肝心な所を撫でてもちっとも気持ち良く無いし・・・まだまだ検討しなくてはならないことが一杯だな。」と、肩を落としてしながら呟いた。

「そこで、あれの開発はしばらく置いておくとして、今度の新しい性具はこれだ。」と壁際の棚の扉を開くと何やら細くて長いゴムホースのような物を手に取った。

見物の男達も何が出て来たのだろうと、興味深げにしなやかにブラブラと揺れる長いホースに興味深げに見詰めた。

「お前達はこれまでヴァギナやアヌスにバイブを突っ込まれて随分悶えたと思うが、これはもう一つの穴である尿道に突っ込むバイブだ。」

細くてしなやかに揺れる飴色のゴムチューブを検診台の上で身動き出来ないお竜に見せ付けながら言った。

「性のベテランのお前達と言えども、尿道の性感を開発されたことは無いだろう・・・尿道から膀胱まで刺激されたらどんな風を感じるかな？」

怯えた目をするお竜をニヤッと冷たい微笑みを浮かべて言った。

「元々これは導尿用カテーテルの先端を盲管にして、中に柔らかいシリコン樹脂を流し込んで、細いステンレス線をバネの様に巻いて作ったコイルを埋め込んだ物だ。」と、チューブの先端に薄くジェリーを塗すと、医者らしい慣れた手つきで、お竜の秘孔の上にある尿道口を器用に探し当て、その中に挿入し始めた。

敏感な神経を散りばめたような所に、ゴムチューブをいきなりねじ込まれ、お竜が腰をブルブルと震わせ、「イヤ、イヤ・・・怖いわ!」と、涙声で悲鳴を上げた。

かつての鉄火女の面影も失い、まるでか弱い少女の様に怯えて腰を震わせる涙声のお竜をあやすように尿道に異物を挿入する和久井の様子に、周囲を取り囲む男達は卑猥な笑みを浮かべて見守った。

細い尿管にゴムチューブを繰り入れられる痛感と気味の悪さに、額にビッシヨリと汗を浮かべ、ブルブルと腰を悶えさせるお竜に、

「大丈夫だ！僕は医者だ。こんな事は慣れておる・・・」

と、呟きながら、見る見るそのチューブをお竜の体内に押し込んで行った。

もう、その先端は尿道を通り抜けて膀胱にまで達しているはずだった。

狭い尿管に不気味なゴム管を和久井の手で押し込まれて行く度に、身悶えるお竜の様子を不安そうに見守る晴江と暁美の視線に気付いた和久井は、二人の方に振り向くと、「心配しなくても、お前ら二人用の尿道パイプも用意してあるからな。お竜でテストが旨く行ったら、そこの子分達に啜えさせてもらえ。」

と、煙草のヤニで黄色くなった歯を剥き出して笑いかけた。

お竜の剥き出しの股間に開いた秘孔のわずか上の箇所から、尿道口をピッタリと塞ぐように太さ数ミリの飴色のゴムチューブが垂れさがっていた。

「さあ、用意は出来た。心の準備は良いか？」

和久井が薄い唇を歪めてニヤッと笑った。

不安と尿道からこみ上げる違和感に、怯えた表情で、小さく悶えるお竜に告げると、ゴムチューブの端から出ているバネの様に巻いた細いステンレス線に電動の振動装置を接続した。和久井がスイッチを入れると、細いステンレス線のコイルを通して、振動がお竜の尿道内に注ぎ込まれた。

その強烈な刺激に、ヒューッと、お竜が悲鳴を上げて身体を硬直させた。

男達もお竜の激しく悶絶する姿を固唾を飲んで見守った。

強く排尿する際に、その圧力や尿の流れる振動を変な快感を伴って尿管に感じる事はあるが、今はその数百倍強い刺激がお竜の細い尿管を責め立て、さらに膀胱にまで達したパイプの先端は膀胱内の残尿を掻き回し、泡立て、膀胱に急激な圧力上昇を招いていることを身をもって感じた。

余りの強烈な刺激に膀胱が反射的に収縮し、肉体は失禁寸前の状態となったが、尿道をピッタリと塞ぐゴム管が尿の流失を封じ込めていた。

和久井は振動装置を操作して、振動を強くしたり弱くしたり早くしたり遅くしたりしてお竜の反応を確かめた。

お竜は和久井に操作されながら、内部から突き上げる激しい苦痛に堪えられないかのように苦悶の表情を浮かべて、ヒィヒィと悲鳴を上げながら、顔を激しく左右に振り立てた。

和久井には大学病院時代に良い仲になった若い美貌の女医がいたが、身に覚えのない責任を押し被され病院を追い出された時、彼女はさっさと和久井を見限り、別の医師と結婚してしまったことがあった。

それ以来和久井は極度の女性不信に陥り、女性を心から愛する事は出来なくなり、ただ女体を肉体的に翻弄することにだけ喜びを感じるようになっていた。

目の前で額にビッショリと汗を浮かべて苦悶するお竜の顔を見ていると、何故か自分を振った女医の面影が浮かび、秘めた心の傷が痛み出した。

その苦い思い出を振り払おうと、女体に肉体的苦痛を与えることにより、自分の精神的苦痛を癒そうとするかのように益々強く責めたてるのであった。

これまで未開拓な箇所を責め立てられ、激しい苦痛に喘いでいたお竜は、下半身が痺れたようになって、何時の間にか苦痛を越えた快美感のような物を感じ始めていた。

尿道から膀胱にかけて意地悪な振動を送り続けられ、和久井の手によりこれまで未開発の新しい性感が呼び覚まされつつあるようなものを心の隅で感じて、その恐ろしさを拭うように顔をブルッと振った。

ブルブルと痙攣する豊かな乳房の先端で乳首が硬く屹立し、何時の間にか股間は豊かな樹液を湧き出して熱く湿り、股間の木の芽が包皮を破って隆起するのを感じた。

浜に打ち上げられた魚が空気を求めて口をパクパクする様に、口を開いて切なげに息を吐いたり、込み上げる刺激をジッと堪える様に口を硬く噛みしめたりを繰り返す様になっていた。尿道のわずか下を通る膣孔には、その振動は伝わって来るが、其処に何も食い絞める物が無い空虚感に、自律的に肉洞の周りの筋肉が動き始め、激しく愛液を吐出し始めるのが分かった。

そして、その膣孔の動きは同じ筋肉で繋がる肛門にも伝わり尿道パイプの振動と同調するかのようにピクピクとその蕾を収縮させた。

膣孔から滴り始めた愛液や、軟体動物の口腔のように妖しく蠢く肛門の収縮を見て、和久井

は今やお竜が尿道パイプの刺激を苦痛から快感として受け入れ始めたことに気付いた。

「そうかい？そんなに気持ちが良いかい？それならこちらの穴にも何か入れてあげようかね・・・」と言うと、大小二本のパイプを手に持ち、既に受け入れ準備の出来ている二つの穴に突き立てた。

パイプを根元まで突き刺してスイッチを入れると、その前中後三カ所からの振動をまともに受けて、お竜の脳内には激しい電流が流れたように痺れて、目の前が突然真っ暗になった・・・

凄まじい絶叫を残して、白目を剥いたまま、診察台の上でガックリと動かなくなったお竜の様子を晴江と暁美の母子は互いに身体を寄せ合いガタガタと身体を震わせながら注視していた。

男達もお竜の激しい絶頂の姿を目にして興奮して立ち尽くしていた。

弛緩した筋肉により、膣腔と肛口から二つのパイプが溢れ落ちた。

和久井が、未だに意識の無いお竜の尿管から尿道パイプを引き抜きに掛かった。

ズルズルと長いゴムチューブを引き摺られる度に尿管に反射的刺激が与えられるのか、下腹がビクビクと痙攣した。

こんなにも長いものがお竜の身体の中に埋め込まれていたのかと、男達が目を瞠った。

チューブの先端がお竜の身体から抜き取られる間際に和久井がお竜の股間にガラスのビーカーを押し当てた。

スポンと音を立てて先端が丸くなった尿道パイプが完全に抜き取られた。

その後には大きな虚ろな穴が開孔していた。

パイプの刺激により膀胱に溜まっていた尿が突然激しく噴き出し、和久井の手にするビーカーの中に流れ込んで行った。

渦を巻いて流れ込む黄色い液体を男達は目を瞠って見詰め続けた。

「さて、」と、一言云うと未だ意識の無いお竜を残して、周囲を取り囲む男達を見回すすと、

「まだ尿道パイプは二つ残っておる・・・どうじゃお前達もやって見るか？」

と、細長いゴムチューブを両手にブラブラさせながら男達に問い掛けた。

男達は残忍な目の色を浮かべて、お竜の凄まじい崩壊の姿を目にして恐怖に竦み上がって互いに抱き合い身を震わせる母娘をジッと見詰めた。

「そうか・・・麗夜はもう駄目か・・・」

和久井の検診の報告を受けて、剛沢が呟くように言った。

「ええ、エイズ検査の結果は陽性でした。麻薬の常習者ですから体力や抵抗力も弱く、進行は普通の人より非常に早いようです。」

剛沢は和久井の説明を聞きながら、大亜門戸会の娼婦にされてから、その苦しさから逃避するために、自分の肉体を男達に提供して得た、わずかばかりの金を麻薬に替えて注射^{ウチ}続けたことを思い出していた。

「原因は何だ？」と、鋭い目で和久井を見詰めた。

「はい、ご存じの様に現在大亜門戸会には三つの売春組織が在ります。一つは目高組が岡照組との抗争で勝利した時に戦利品として受け継いだS市内に在る秘密の会員制ソープ・・・これは目高組が解散した時に管理する組員ごと内で引き継いだ訳ですが・・・」

「現在、内田と山崎に運営を任かせている会員制ソープだな。」

「はい、こちらは財界や政界に關係する様な大物も顧客に含む特上の客筋を相手にする組織なので、万一の事が無い様、娼婦が変な病気に罹っていないか定期的に検診しております。もう一つは元目高組の三人の為にこの屋敷の中に作った、主に裏筋の超特別な客を相手にする売春組織。こちらも裏世界の超大物が相手ですので、必ず週一度は検診しますし、身近なだけに私も暇が在れば女達の様子をそれとなく注意して見ております。

最後は、目高組が昔から經營していた売春宿です・・・」

「皐月と菖蒲が遣り手をやっている売春宿だな。」

「はい、こちらは麗夜も含め、抱える売春婦の数も一番多く、安い金額で雑多な客に身体を切り売りするため客筋も悪く、安い金で女を抱きたい客の中には病気を持った男が紛れ込むリスクは常にあります。いくら私が暇そうに見えても、定期的に所属する大勢の女を一々性病検査をする時間は在りませんから、性病に罹患するリスクは除く事は困難です。あと・・・売春宿の娼婦達は多かれ少なかれ皆ヤク中ですから、注射器を回して使っている内に注射針から伝染することもあるようです。」

「よし！分かった、和久井先生も忙しいと思うが、売春宿の全員を直ちに検査だ！皐月と菖蒲に連絡しておく！」

剛沢が声を上げた。

「目高組の女達は性病の兆候も無く、健康状態も良好です・・・」

麗夜の説明が終わって、今度は晴江達の検診結果を報告した。

「特に晴江さんなどは、常時性器に性的刺激を受け続けてアソコが鍛えられていることに加え、常にホルモン投与やコラーゲンやヒyaluron酸の注入をしているので、アソコの若さや柔軟さは20代後半の女性に充分匹敵します・・・」

暇があれば目高組の女達を抱き、晴江達のソコの出来の良さを良く理解している剛沢が、

「最近の柔な若い女よりは、晴江の方がずっと絞まりも弾力も濡れようも良いぜ！」

と、上機嫌で和久井の説明に肯いた。

「お竜さんのアノ部分も充分20代始めの若さを保っています。」

お竜が暁美にアノ部分の若さでは、タメを張れると言う訳か、と剛沢が可笑しそうに腹を抱えて笑った。

「ただ・・・」

と、ぽつりと言うと和久井の顔が曇もった。

そして、剛沢に顔を近づけると、耳元で何か小さく告げた。

「何？妊娠しているだと！」

剛沢が驚いて大きな声を上げた。

「ええ、間違いありません。前回の検査では、兆候はありませんでしたから、恐らくこの数日の間に受精して着床したものと思います。もちろん本人も自分が妊娠していることに、まだ気付いていません。・・・どうします？ 他の娼婦のように墮胎させますか？今なら簡単に流せますが・・・」

剛沢の顔を見詰めながら問い掛けた。

剛沢は少し考える素振りをして、

「・・・いや、そのままにして置こう・・・。彼女奴らに母となる喜びってヤツを教えてやろうじゃないか。」と、ニヤツと口元を歪めながら言った。

哀哭の代紋 ー完全なる敗北

妊娠9ヶ月目に入り、臨月を間近に迎え、大きく張り出したお竜の腹を撫で回しながら、剛沢が「オッ！また動いた！」と、嬉しそうな声を上げた。

「オッ！今度は俺のチン■を蹴飛ばしたぜ！子宮^{おなか}の中の子が、ここから出て行けと言っているようだぜ！」

お竜の菊座に深々と自分のモノを突き立てた剛沢が笑い声を上げた。

剛沢はお竜の檻の中に置かれた豪華なベッドに腰を降ろして、自分の膝の上にお竜の尻を乗せ上げ、後ろからお竜の肉体を占領したまま、今にも出産を迎えそうな大きく肥大した腹を撫で回しているのであった。

お竜にしてみれば巨大な剛沢の一物に腸内^{うしろ}から圧迫されるお腹の中の子が苦しんでいるのではないかと気が気ではなかった。

子宮が膨らみお竜の下腹はとても男のモノを迎え入れる余裕は無かったが、剛沢の業物は易々と淫肉の抵抗を排して後ろから刺し貫いていたのであった。

「全く毎日毎晩、朝から夜中まで、フンフン鼻を鳴らして嬉しそうに腰を振って、股の間をビショビショにして、大声でヨガリ声を上げる程お客から楽しませてもらっているながら、その上子供まで授けて貰えるなんて、こっちが感謝されたいくらいだぜ！」

この地獄の屋敷から生きて出られる希望も遠に無くし、毎日休むこと無く与えられる加虐の責め苦を性的快感に代えて、唯一それに縋ることによりこれまで生き存えて来た女達の心を更にいたぶるように言葉を浴びせた。

「お前も早く元気な子供を産むんだぜ。子供が生まれれば、養育費や何やらで、沢山金が掛かるようになるから、今まで以上に一生懸命励んで稼がなければならなくなるな。」

と、大きなお腹を抱えて苦しそうに息をするお竜に声を掛けた。

「しかしまあ、良かったじゃないか？生まれてくる子はどうやら女の子のようだから、将来借金の肩代わりもしてくれるかも知れないぞ。」

嬉しそうに言いながら、心の中で、生まれた子供を人質に取れば、女達も今後二度と逆らう事は出来なくなり、言われるまま体を売り続けるしか無いだろうし、妊娠中は妊婦好きの変態客に抱かせて、臨月になったら変態客を集めて出産ショーを開き、子供が大きくなったら、幼児好きの変態客の相手にさせようと、算盤を弾くのであった。

事実、大きなお腹を抱えたお竜は、ついさつきまで、そんな変態客に抱かれて、今やっと自分の檻に連れ戻されて来たばかりであった。

変態客に弄ばれて、疲労した身体を休む暇も与えず撫で回すイヤらしい剛沢の手の感触が、さっきまでの忌まわし記憶を蘇らせた。

ー 子宮が下まで降りて来て、膣腔を押しつぶし、バイブが途中で止まってしまう奥まで入らないのを、力尽くで無理矢理奥まで押し込もうとする凶暴な客に、お腹の子を傷付けられるのでは無いかと思わず激しい悲鳴を上た。

しかし、そんなお竜の哀願に充ちた悲鳴も、加虐者にとって心地良い響きに聞こえるのか、さらなる虐待の呼び水にしかならないのか、男は更に強い力で押し込み、バイブの震度を強くさせるのだった。

バイブの激しい振動が子宮内の胎児に悪影響を及ぼさないか心配になったが、頭の禿げ上がった中年の変態客はバイブを強く突き立てて、胎児の事を構う素振りも見せず、ただ自分の残忍な欲望に突き動かされるようにお竜を責め立てた。

臨月も迫り、ホルモンバランスも変わって、元々豊かであったお竜の胸は一際肥大し、その先端の乳輪を拡大し、乳首を薄黒く染めて屹立させていた。

男はベッドの縁に腰を降ろし、お竜を自分の膝の上に載せ、背面座位で責め立てていたが、バイブを股間に残したまま、背後からお竜の肥大した両乳房を思い切り握り締めた。

男の強い握力にお竜は思わず悲鳴を上げたが、男は構わずに力一杯乳房を揉み上げ続けた。

ひしひしと拉やげる様に乳房が押し潰され、搾り上げられた乳房の先端から突き出した乳首から液体がほとばしった。

オオッ！と男が感動した様に叫び声を上げた。

成熟したお竜の体は、お竜の心を裏切って少しずつだが確実に母となる準備を進めていたのだった。

そんな母乳を滲ませる大きな乳房に目を奪われ男は、お竜の膣孔をバイブで責めたてながら、乳房に武者ぶり付き、二つの乳首を交互に口に頬張った。

授乳の準備が整い始めた女体からは、微かに母乳が染み出し、その甘美な味覚に男は夢中で音を鳴らして舌を舐めさせた。

そして、更に食欲に母乳を漁る様、乳首を口に咥えたまま思い切り乳房を搾り上げ、お竜の苦痛の呻き声を上げさせながら吸い続けた。

ひといきりお竜の母乳を楽しんだ男は、劣情に振るい立つ自分のモノを収めようとお竜の身体を見回した。

前の穴は既に降りて来た子宮に押しつぶされ、自分のモノの先端部分しか収める事が出来ないのは判っていたので、男は卑猥な刺青を施された後ろの蕾に狙いを定めると、背後から自分の物をしっかりと押し付け、お竜の肉穴の抵抗を楽しみながらズブズブと埋没作業にかかった。

いまだ前門を責め続けるバイブの振動が、薄い隔壁一枚を通してズブズブと浸透していく分身に心地良い刺激を与えた。

大きく膨張した子宮がここでも行く手を遮るように、男の怒張に圧力を与えた。

そして、バイブの振動に驚いたのか、子袋の中で藻掻くように動く胎児の動きが、いきり立つモノの先端に感じ、思わず快感の絶頂に達した男は、お竜の腸内に激しく白濁した液を吹き付けたのだった。

お竜の体内に劣欲の情を注ぎ込み、少し落ち着きを取り戻した男は、お竜を自分の膝の上から降ろした。

そして、お竜の前門を責め立て、夥しい愛液を汲み出していたバイブを引き抜いて、「お前にお産の練習をさせてやろう」と言って、ゆで卵が何個も入った策を手にとった。

その中から特に大振りな一個を取り出すと、お竜の牝芯にあてがった。

実際のお産の際の様にベッドの上で大腿を開いた姿勢を取らせて、「ほら、早く飲み込むんだ！」と督促するようにお竜の尻を叩いた。

お竜は、ほっと溜息を吐くと、大金を叩いて一時の間自分の全てを買い上げた絶対的支配者の嫌らしい欲望を前にして全てを諦めたように、自らの女陰の緊張を解き、その秘孔を開くと、鍛えられた技術により卵をスルスルと体内に吸い上げて行き、やがて、その姿を完全に没するのであった。

膣壁の筋肉を動かす時に子宮の筋肉が収縮して下腹に痛みが襲った。

下腹を突き上げる苦痛に、お竜が脂汗を浮かべて顔を苦しげに歪めるのも気にならないかのように男は、さあ、早く産んでみろ！とお竜の下腹を掌でぐっと押さえた。

お竜の女陰の襞が大きく広がり、卵がその白い姿を見せて、やがて大きく表にせり出して来る様子を、男は憑かれたような目で見続けた。

ネバネバとした陰液に濡れて輝る卵を待ち受ける男の掌の上に生み終えた時、男は可笑しそうに大声を上げて笑った。

苦しい産卵を終えた後も、男は粘液に濡れ輝る卵をお竜の体内に戻し、何度もお産の練習をさせた。

「お前は器用に後ろからも卵を産めるそうだな？今度はこちらから産んでみろ！」

お竜に何度も前の穴から産卵させて、満足した男は、ベッドの上にお竜を犬の様に四つん這いの姿勢にして、今度は後ろの穴にゆで卵をあてがった。

迫り出した子宮が腸管を圧迫し、卵の侵入を強い力で阻止したが、男は構うこと無く

お竜の喘ぎ声を嬉しそう聞きながらに力任せに押し込んだ。

大きく開いた菊門が卵を受け入れ、無理矢理男が中に押し込んだ後は、何事も無かった様にピッタリと閉じ合わされた。

その埋設作業に満足した様に、「ほら、産んでみろ！」と、嵩に掛かった様な声を上げて、竜の尻をピンチャリと叩いた。

菊門の皺を押し広げ、卵がその白い姿を内部から現し始めた。

内部から捲れ上がるように、信じられない程大きく開いた肉の扉を見詰めて、

「こんなに大きく開くのなら、ケツの穴からでも子供が産めるだろう？」と笑い声を上げた。

男が大声で卑猥な笑い声を上げる中で、今度は後ろの穴を使った産卵をさせられるお竜であった。

そして、最後に男は前後の穴に同時に卵を押し込み、前の穴と後ろの穴から交互に産卵をさせたりした。

こうして、男の見守る前で嘲笑を浴びながら、汗まみれになり、苦痛とそれを超越した不思議な快美感に意識が遠くなるまでお産の練習を繰り返されたのだったー

剛沢は、ひとしきりお竜の大きく膨らんだ腹を撫でまわした後、満足したようにお竜を閉じ込めた檻を出て、晴江の入る檻の方に目をやった。

「どうだ？お前も未だ未だ若い体をしているのだから、まだ子供の二人や三人くらい作れるんじゃないか？」と、妊娠の兆候の無い晴江の下腹を眺めながら、今度は晴江に話しかけた。

「お前も目出度く、おばあちゃんになったんだから、孫よりも若い子供を産んで、自分も、まだまだと言う所をアピールしてみたらどうだ？」と、上機嫌で話しかけるのであった。

「どうでい？毎日休み無く客とやりまくり過ぎで、逆に子供が出来ないようなら、和久井先生にお願いして、人工授精か体外受精でもやって貰おうか？」

晴江を閉じ込めた檻の鉄格子を掴みながら、こちらに背を向ける晴江に、なおも下劣な言葉を投げ続けるのであった。

これまで剛沢は、口にした事は冗談ではなく実際にやる男だと知っている晴江は、この陰虐

な悪鬼に、無理やり悪魔の子種を胎内に植え付けられるのでは無いかと底知れぬ不安を覚えるのであった。

剛沢のからかいの声に、不吉な言葉を耳にしたように、怯えたように固く顔を背ける晴江であった。

そして、最後に生まれて、100日目を迎えた幼子を抱えて、乳首を与える暁美の檻の方に向かった。

「出産ショーの時はご苦労だったが、お陰でミルクやら育児用品やらを買えるお金が手には入って良かったじゃないか？」

と、その時の酸鼻な光景をニヤニヤ思い出しながら、暁美に声を掛けた。

「これまで散々スケベ親父からぶっといパイプを突っ込まれたりしてヨガリ狂ったマ
[REDACTED] じゃないか、子供を産み落とす時の苦痛も逆に快感に感じたんじゃないか？」

と、大笑いした。

「しかし、お目出度い事は続くって言うけど、お前が妊娠した直ぐ後に、お竜まで妊娠するとは思わなかったぜ。これで晴江も妊娠すれば、お目出度の三連チャンだな・・・」

暁美の乳房を無心に頬張る幼子は、自分が生まれ落ちた悲惨な境遇も知らないかのように幸福そうな顔で乳首を咥えていた。

そんな母子の様子を見ながら、赤ん坊に授乳をするようになって、以前から大きかった暁美の乳房が、また一段と大きくなったように思った。

その時、和久井医師が何やら紙ファイルに綴じられた書類を持って、剛沢の元にやって来た。

「その生まれた、子供の『^{まなみ}愛美』の父親のことですが・・・」と、持って来た書類を剛沢に示しながら説明を始めた。

「先ず、子供の血液型から言っても、愛美の父親が剛沢会長や黄原さんであることはあり得ない。・・・後は、正確にその子の父親を知るには、DNA鑑定と言うことになります。女達には行為が終わった後、膣内に残った精液を採取しておくように命じてありますから、一度に大勢の男を相手にしない限り父親の推定は可能なわけですが・・・」

ニヤッと薄い唇の間から煙草のヤニに染まった黄色い歯を見せると、

「・・・ここで面白い事がわかりました。」

と、書類の記述を指で指し示しながら何やら小声で剛沢に説明した。

その説明を聞き終わって、剛沢が狂ったように笑い出した。

「何！本当か？」と、和久井医師に念を押して確認した。

「はい、現在DNA鑑定の技術は非常に進んでおり、百万人に三人くらいの確率でしか間違えることは無いです。いくらその女達でも百万人も男を相手にしていませんから、百パーセント間違いないと言うことになりますね。」

和久井が胸を張って答えた。

「こいつは面白い事になりやがったぜ！・・・お前の孫だと思っていた愛美は、お前の義理の子に成るのか？それなら生まれて来た子と暁美は義理の姉妹か？」

こちらに背を向ける晴江の方を見ながら大声を上げた。

衝撃的な知らせに、顔色が変わり、凍り付いたように啞然とする晴江の姿を見詰めて、叫ぶように声をかけた剛沢が、次に、面白くて堪らないとでも言うように笑いながら暁美の傍に進んだ。

この悲痛な知らせを聞かされて、耐え難い事実が晴江が両手で顔を押さえて号泣し始めた。お竜も余りの運命の残酷さに肩を振るわせて唇を噛んで下を向いた。

「おい！聞こえねーのか？テメーは、恥ずかしくも無く、実の父親の子を産んだんだぜ！」
驚く様子も無く平然と幼子に乳房を与え続ける暁美の態度が癪に障って、暁美の髪を鷲掴みにして、グイグイしごき上げながら剛沢が怒鳴った。

「そんな事は、どうでも良いことじゃありませんか・・・」

髪を鷲掴みにされたまま、横目で剛沢の目をじっと見つめて艶然と微笑む暁美に気圧されて、思わず髪を離れた隙に、フルッと長い髪をなびかせて頭を振ると、幼子の方に向き直り、慈愛に満ちた目で我が子を眺めながら、幸せそうな顔をして乳首を与え続けるのであったー

裏切りの代紋 完